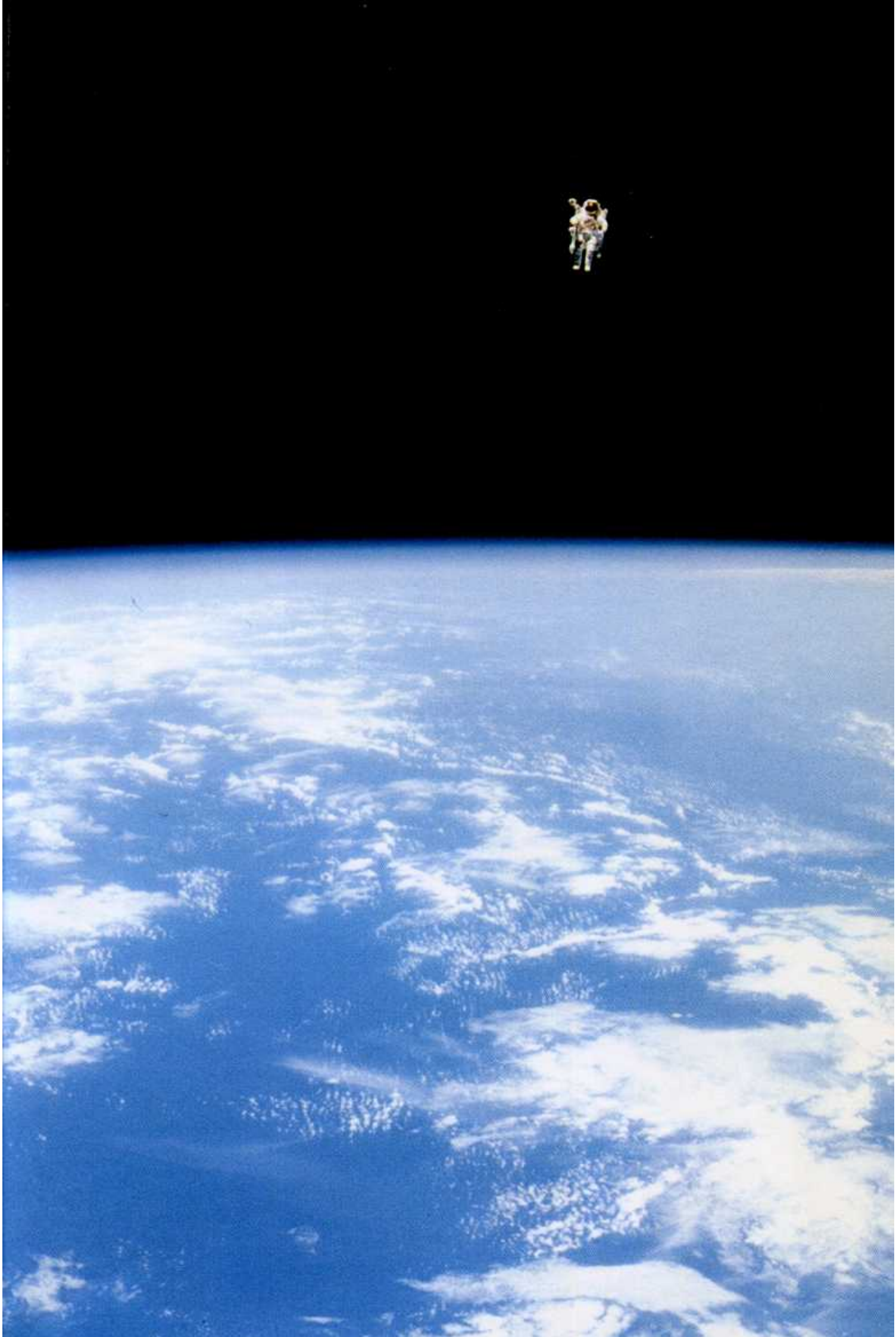
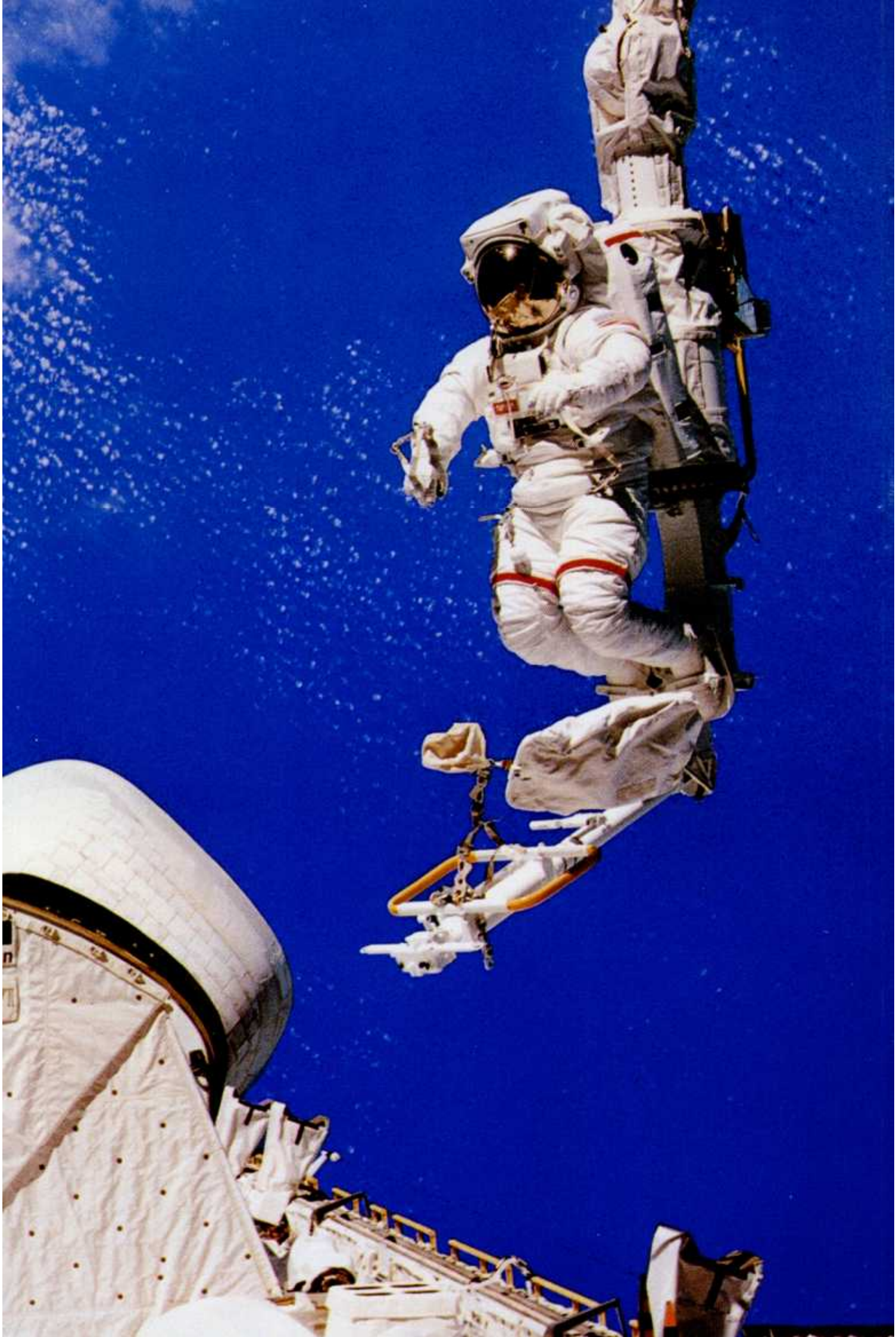
仏法と宇宙を語る

第二巻

池田大作

NASA





第一巻

目次

第一章　「外なる宇宙」と「内なる心」の世界
第二章　宇宙と人間の「根本法」とは何か
第三章　宇宙―その不可思議な法則に迫る
第四章　宇宙にE・Tは存在するか
第五章　仏法と宇宙と人生と(1)
注解

第二巻

目次

第六章　仏法と宇宙と人生と(2)　11
第七章　「死」の実体に迫る仏法の眼　65
第八章　〝生存の危機〟と仏法者の使命　143
第九章　「生死」こそ最後のフロンティア　205
注解　266

第三巻

目次

第十章　太陽の誕生、人生と宇宙の詩
第十一章　宇宙の体験と「空」の哲理
第十二章　核の脅威と仏法の平和論
第十三章　宇宙に生死はあるのか
第十四章　仏法の宇宙観とガリレオ裁判
あとがき
注解
索引

装丁　亀海昌次

写真説明

第一巻

カバー●アポロ11号から撮影した地球。
見返し●アンドロメダ星雲。きょしちょう座の球状星団。
口絵●スペースシャトルの打ち上げ。●大気圏を飛び出すスペースシャトル。●スペースシャトルから撮影したサルガッソー海付近。●アポロから見た地球。

第二巻

カバー●初の命綱なしの完全宇宙遊泳。
カバー袖●ロボットアームで船外活動に出る宇宙飛行士。
見返し●干潟星雲。かに星雲。
口絵●船外活動に出るマスグレイブ宇宙飛行士。●スペースシャトルから90メートルはなれたマッカンドレス宇宙飛行士。●大西洋をバックにロボットアームで作業をするマッカンドレス。●パレット衛星から撮影したスペースシャトル。

第三巻

カバー表●太陽望遠鏡で撮影した太陽のフレアー活動。
カバー裏●木星の衛星。袖●土星とその衛星。
見返し●こぎつね座の惑星状星雲。こと座の環状星雲。
口絵●スカイラブから撮影した太陽のフレアー活動。●バイキング1号が撮影した、火星のユートピア平原。●木星の衛星イオの火山活動。

「仏法と宇宙」を語る

第二巻

対話者

木口勝義（きぐちまさよし）
国際天文連合会員
京都大学理学博士
近畿大学講師

志村栄一（しむらえいいち）
司会・編集構成
潮出版社取締役編集

第六章　仏法と宇宙と人生と(2)

宇宙のロマンと妙法の力

志村（司会）　このたびは「国連平和賞*」の受賞（一九八三年八月、池田名誉会長が受賞）、おめでとうございます。

池田　いや、ありがとうございます。

木口　私も、心からおめでとうございますと申し上げます。

池田　いや、どうもどうも。

――元総理の岸（信介）さんや福田（赳夫）さんは、人口問題で受賞されましたね。また、その他の方々は、婦人問題、ＷＨＯ（世界保健機構）とかで受賞していますが、名誉会長は、平和問題、核軍縮という国連本来の眼目としての受賞といえますね。

木口　当然のことですが、すばらしいことです。

池田　いや、どうもどうも。

「核」は、人類に不幸をもたらす元凶である。これからも私は、仏法者として軍縮ならびに核廃絶に死力をつくしていく決心です。全人類が、核廃絶を無条件でとなえれば、いかなる権力者もそうせざるをえないからです。

―この連載も六回目を迎えることができ、予想以上の好評に驚いています。

木口　本当によかったと思います。友人なども関心を示してきたようです。

池田　それはそれは、ともかく、評判がよくてなによりです。本来の目的が、達成されそうになってきたわけですね。（笑）

木口　私も毎月、回をかさねるにつれ『仏法と宇宙』の関連性が、しだいに鮮明になってきた気がします。たいへんな経験となりました。

―宇宙というと、いつの時代も、人びとは大いなるロマンをえがいてきましたね。

木口　そうですね。その宇宙のロマンも志ある人びと、たとえば哲学者も詩人も芸術家も、また科学者も、即人生観となり、その自身の生きる糧となっておりますね。

平和問題，核軍縮などに大きな貢献があったとして，池田大作氏（右）に国連平和賞が贈られた。

池田　そうです。宇宙という生命の大空間に、自己が生きていることの証を求めるような、たくましい生命の脈動は、おのずと境涯をたかめていくものです。

木口　いま「脈動」といわれましたが、星にも膨張・収縮を繰り返すという〝脈動〟があります。

――人工衛星が地上を離れ、地球の引力圏を脱しようとするとき、強く揺れ動くのも、振動ではなく「脈動」というそうですね。

池田　なるほど、生命が脈うつような、

力強い鼓動なのでしょう。

先日、来日のおり、懇談したカール・セーガン博士の夫人が――この方は、博士とともに研究に従事されていますが――パイオニア10号に積んだ宇宙人へのメッセージのレコードに、はるかかなたの天体にある中性子星*（パルサー）の電波を録音して入れたそうです。

夫人は、そのパルサーの音は、私の心臓の鼓動を記録したものと非常に似かよっていました、と話していました。

――そうですか、初めて聞きました。宇宙のロマンといっても、実際は、自己の一念で感じとる以外ないですね。

池田　そのとおりです。

真のロマンは空漠（くうばく）たる情緒からはうまれない。無数の理論をかさねてもうまれない。

しょせんは、人間のもつ無限の一念の広がりによる以外ないかもしれない。

それを、仏法では「法性（ほっしょう）の智火（ちか）*」と説いています。

ただ目でみられる日天・月天の姿だけでなく、もっと深遠なものがあるにちがいない。これを中国の天台大師*は「不可思議境*」ともいわれた。日本の伝教大師*は「真空冥寂*」とも名づけた。

また『法華経*』には「十方世界・通達無礙・如一仏土」とも説いている。

木口　たしかに、目にみえないけれど、この宇宙には、われわれに働きかけてくる重力や電磁力といった、強力な力がたくさんあります。気圧などは、象五頭分が背中にのっているほどの重さ（約二〇トンの重さ）です。

池田　そのとおりです。まえにも簡単にふれましたが、仏は、この宇宙の一切の本源の法を「妙法」と開示し、御本尊として顕現されたのです。

木口　そうしますと、天体の運行も「妙法」の力用によるということですか。

池田　そのとおりです。

御書に、「当に知るべし日月天の四天下をめぐり給うは仏法の力なり」（『四条金吾釈迦仏供養事』）とあります。

木口　なるほど。じつにはっきり断定されているわけですね。いわゆる科学には、どうしてもこえがたい限界というものがあります。いちだんと、仏法研鑽に励まなければと痛感します。

――先日、フランスでの、仏法の話のなかで、名誉会長は、毎日行う勤行とは、この仏法の力を自己の力に冥合するための儀式になるというお話をされましたね。

池田　そういう意義で話しました。つまり、私どもの仏道修行の基本である「勤行」は「讃教の勤め」ともいい、「有差（差別のあること）を置く」（『御義口伝』）とも説かれている。

これは正法のもとに、すべての人びとが、ぜんぶ平等の会座にあるという意義なのです。

――よくわかります。

池田　ですから宇宙万法、森羅三千の当体ともいうべき本尊に合掌する……。この合掌の二字に、自己の一念が大宇宙の生命と感応道交するという信仰の方軌があるの

です。

木口　なるほど。そうですか。

池田　また『法華経』の結経には、「端坐(たんざ)して実相を思え」と説かれている。ですから具体的には、正座し万法の当体である御本尊に「南無」しゆくことにより、宇宙実相のそのままが、自己の一念に顕現してくるという意味です。

十指を合わせるのは「十界互具*」の表現であり、左右の手を合わせるのは、「境智の二法*」をあらわすことになるわけです。

木口　なるほど。「祈り」の深い意義も、より明快になりました。

宇宙との対話をした先人たち

――そこで、ちょっとうかがいたいのですが、宇宙を真剣に究め、宇宙への思索を自分自身の目的や人生の糧(かて)として活躍した人は、どんな人でしょうか。

木口　そうですね。古今東西の歴史を問わず自己の可能性を輝かせた人物は、多かれ少なかれ、宇宙に英知を広げていますね。

たとえば、孔子も荘子も、アルキメデスもプラトンもそうです。ちかくは、カント*もゲーテも、ダ・ヴィンチもベートーベンもシェークスピアもそうです。

池田　そうですね。

また古来から、東洋には、「他山の石以て玉を攻(おさ)むべし」（『詩経』）とある。

これは、自らを知るには、他を知ることによって、おのずから明らかになるという意味でしょう。

ですから人間は、自分より、もっと大きな実在に、とくに大宇宙などと向かいあうとき、閃光(せんこう)がはしるような開明と、自己の秘められた力量の開花を遂げることができるのではないでしょうか。

ともかく、人類史上に輝かしき英知の光をとどめた偉大な人物は、すべてといっていいくらい、宇宙との対話があったと私は思う。

――近代医学の父といわれているパスツールも、そのようです。先日、ある方がいっておりましたが、生命体を発生させる実験に苦心惨憺（さんたん）していたとき、ふと天文台を訪ねようと思いたち、その地下室をかりて、ついに成功することができたそうです。

木口　マクロ（極大）の世界とミクロ（極小）の世界を連動させる象徴的な話ですね。

――「ボーイズ・ビー・アンビシャス」のクラーク博士は、北大（当時は札幌農学校）で八か月間、講義しただけですが、明治の日本に大きな足跡を残しました。このクラーク博士の青春時代も、天体に情熱をむけた毎日だったようです。

池田　そうですね。クラーク博士は、とくに天与の物質である隕石（いんせき）の研究に熱中し、それで博士号をとった、と聞いたことがあります。

木口　そうですか。当時（一八五二年）としては、隕石の研究は、先駆的なことで、その面でもパイオニ

アであったと思います。

池田　北海道の開拓に貢献した〝クラーク精神〟のバックグラウンドですね。北海道といえば、明治維新の函館戦争で、五稜郭にたてこもった榎本武揚がいます。たしか、彼の隕石にまつわるエピソードを、なにかで読んだ記憶があります。

――ええ、後に海軍大臣になったとき、漬物の押し石になっていた隕石を買いとり、大小三振りの日本刀をつくらせた、という話ではないでしょうか。

池田　そうそう、流星刀といわれていましたね。武揚は、ロシア大使をしていたころ、皇帝の秘宝であった隕石でこしらえた剣をみた。それ以来、自分で鍛練法を研究し、ついに念願を果たしたわけです。

木口　そうすると、榎本武揚という人物は、科学者としての才能ももっていたわけですか。

池田　そうですね。彼は、まことに傑出した人物であったと思いますね。

隕石は人間に最も身近な「天体」

――ちょっと余談になりますが、数年前、司馬（遼太郎）さん達と、厚田村を訪ねました。そのとき、江差港に沈んでいる武揚の軍艦「開陽丸」の引き揚げ現場もみに行きましてね。

流星刀のことも話題になりましたが、世界で十振りもないそうです。

木口　そうですか、はじめて聞きます。隕石は、地上のわれわれが手にとることができる最も身近な「天体」です。

池田　「隕石」の話を、小学校の五年生のころ教師から聞いて、たいへん感動したことをおぼえている。

帰宅して、すぐ辞書を引いて、調べたものです。

すると隕石は、流れ星が燃えつきないで、地上に落ちてきたものと出ていたという記

憶がありますが、どうでしょうか、木口さん。

木口　ええ、いちおうはそういわれていますが、その起源はよくわかっておりません。

考えられていますのは、流れ星は、惑星の間の空間に散らばっている物質が、地球の引力によって猛スピードで大気に突入するとき、摩擦しながら光を出している現象です。これが大規模におこりますと、流星雨になります。

池田　古い絵などをみると、本当にシャワーのように降りそそいでいる。

木口　そのようです。この流星現象も、彗星が太陽の潮汐力（場所による引力の差）などで分裂しますと、その尾のあたりに、小さな粒子が流されます。それが、地球の軌道と遭遇することによっておこることもあります。

――そうしますと、彗星の残骸でもあるわけですか。

木口　そうも考えられますし、火星軌道と木星軌道の間に多数存在している小天体、それでも小惑星といわれていますが、この破片とも考えられています。

さらに、ある種の隕石、とくに有名なものはメキシコのアイェンデに落ちたものですが、これは、逆に惑星をつくるもととなった材料であると考えられています。

池田　隕石は、宇宙空間から地球に落ちてきた物質にちがいないのに、結論の出ないのはなぜですか。

木口　どのようにして地球や他の惑星ができたのか、じゅうぶんにわかっていないからです。

池田　なるほど。

この類の隕石は、世界中で、現在までにいくつぐらいみつかっているのですか。

木口　約七千五百個と聞いています。そのうち約五千個は、南極のヤマト山脈で、日本とアメリカなどの観測隊が採集したものです。

池田　隕石を分析すると、地球の過去や、太陽系誕生の歴史がわかるといわれていますが。

木口　ええ、そういわれています。

池田　どうして、そうしたことがわかるのですか。

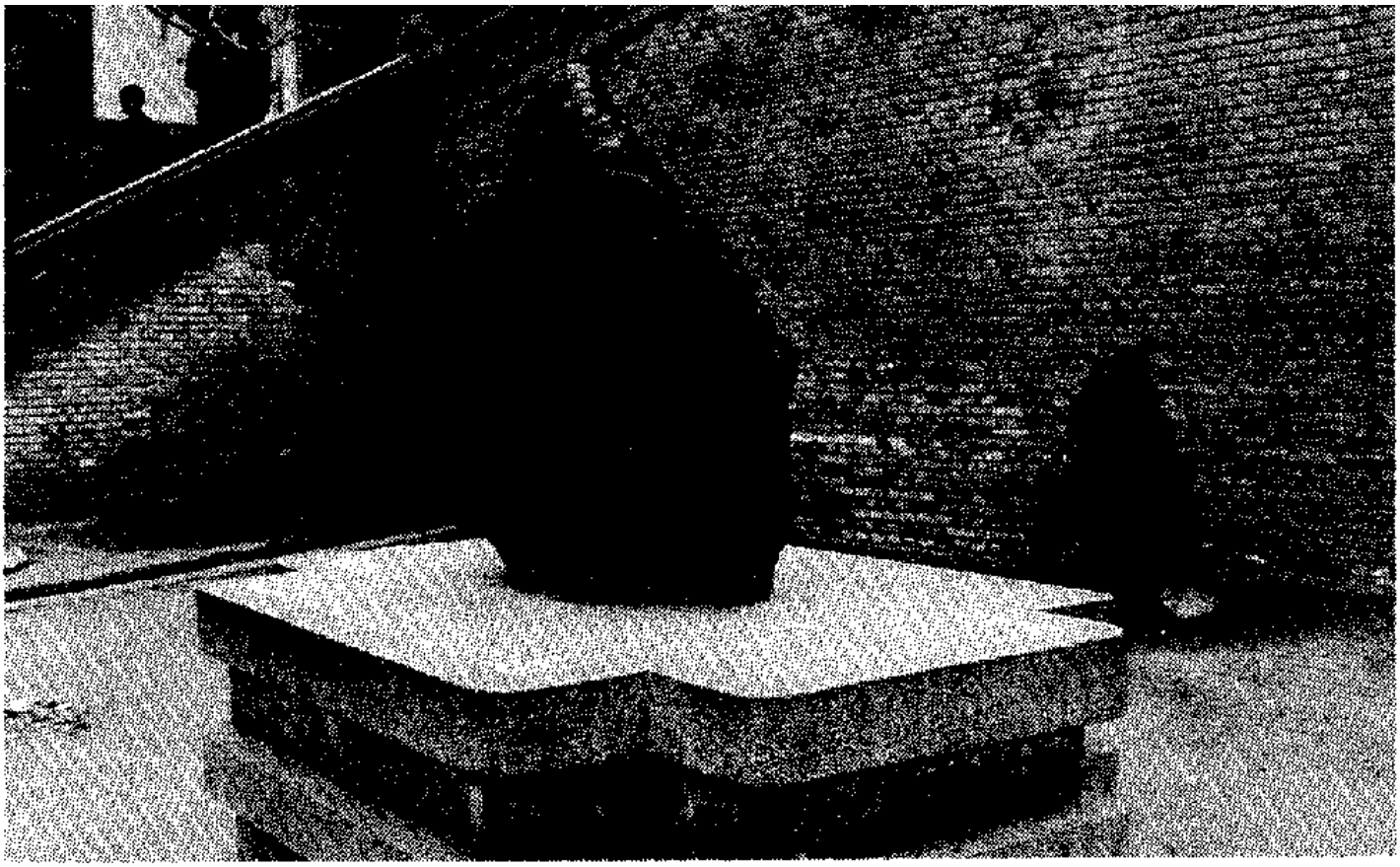
隕石には太陽の歴史が刻まれている

木口　隕石には太陽系の歴史が化石となって、とじこめられているからです。とくに微量元素の含まれる割合から原始太陽系がどれくらいの放射能を被曝（ひばく）しているかがわかります。また鉱物が、どのような成分をもっているかということから、それが、どのくらいの温度で熱に焼かれたとか、どれくらいの速度で冷やされたかということがわかります。

隕石は、鉱物の成分から、隕鉄、石鉄隕石、石質隕石の三種に分けられます。

――これまで発見されたものは、大部分、武揚が流星刀にした隕鉄だそうですね。

木口　ええ、世界最大の隕石は、南西アフリカに落ちたホーバー隕鉄で、大きさは約三メートル、六〇トンにもなります。



中国・蘭州の五泉山公園にある隕石。1個の岩石にも太陽系の"歴史"がとじこめられている。

こうした隕石は、だいたい四十五億年前に物質が結晶しているという年代を示しています。

池田　そうすると、地球の誕生とほぼ同じころになりますね。

木口　そのようです。隕石は、種類によって、地球のコア、マントル、地殻という内部構造に相当するとも考えられています。[注1]

池田　なるほど。一個の岩石にすぎないものでも、たいへんな歴史を背負っているわけですね。

むかしから、こうした研究は盛んだっ

たのですか。

木口　いいえ、最近のことです。むかしの隕石は、ほとんど博物館に陳列されたり、神社の神体になったりしていました。（笑）

――そうですね。静岡県のある寺では、玉薬師如来という名で、三百年も信仰の対象にされていたそうです。

木口　名古屋の近くの神社では、一キロほどの隕石が発見されたという話もあります。

――昨年（一九八二年）の暮れでしたか、アメリカが南極で採集した隕石は「月からきた」と発表しましたね。

木口　ええ、アメリカは、月の石の研究がすすんでいますから、予備研究の成果を発表しました。

池田　アポロ計画*では、月の石をどのくらい持ち帰ったのですか。

木口　だいたい四〇〇キロと聞いています。

それが二十か国ぐらいの、数千人の学者にまわされました。

池田　私も、ある著名な学者からみせていただきました。月の石の研究で、ほかにわかったことがありますか。

木口　月が約四十五億年前ぐらいにできたこと、隕石がぶつかることによって、月の表面の、一〇〇～三〇〇キロぐらいが、掘り返されていることなどです。

池田　そうすると、月のクレーターが、火山か、隕石のぶつかった跡か、という論争には、結着がついたわけですか。

木口　ええ、アポロ15号、17号の調査で、隕石という結論のようです。

―――

われわれがみて、ふつうの石と隕石を区別するときの、ポイントはなんですか。

池田　隕石には、指を粘土に押しつけたときできるような跡がついていますが、あれは拇痕（ぼこん）というそうですね。

木口　ええ、ゴルフボールのくぼみに似ています。地球の大気圏と摩擦して、表面の

一部がとけて、浅いくぼみになったものです。

池田　地上の岩石にはみられないものですから、隕石かどうかの特徴になりますね。

木口　そうです。それと、隕石が大気圏に突入したとき、表面全体に、〇・三ミリほどの、薄い膜のようなものができます。

その膜には、空気の流れの方向を示すシワがみえることもあります。これも、隕石かどうかを判定する基準になります。

また、これは専門的な研究で重要になることなのですが、地球や隕石のもとになったガスが、宇宙空間をただよっているとき、近くで二回ほど星が大爆発しています。そのため放射能を被曝（ひばく）している、ということもいわれています。ただし、地上に落下したものは人体に影響ありません。

――星が爆発すると、放射能がでるのですか。

木口　星の爆発とは、水爆そのものです。

この爆発で、宇宙は重金属で汚染されてしまいました。ところが、この汚染物質がな

いと、生命の因子は生じません。

池田　原子力は宇宙の力だ――という定義は、そういう意義からいわれたのでしょうね。

木口　そうですね。ですから、みだりに原子力に手をつけると、宇宙のリズムを破壊してしまいます。

――隕石をみつけたら、どうしたらいいのですか。

木口　どちらかの科学博物館に連絡しますと、感謝されます。

池田　たとえば、星図にない天体を発見したときは、どうすればいいですか。

木口　一刻も早く、東京天文台に連絡することですね。連絡がありますと、木曾にある一〇五センチのシュミット望遠鏡で確認が行われます。そのとおり確認されると、すぐ国際天文連合（ＩＡＵ）の天文電報局に連絡されることになります。

池田　すると、ＩＡＵというものは、世界的なセンターになっているわけですか。

木口　ええ、新発見が、その年の何番目の発見かということで、発見者の名前が、すぐその天体に命名され、公表されます。

――彗星の場合も同じですか。

木口　手続きは同じですが、彗星の場合は発見の早い順に、たとえば今年（一九八三年）の四月、赤外線天文衛星（ＩＲＡＳ）*が発見した彗星は、その後、日本とイギリスのアマチュア天文学者が発見しましたので、「アイラス・荒貴・オルコック彗星」というように、発見者三人までの姓をつけることになっています。

国連旗にみる世界平和への願い

――ところで、宇宙への思いは個人ばかりか、民族や国家にとっても憧憬（どうけい）への標章になっていますが。

池田　そうです。

宇宙というものは瞬時たりとも、停滞することない無限の時の流れをもっている。そのなかを、かぎりある旅をつづけているのが、個人であり、民族、国家であるといえるでしょう。

ですから本然的になにか、永遠不滅性のシンボル、かけがえのない栄光の象徴というものを個人なり、民族なり、国家がもちたいという心情は、ごくしぜんなことではないでしょうか。

木口　世界の国ぐにのさまざまな国旗の模様をみると、いまのお話がよくわかりますね。

池田　そうなんですね。

天体は無限に高い。そして、永遠に輝いている。

そこで国家にしても、民族にしても、その理想を追究するときに、その反映として国旗を天体になぞらえていこう、ということになってきたのではないでしょうか。

――このたび、国連本部から池田名誉会長に国連旗が、スイスのチューリッヒで、

国連広報局長アンソニー・カーノウ氏を通じて届けられたようですね。

池田　ええ、ＳＧＩ会長として受け取りました。

木口　国連旗は、たいへん意義のある旗のようですね。

池田　そのようです。

それには、「国際連合規程」というものがあって、旗の大きさやマークの位置、掲揚する場合の規程などに、厳しい決まりがありますね。

――加盟国の信頼を象徴するものだからですね。

池田　そのとおりです。

第二回の国連総会（一九四七年）で、決議されているわけですから……。

木口　実際の旗はよくみたことがありませんが、どんな絵柄がえがかれているんですか。

池田　全体は、淡い青の布地。この意味は宇宙空間をあらわしたようです。

その中央に、北極を中心にした地球が白ヌキにえがかれている。さらに子午線が入っ

ておりますね。さらにまた、地球をつつむように、両側をオリーブの枝がかこんでいます。

――国連が平和推進の世界的機構であることを、簡潔にシンボル化しているわけですね。

池田　そう思います。また、そうあらねばならない国連の使命が、よくわかります。私が国連を大事にしている理由は、道遠くとも、また矛盾もあり、欠陥もあるかもしれないが、現実には国連を全世界の国家ならびに人びとが支えていく以外、確実なる平和への秩序はえられなくなってしまうからです。

国旗には太陽、月、星などをシンボル化

木口　フランスのトレッツでは、第一回SGI文化祭が開催されましたが、会場に掲揚するために、届けられたのですか。

池田　そうです。

私どもの世界文化祭では、かならず参加した各国の国旗を掲揚します。それを見上げながらいつも思うことですが、太陽、月、星などをシンボル化したものが多いですね。

――アメリカの星条旗は、ワシントン初代大統領の家紋（かもん）を参考にしてつくったそうですが、五十の星がある。ちょっとみましても、ビルマ十四個、中国は五個、イラクは三個、日本は太陽そのものですが、ウルグアイ、マラウイ、バングラデシュなどの国旗にも、太陽が絵柄のなかに組み合わされています。

木口　どちらかというと、イスラム圏諸国は三日月が多いようですね。

――やはり砂漠の国は、昼間のギラつく太陽より、夜の月にやすらぎを求めたのでしょうか。

池田　そういえるかもしれませんね。その太陽と月の関係で国というものをみたと

き、次元を変えた、別の観点もうまれます。

人間の心は深層なもの

木口　具体的には、どういうことになりますか。

池田　たとえば、むかしのインドを、中国や日本では「月氏国」と呼称していた。ですから、釈迦仏法を「妙法」の垂迹としてとらえ、「月氏の仏法」というような場合が、それにあたります。

木口　よくわかります。宇宙と人間との深い交感は、すべてを物理的にみていくには、ムリがあると思います。

――人間の心は、深層なものですから……。

池田　そうです。宇宙大です。

ですから、国旗をみてもわかるように、この世の自分たちの存在を象徴させようと思

うとき、壮大な宇宙の力に、それを求めたのです。

――同時に、宇宙の実在にあやかることによって、永遠の時間、空間との調和、そしてこれらとの融合を遂げたいという思いも、あるのではないでしょうか。

池田　そう思います。

人間は、決していつまでも、混乱や混迷に耐えられるものではない。常にその生命的な傾向性からいっても、あくまで調和や融合をめざしていく存在といっていいでしょう。

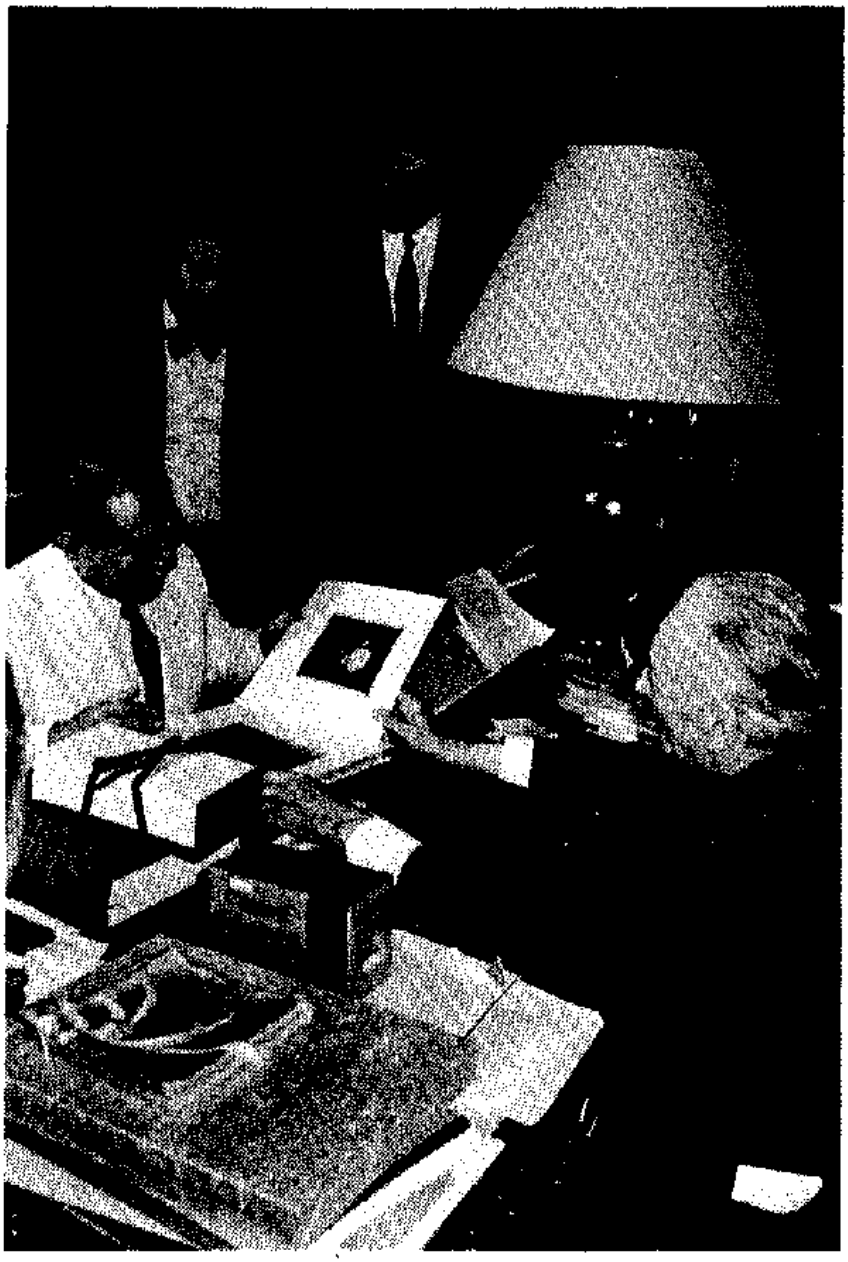
木口　そのとおりだと思います。またそうあらねばならないとも思います。いまの点について、池田先生は、ブカレスト大学の講演でも披瀝（ひれき）されていましたが……。

池田　ええ、話しました。

あの講演では、伝統と近代化との融合という問題について、日ごろの考えを申し上げましたが、たとえば、音楽や絵についてみれば、もっとわかりやすいでしょう。

〝生命のハーモニー〟をかなでる名画、名曲

――そういえば、今秋、フランスからたいへんな名画を招来されますね。



東京富士美術館で開催される「近世フランス絵画展」の作品の説明をするユイグ氏(右)

池田　ええ、東京の八王子にできた東京富士美術館で開催する「近世フランス絵画展」（一九八三年十一月三日から八四年二月二十六日まで開催）です。旧知のルネ・ユイグ氏（フランス・アカデミー会員）との友情から、フランス八大美術館の秘蔵のものを出展することになりました。そのためもあって、今回はパリで、氏からこの門外不出になっている数々の作品について、ていねいな解説をうけました。実際にみる名画は、あらためて色彩の美的調和の極致と思いました。

木口　調和ということを、全体と部分という関係性では、どのようにとらえることができますか。

池田　そうですね。絵をみて、いくら絵具やキャンバスを問題にしても、名画が訴えかける美的価値を説明することはできないものです。

――なるほど、音楽もまた同じですね。

池田　そうです。

音符のひとつひとつを取り出して、音響学的に研究してみても、名曲の調べは伝わってこないでしょう。

名画、名曲には、すぐれた画家や音楽家によって、普遍的な〝生命のハーモニー〟が、かなでられている。

ここに生命の一念と、自然、宇宙とをつらぬくハーモニーをとらえ、はずませゆく、たえなる「妙」がありますね。

――時代をこえて、人の心をうつのは、そのためですね。

木口　そうですね。

私の専門のほうでも、近代天文学の父といわれているケプラーに、『世界の調和』という著書があります。その〝生命のハーモニー〟を深く思索するなかで彼は、宇宙の秩序を考えました。

いまから三五〇年もまえに、彼は、「天文学は物理学の一部である」といって、宇宙を、初めてキリスト教などの神秘主義から解き放しました。

ガリレオなどがつくった望遠鏡

池田　「ケプラーの法則*」は有名ですが、彼は望遠鏡もつくっていますね。

木口　ええ、凸レンズと凸レンズを組み合わせたものです。彼の望遠鏡以来、天体は上下さかさまにみえるようになりました。

池田　写真でみる月面図も、以前は南のほうが上になっていましたが、いつからか、北を上にするように変わりましたね。

木口　ふつうはわからないものですが、よくご覧になっていますね。

池田　いや、小学校の教師をしている私の三男坊が、子供のころから天体狂であったもので、しぜんに視点がそこにいき、あるとき見比べてみたものです。

木口　そうですか。アポロ宇宙船が月に着陸してから、月の地図も地球の地図と同じように、東西南北を採用しています。

池田　なるほど、なるほど。

望遠鏡についてですが、ケプラーのものと、ガリレオ*が使ったものでは、どのくらいの違いがあるのですか。

木口　ガリレオのは、たいへん簡単なものです。オランダのメガネ屋さんが、望遠鏡を発明したばかりのを、すぐとりよせて自分で工夫したようです。

望遠鏡の前のほうについているレンズ（対物レンズ）を凸レンズにし、接眼レンズに凹レンズを使っただけです。

――イタリアのフィレンツェの博物館に、ガリレオが使っていた望遠鏡がありますが、長さが一メートル、倍率三〇倍のもので、架台にくくりつけただけのものでした。

池田　私もみた記憶がありますが、よくこれで、月のクレーターや、土星の輪や、木星の四大衛星まで発見できたものと思います。

――太陽の観測で、初めて黒点を発見していますが、ガリレオは、失明を覚悟して太陽をみつづけたといわれていますね。

池田　それは有名な話ですね。ガリレオの、あくまでも真理を究めようとする強靱（きょうじん）な決意と、キリスト教の弾圧にも屈しなかった意志とは、共通のものがある。

木口さん、いまでは、どのくらいの大きさの望遠鏡があれば、木星の衛星までみることができますか。

木口　レンズの直径一〇センチほどの望遠鏡があれば、じゅうぶんですね。あるということを確認するだけなら、もっと小さくても大丈夫です。

望遠鏡で星をみるための、やさしい解説をしてください。

木口　そうですね。光は波動になっていますから、望遠鏡の口径があまり小さいと、像がぼけてしまいます。人間の瞳（ひとみ）にも同じようなことがいえます。物をはっきり識別することを分解能、あるいは分解するといいますが、望遠鏡は、レンズの直径によって有効な倍率が出ます。

それで、木星の場合、地球から約八億キロ、木星の衛星イオの直径は四〇〇〇キロ、

その比は二〇万です。

そこで、この比に人間がいちばん感じる光の波長＝二万分の一センチをかけ、直径一〇センチの望遠鏡でいいことになるわけです。

池田　なるほど、そういう計算になりますか。ところで、望遠鏡はどこのものがいちばんいいのですか。

木口　アマチュア向けなら、日本のものといわれています。東京光学とか、日本光学といった会社が、戦時中レンズを徹底的に研究しましたから……。

それに、日本のアマチュアは世界一です。ずいぶんまえですが、B・B・C（イギリス国営放送）が、日本の天文学者を取材したとき、本職をぜんぜん無視して、アマチュアばかり追っていたそうです。（笑）

大きな望遠鏡の場合は、天文学の研究用になりますので、いちがいに比べることはできなくなります。

東京天文台の望遠鏡は、カール・ツァイス社製です。

未知なる宇宙をとらえる眼

―― 現在、天体を観測するのに、どのような種類の望遠鏡があるのですか。

木口 地球には、天空から届くいくつかの光の波長に対して、窓をもっています。一つの窓は電波、もう一つの窓は赤外線、そしてふつうの光。これらの波長に対しては、電波望遠鏡*、赤外線望遠鏡、ふつうの望遠鏡があります。

池田 最近は、ロケットや人工衛星に望遠鏡を積んで、紫外線やX線、γ線でも観測しているようですが。

木口 ええ、大気圏の障害物がなくなりますので、観測できるようになります。それに、ちかごろでは、光のような電磁波だけではなく、重力波やニュートリノ*でも、宇宙をみています。

―― これは作家の埴谷雄高さんが紹介していますが、戦争中、カリフォルニアの太

平洋沿岸は、日本の空襲を恐れて灯火管制をしていたので、パロマ天文台の二〇〇インチ望遠鏡（最近まで世界一）は、暗闇が幸いして、多くの星雲が観測できた。それが、戦後の天文学の画期的な発達をうながした、そういうものですか。

木口　ええ、観測は条件に左右されますので、灯火管制などは、絶好のチャンスだったと思います。最近は、近くにあるサンジェゴ市の明るさで観測しにくくなっているそうです。

池田　望遠鏡は、どれも筒形と思っている人も多いようですが、アンテナのようなものも、望遠鏡とよんでいるようですね。

木口　そうです。赤外線望遠鏡は、ふつうの筒形ですが、他のものはずいぶん違います。

電波望遠鏡は、パラボラ・アンテナです。重力波望遠鏡はアルミのかたまりや、サファイアの単結晶です。いまハワイ沖の深海でつくられているニュートリノ望遠鏡は、数千メートルもの厚さの海水が、写真乾板の役目をします。

池田　おもしろいですね。

木口　太陽の中心で核燃料が燃えているところを、直接みるニュートリノ望遠鏡は、六一〇トンの四塩化炭素です。

―　どこにあるのですか。

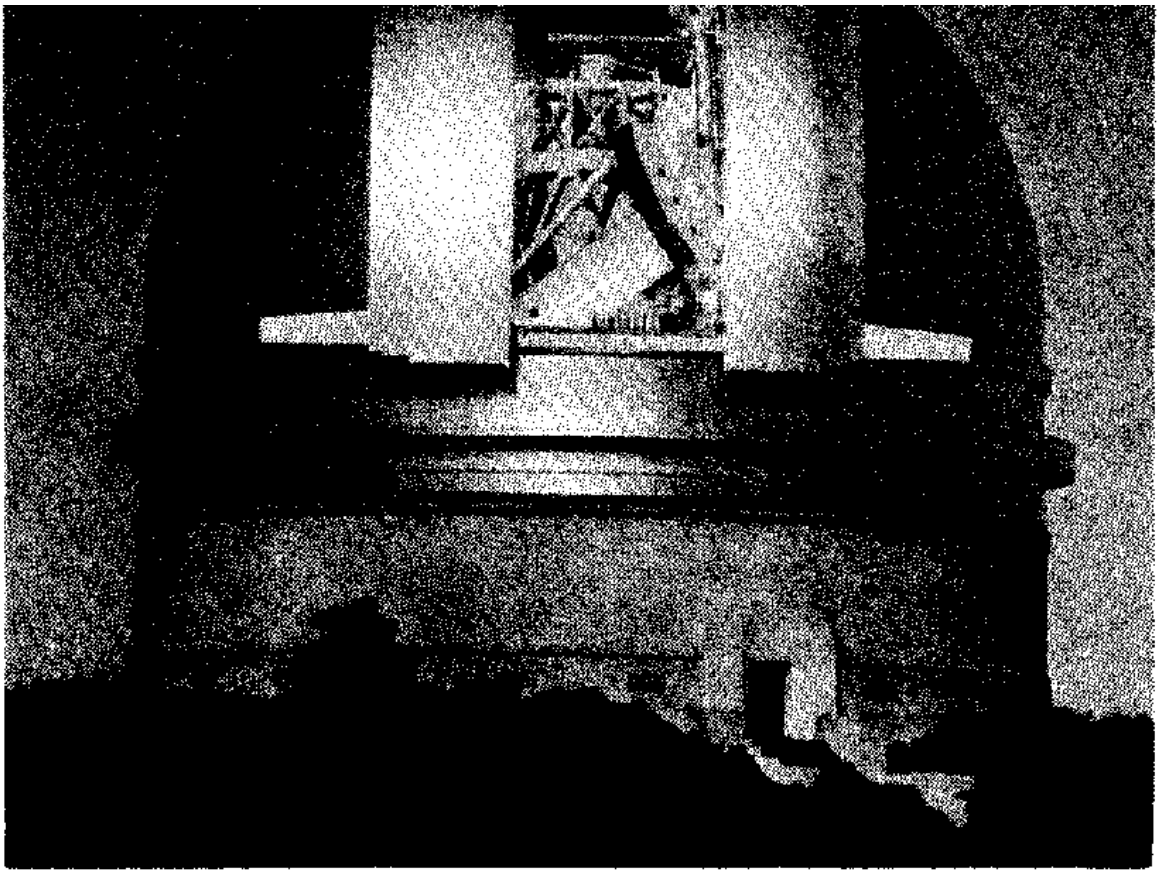
木口　サウス・ダコタの金山の奥深く、地下四四〇メートルのところにおかれ、太陽を観測しています。

池田　私は太陽の写真をみて、いつも不思議に思っている。それは表面が燃焼状態の黒点や、コロナや、ガスのわきあがってくるのが、じつによく写っているからです。いまでは、もっと中心部までみえるわけですね。

木口　そうです。

―　世界で初めて天体の写真を撮ったのは、誰ですか。

木口　いまから一五〇年ほどまえ、アメリカのJ・W・ドレーバーという人が、月にカメラを向けたのが最初だといわれています。



パロマ天文台の200インチ望遠鏡はドーム天文台の最前線の眼として大発見をしてきた。

池田　ずいぶんまえから撮っているわけですね。太陽も、カメラを望遠鏡にセットすると、きれいに写せますか。

木口　写せますが、強烈な光ですから、特定の波長だけをとおすフィルターをかけて、露出を工夫します。

――先日も太陽系を離れて飛行をつづけているパイオニア10号から、牽牛(けんぎゅう)星*の写真を送ってきましたが、あのていどの写真でも、いろいろわかることがあるのでしょうね。

木口　ええ、たいへんに重要な資料になります。

火星や金星の表面写真を専門的に分析して地質がわかり、生物がいるかいないかにも、ほぼ結着をつけましたし……。

――たとえ一枚の写真でも、現実がわかれば百の議論も沈黙させますね。

科学性をふまえている大乗仏教

池田　そうですね。

どんなにデータをつくり、理屈をつくりあげても、現実にまさるものはないわけです。ゆえに、仏法は「現証」を最も重んじます。

御文にも、「道理証文よりも現証にはすぎず」（『三三蔵祈雨事』）、また「文理真正の経王なれば文字即実相なり」（『一生成仏抄』）とあります。さらに「近き現証を引いて遠き信を取るべし」（『法蓮抄』）とも説いています。

木口　なるほど……。まさに、科学が進歩していく筋道ですね。

お医者さんの場合も、最近は、診断をくだすのに、最終的には写真ですね。

木口　とにかく、私どもの世界は、どんな立派な理論でも、実際に実験して、そのとおりの現証がなければ誰も認めません。

池田　最もわかりやすい科学性でしょう。

仏法では、宗教の優劣、浅深を定める基準として「三証」をあげ、それは「文証」「理証」「現証」といいますが、もともと大乗仏教*は、常に科学性をふまえていると思っています。

木口　たいへんよく理解できるお話だと思います。

ところで天体との距離ですが、みていても無限の遠さを思うだけで、実際の距離感覚は、どうしても実感できないのがふつうですが。

池田　距離はモノ差しで測るという常識からすれば、たしかに不思議だ。しかし、どんな単位でも、しょせんは人間の感覚がつくったものと思いますが。

木口　そのとおりです。地球と星との距離も、日本地図や、世界地図をつくる三角測

量*と同じ原理で測ります。

―そうですか。

人間には二つの眼がありますが、だいたい六センチ離れています。この六センチの幅で、三角測量すると、どのへんまでみえますか。

木口　約一〇キロ先まで感じることができるとされています。

池田　なるほど、人間は、一〇キロ先を感じることはむずかしいかもしれないが、しかし不可能なことではない、ともいえるわけですね。

木口　天体の距離は、ちょうど半年間隔で、たとえば春分の日と秋分の日に、その天体が、はるかに遠い星に比べ何度動いたかを測り計算します。この方法で、約一〇〇光年先まで距離が測れます。

―それ以上遠くの天体は、どうするのですか。

木口　近くの天体を実測し、それをふまえて理論的に出すわけです。

ですから、一ケタ大きいかもしれませんし、小さいかもしれません。それくらいの精

度です。

池田　そんな〝ケタ違い〟があっても、天文学者は困りませんか。（笑）

木口　ええ、天文学者というのは、たいていは、一ケタぐらい違っても、つぶれないような理論を考えだします（笑）。しかも、誤差によってどれだけ結果がかわるかについて、いつもじゅうぶん注意していますから……。

仏法で説く「天眼」とは

木口　それにしても望遠鏡を、よく「天眼鏡」と名づけたものだと感心します。

「天眼」とは、仏教の言葉ですね。

池田　そうです。

仏法では、「眼（まなこ）には五あり所謂（いわゆる）・肉眼（にくげん）・天眼・慧眼・法眼・仏眼なり」（『諫暁八幡抄』）と説いています。「眼は心の窓」ともいいますが、「みる」ということは、どんな場合

でも、知・情・意の働きといえるでしょう。

―― ぼやっとしているのを、「うつろな眼」といいますから……。（笑）

木口　「光のない眼」とか、「眼は口ほどにモノをいう」ともいいますね。

池田　そうですね。「光」とは智慧で、口ほどにモノをいうのは、感情や意思が、眼にこもっているということでしょう。

そこで、仏法は「五眼は五智なり」とも説いている。

木口　「五眼」とは、それぞれどういう意味になるのでしょうか。

池田　そうですね。

「肉眼」とは、ふつうの人間の眼のことであり、現実の姿、現象を、表面的に認識できる知覚です。

木口　たとえば星が出ていれば、経験的に星とわかることですね。

池田　そうです。

ところが、星は夜ばかりではなく、じつは昼間も出ているということを見通せるよう

な一種の透視能力が「天眼」になります。

――かならずしも、理論を知っているということではないですね。モノがみえるのは、光が粒子の流れであって、眼に入る量によって、明るさや色が知覚できるということ、また昼間の星は、太陽の光のほうが多いからみえないだけだ、という知識がなくても……。

池田　そうです。遠方の出来事や表面的でない現象も直覚できる才能といってもいいでしょう。

木口　人によっては、訓練や鍛練でもつことのできる才能ではないでしょうか。

池田　そういえるかもしれませんね。

生まれつきの人もいますし、超能力と騒がれる人もいます。

――最近も、空間に浮いたヨガの行者の連続写真を撮って、載せていた雑誌がありましたが……。

池田　「利根」とか「通力」とか、むかしは少々狂人的なふるまいをしても、人を惑

わせたが、現代のような合理主義、科学万能主義の時代では、そのような欺瞞は、絶対に許されないでしょう。

あくまでも、生命の法則、真実の法則にのっとった思想・哲学・宗教でなければ、誰からも信用されない。

『唱法華題目抄』という御文には、「利根と通力とにはよるべからず」と喝破されておられます。

――「天眼」については、目連尊者と母親にまつわる故事がありますが。

池田　それは有名な仏法説話です。

木口　どのような内容ですか。

池田　簡単に説明しますと、まえにもふれましたが、目連は釈尊の弟子の一人で神通第一といわれていました。

あるとき、自らの天眼で、餓鬼道におち、苦しんでいる亡母をみつけ、救おうとします。

ところが、飢えている母親に、食物を与えても火になり、水をかけると、その水が薪となって、ますます燃えさかってしまいます。

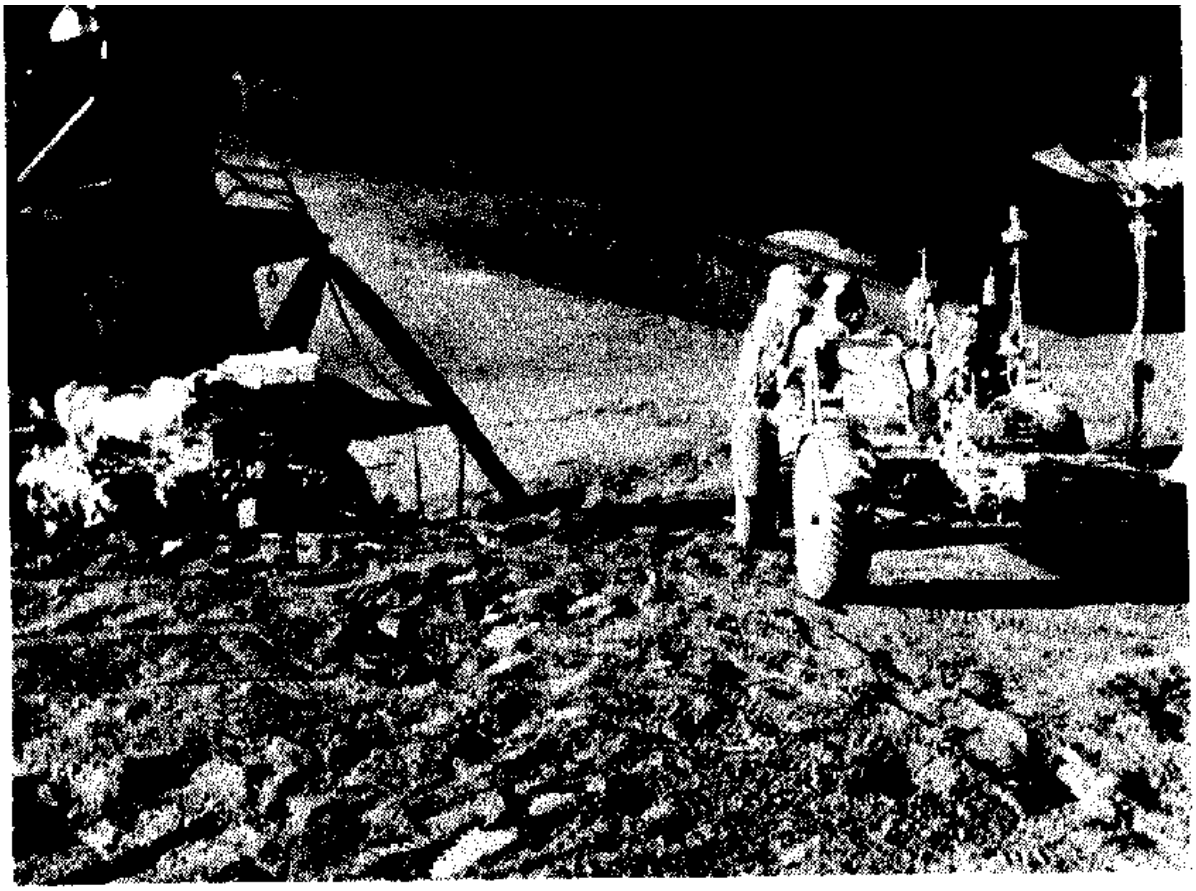
――目連の天眼は、苦しんでいる亡母の因果の姿は見通すことができた、ということですか。

池田　そうです。生前の母親が慳貪の業で――強欲で、意地悪ということですが、餓鬼道で、五百生という長い間、苦しんでいることを見通すことができたわけです。しかし目連は、天眼をもち、神通という特殊な才能をもっていましたが、母親の悲惨をどうすることもできず、仏の智慧にすがって、やっと救うことができた。これが、いわゆるうら盆の起源とされております。

「慧眼」とは法則を見いだす英知の眼

木口　そうですか。よくわかります。むかしの人が、肉眼ではみえないものをみるた

めの道具を、天眼鏡と称したのも、ピッタリだと思います。
しかし、望遠鏡でいくら宇宙の現象世界をさぐりだしても、その真理を、いまだ究めたとはいえない。
――「天眼」で人一倍ものが見えても、それをどう判断するかという智慧ですね。
池田　そうです。
そこで、「慧眼」とは、事物、事象を深く洞察し、正しく判断して、法則を見いだしていく英知の眼ということになります。
木口　たとえば、さきほども話題になりましたが、ケプラーは、独自の望遠鏡を考案しました。
ところが、本人は弱視で、天体観察をしない天文学者といわれました。
池田　そうですね。なにかで読んだことがありますね……。
ケプラーは、自分の師匠が生涯をかけてつくりあげたデータを、そっくり受け継ぎ、紙とペンだけで「ケプラーの法則」を、見事に導き出すのに成功した、といわれてい



肉眼ではみえないものをみるための道具を天眼鏡と称したが，いま人類は月旅行も夢ではない。

ますが。

木口　そのとおりです。ニュートン*も、その法則から「万有引力の法則*」を発見しました。

池田　みな、仏法で説く「慧眼」の持主とみることができます。

――たしかに「慧眼」の認識が、文明の進歩に寄与したことは事実ですが、その認識が、そのまま人類の幸福に、すべてつながっていくとはかぎらないわけですね。

池田　どうしても、「慧眼」だけでは、大きな価値の自覚や、生きいきとした

英知になることはむずかしいといっていいでしょう。

木口　そのとおりだと思います。

たとえば、宇宙の力が原子力だ、とわかっても、それが最初に利用されたのは、戦争のためでした。そしていま、世界中が核兵器づけになっているほどです。

「仏眼」とは究極的な悟りの境涯

池田　そこで「法眼」「仏眼」が、大事になってくるのです。

――「法眼」とは、どのように説かれているのでしょうか。

池田　ひとことでいえば、「菩薩の眼」ということになりましょうか――。

人びとを、あくまでも済度していくという、仏法の立場、その次元から、一切を見ぬき、行動していくということです。またすべての行動の規範にあって、あくまでも、生命の尊厳観をもっていること。

とともに、内なる生命の世界にあっては、常に生きいきと、楽しく、くずれざる幸福の大海を遊戯していくような自身を確立してゆく英知の眼ということになるでしょうか。また少々抽象的な表現になりますが、外にあっては、絶対平和主義の行動。

木口　その究極的な境涯として「仏眼」が、あるわけですか。

池田　そうです。

端的にいえば、「宇宙即我」、「我即宇宙」と覚了する境地です。『法華経*』の『寿量品*』には、「如来如実知見・三界之相・無有生死」と説かれています。

――この『寿量品』の意味は、どのようになるのでしょうか。

池田　そうですね――。

まず通途の仏法では、「如来」つまり「仏」という清浄で、力強く、なにものにも左右されない大人格が、すぐれた直観智で、宇宙および森羅万象の究極の法を「一切皆是仏法」すなわち「妙法」と覚知した「仏の眼」ということになります。

木口　ふつう、「悟り」といわれる心的過程の最高レベルのこととととらえることがで

きますね。

池田　結論としていえばいえるでしょう。釈迦仏法では、出世間、脱世俗の立場、つまり、わかりやすくいいますと、実社会を離れて、長い仏道修行と実践によって初めて到達したわけです。だが日蓮大聖人の仏法では、すべての衆生に、もともと仏眼をはじめ五眼が具することを明示している。その覚知は、妙法の信によって獲得されるわけである。専門的には、「直達正観」「受持即観心」と説くわけですが……。

――すると「三界の相*」とは、どのような意味になるのでしょうか。

池田　簡単に説明しますと、一般的にも、「子は三界の首かせ」とか、むかしは、よく女性蔑視を「女は三界に家なし」などといいましたが、仏法で「三界」とは、詳しくは略しますが……「欲界」「色界」「無色界」のことです。「三界の相」とは、悩み多き迷いの世界ととらえます。

つまり、「生老病死」の四苦*や「成住壊空」の四劫*、「生住異滅」の四相*という、

有為転変の無常、変化、仮有の世界であるとみるわけです。仏の眼は、そうした社会的磁場によって揺れ動いたり、避けがたい変化相の奥に、本有常住の大法則、すなわち妙法がある。そして常に、全社会、全世界、全宇宙の実相の深理のなかに寂光の確たるリズムの世界を見通している、ということになるでしょう。

木口　たいへんに深い哲理を感じますが、さらに、『寿量品』の「生死有ること無し」（無有生死）とは、どういう意味でしょうか。

池田　これは、仏法の生命論の極説であり、仏法の宇宙観の核心になります。簡潔にいえば、全宇宙の法則性をつまびらかにし、わきまえることによって、「生死有ること無し」すなわち、人間の根本問題である「生死」の理にも決して左右されることのない、永遠不滅である生命という実体を実感し、覚知した悠然たんたんとした境地にたつということです。

木口　なるほど、いちだんと仏法からみた生命観に対して、理解を深めることができ

た気持がします。すると、どこまでも真実の仏法は「生きる」なかにある。「動」の社会の現実のなかにある。自分の身近な生活のなかにあると、とらえてよいわけですね。そのなかにあって「法眼」「仏眼」を発揮、薫発させることができるわけですか。

池田　そのとおりです。

そこで、御文にも「此の五眼は法華経より出生せさせ給う」（『諫暁八幡抄』）と説かれています。

ですから「妙法」を受持し、信行し、人間革命してゆくところに、おのずから「平和」「幸福」「よき社会」「よき生活」を見いだしてゆく力が、また「眼」と「智」と「光」が開覚され、顕示されていくということになるでしょう。

木口　わかるような気がします。われわれ天文学者の眼は、「天眼」の域を出ていないわけですね。（笑）

第七章　「死」の実体に迫る仏法の眼

仏法は「死」をどうとらえるか

志村（司会）　今回は、「生死」の問題に少々入っていただければと思います。

木口　そうですね。この「生死」の問題こそ、まことに人生の根本問題である。そして、最も人間にとって切実にして、重要な課題ですね。

池田　そのとおりです。

この「生死」という根本課題を解明せずしては、いかに富と名誉をえても、すべてが夢のような、はかないものとなってしまう。

木口　まったく、そう思います。

――この企画の初めに、名誉会長から、小林秀雄*さんの死をめぐってのお話がありました。私も、仕事の関係上、さまざまな方々の死というものを、実際に見聞きしてきました。

たぶんに、死に直面したときに、苦しみの様相というものが、やはりそれぞれにあるようです。

木口　「生」の問題は別として、「死」ということについては、さまざまな死に方がありますね。

――そうですね。一般によく知られているものとしては、ケネディ大統領は暗殺（一九六三年テキサス州ダラスで遊説中に凶弾をうける）、ヒトラーは自殺（一九四五年、愛人エバ・ブラウンとともに自殺したといわれる）、乃木大将は殉死（明治天皇の死に、妻とともに殉死）、東条英機は絞首刑（東京裁判でA級戦犯）……。

池田　病死がある。自殺がある。他殺がある。事故死がある。若干、安楽死もある。また、変死、焼死、凍死、水死、刑死というのもある。そして、自然の寿命として安らかに眠るがごとく、亡くなっていく姿もある。

――仏法では、そうした死の違いを、どのようにとらえますか。

池田　そうですね。

仏法では「死魔*」ととる場合もあるし、「宿業(しゅくごう)*」とか「定業(じょうごう)*」とかと、とる場合もある。さまざまな次元から、その因果関係の解明に光をあてていることだけは事実といえるでしょう。

木口　すると仏法は、その因果律にのっとった、自身の正しい生死観を確立しゆくためにあるという意味にとっても、よろしいでしょうか。

池田　そうです。

さまざまな死んでいく人の姿があるならば、さまざまな「果」の死後の生命も考えられてくる。その死にゆく生命というものが、そのまま消滅してしまうのであれば、また、すべてが、今世だけで、うたかたのように消え終わるのであるならば、簡単ですが……。事実は、そうではないわけです。

ご存じのとおり、キリスト教では、霊魂不滅といい、また、ある場合には、生死は一冊の本のようなもので、その本の一ページ一ページをめくって最終章を読み終えれば、それが「死」であるという思想もある。

しかし、古今東西にわたって「死」という問題を追究しようとした、幾多の思想や哲学や宗教が厳然と存在しているという実態からみるならば、なんらかの「生命」の死後の実体があるということを、見のがすわけにはいかないでしょう。

――そうですね。『サンケイ新聞』だったと思いますが、かつてオーストリアの思想家カレルギー伯と対談（共著『文明西と東』、一九七二年五月四日、サンケイ新聞社刊）されたおりにも、そのような話がでましたね。

池田　そうでしたね。

氏は、「ピタゴラスやプラトンはじめヨーロッパの偉大な哲学者といわれる人たちは来世観をもっていた。またキリスト教徒であっても、高度な教育をうけた人びとは、それにちかいものを信じているようです」と語っておりました。

木口　それは、私も読んだことがあります。

池田　ですから、逆説的にみるならば、その過去世の「因」による「果」のあらわれともとれる、個性の違いもでてくる。貧富の差もある。肌の色の違いもある。

なぜ、イギリスに生まれるのか、アフリカの国に生まれるのか。なにゆえ、生まれながらにして病弱なのか。短命の寿命をもって生まれてくるのか等々、神が人間をつくったのなら、あまりにも不公平すぎる。もっと平等につくってもらいたかった。（笑）

木口　なるほど。たしかに、人間それ自体の解明は、科学の範疇（はんちゅう）をはるかにこえた問題であると思いますね。

――合理主義だけでは、はかろうとしてもはかりしれない不可思議なことが多すぎますね。

池田　そのとおりです。

そこに、一個の人間といってもよし、一つの生命といってもよし、その人間生命の実体を、あまねく解明するとともに、その一念の生命が、これまた宇宙との必然的な関連があることを説いた法が、仏法であるわけです。

木口　なるほど。

平安朝のころ自殺の思想はなかった

――最近、自殺者がふえています。これは世界的な傾向ですし、さらにいたましい一家心中なども多くみられますね。

池田　まことにかわいそうであり、残念なことです。政治でも、科学でも、教育でも、どうしようもない。これこそ、人間のなんらかの「宿業」にしばられた、流転の姿という以外ありませんね。

木口　むかしも、自殺は多くあったんでしょうか。

池田　いや、平安朝のころには、自殺の思想はなかったといわれています。民族が若かったのか……。人生のはかなさや行きづまりがあった場合には、ほとんど出家している。

――ああ、そうですか。社会が複雑になればなるほど、自殺はまだまだふえる傾向

にあると思いますね。

池田　世に著名人といわれる人も、残念ながら、ずいぶん自殺している。

――近年では、作家の三島由紀夫（一九七〇年、自衛隊に乱入して自決）、川端康成（一九六八年、ノーベル文学賞を受賞。その四年後に自殺）、外国では、ヘミングウェー（一九五四年にノーベル文学賞を受賞。晩年は精神異常により自殺）、老舎（文化革命のなかで自殺したと伝えられる）、また最近では、イギリスの作家アーサー・ケストラーなどが思い出されますね。

池田　川端さんとは、一度お会いすることになっておりましたが、お会いできず残念でした。

三島さんとは、ホテルオークラの床屋で一度お会いしたことがあります。

北条（浩）前会長（創価学会第四代会長）の学習院時代の友人でした。お二人とも、本当に残念なことをなされた。

しかし、今年（一九八三年）の六月、ルーマニアを訪問したさい、作家同盟の方々と

会見しましたが、彼らは三島、川端の名前をよく知っておられた。お二人の翻訳本を読んでおられたようです。

――あと、どんな本が話題にでましたか。

池田　やはり『源氏物語』、谷崎潤一郎の話がでましたね。俳句についても、非常に熱心に研究していました。芭蕉、蕪村などの名前も当然、知っておりました。

自殺は「法器」を奪う行為

――アーサー・ケストラーの「死」については、フランスで話題になったようですね。

池田　ええ、ルネ・ユイグ氏と会談したおりに、まことにわびしそうな表情で、氏が、彼の自殺を告げておりました。

氏とは、何回となくお会いしましたが、あんな深刻な顔をみたことはなかった。

――ケストラーは、有名な『真昼の暗黒』の作者で、晩年は宇宙と生命の問題にも関心をいだき、『ホロン革命』という著書を出した直後でしたね。悔やまれますね。

池田　その本は、木口さん、お読みになっていますか。

木口　まだです。ぜひ、一度読んでみたいと思います。

池田　そういえば、トインビー*博士との対談のさいに、博士に、この人生でいちばん悲しかったことは、とうかがったときに、寂しそうな表情で、博士は、「私の隣の部屋にいた長男が、ピストルで自殺したときのことだった……」と。あまり、人にはいわないようにされていたようですが……。

――今年（一九八三年）になってフランスで出た『自殺』（クロード・ギヨン、イブルボニエック共著、五十嵐邦夫訳、徳間書店刊）という本が、日本でも翻訳出版され話題になっています。自殺というのは、どういう精神状態なのでしょうか。

池田　いわば、人生に行きづまりを感じたがゆえの一種の逃避行為といえるかもしれない。

―仏法では、自殺をどうとらえますか。

池田　仏法では、人間自身を「法器(ほうき)*」と表現し、自分自身の「法器」を、自ら奪う罪は、盗人の罪になるといっております。

死刑には反対する仏法の立場

木口　死刑制度の是非論が盛んですが、これは世界的な問題ですね。この点は、どうお考えでしょうか。

池田　死刑は反対です。

釈尊*の仏法が広まった、一つの象徴的な例として有名な阿育(あそか)大王*の時代があった。阿育大王は、ほとんどインド全域におよぶ統一を最初に成し遂げた王で、慈悲を根底とした善政を施したことで知られています。

彼は、寛刑主義をとっている。外国と多くの友好交流に努めている。また、文化の興

隆に最大の力をそそいでいます。

仏法に帰依した彼が、絶対平和主義を標榜したことは、たいへんに有名です。

木口　なるほど。すると極悪人に対しては、どうみますか。

池田　よく戸田*先生もいっておられたが、極悪人の場合でも、「無期刑」でよいのではないか、と……。

私も、そうせざるをえないと思うし、また、それでいいのではないでしょうか。

これは罪人とはまったく別ですが、鎌倉時代、蒙古襲来のさい、「元」の使者を、幕府が斬首したことについて、「科なき蒙古の使の頸を刎られ候ける事こそ不便に候へ」（『蒙古使御書』）と、日蓮大聖人は斬ってはいけなかったとおっしゃっている。

ともかく仏法は、この世に生をうけたものは、この人生をどう意義あらしめるか、価値あるものとしていくかを教えている。その最高の価値ある人生が成仏であることは当然として、この人生を「所願満足」「衆生所遊楽」*と説かれているごとく、最大の喜びと充実しきった人生にしていくことが大事なのです。

人生の総決算が「死」の瞬間に集約

――さきほど、ルーマニアでも『源氏物語』が話題になったということでしたが、この物語にも、たしか「死」についてのくだりがありましたね。

池田　『源氏物語』では、一次元からとらえるならば「生老病死(しょうろうびょうし)*」ということが、全体のモチーフになっているともとれる感がありますね。

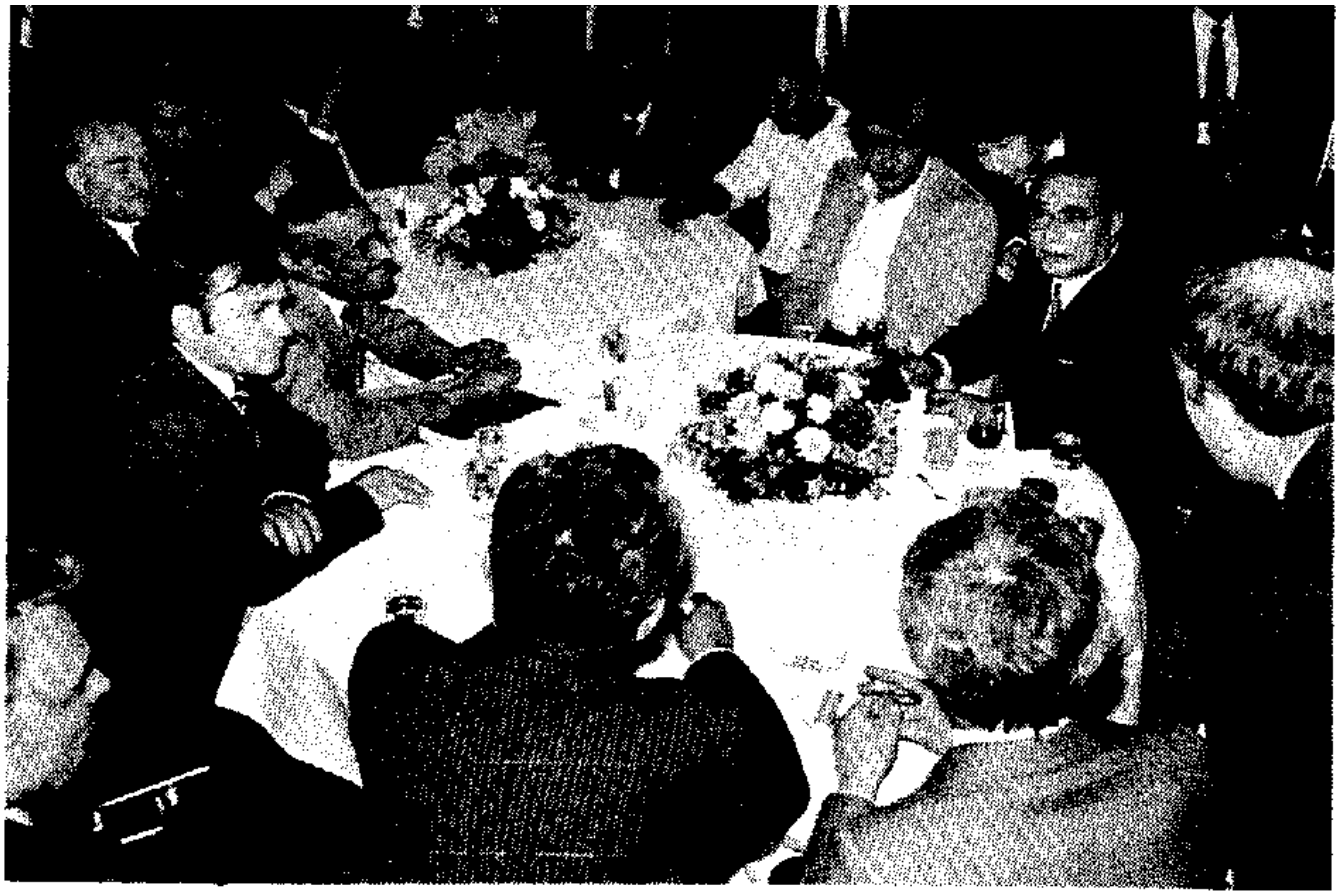
平安時代の作品とはいえ、紫式部の『源氏物語』は、多くの文学の原点といえるでしょう。「死」の姿に対する表現として、四つの描写が記憶にあります。

木口　そうですか。

池田　紫式部は、光源氏(ひかるげんじ)を中心として近親や、最愛の人びとの死の姿をえがいて、

「淡(あわ)のごとく消えゆく……」

「露の消えるがごとく……」



ルーマニアの作家同盟の詩人，文学者たちと『源氏物語』などについて懇談する池田大作氏。

「枯葉が散るごとく……」

「灯（ともしび）が消えるがごとく……」

というような表現をしています。

――そのとおりですね。

池田　そこで紫式部は、多くの「死」の場面を、かならずといってよいほど「秋」に設定している。

まあ、何人かの女人に対しては、恋慕の情すてがたく、春に死なせていますが……。

また早く、生に流転させようという作者の情愛がそうさせたのでしょう。

木口　なるほど、おもしろいですね。

池田　ともかく仏法では、人生の総決算が、「死」という瞬間の場面に集約されると説かれている。

木口　非常に厳しいものですね。

池田　そうです。

しかし、そうでなければ刹那主義、快楽主義に陥って、なんの進歩もなくなってしまうでしょう。時代の進歩もなくなってしまう。また人生、あまりにもふざけ半分になってしまう。

それでは、自己を律すること、人びとへの善意、社会への貢献などというものは、忘れ去られてしまうでしょう。

――同感です。

池田　「きびしきなり三千羅列」（『御義口伝』）――と仏法では説かれている。

つまり作々発々、瞬間、瞬間の生死流転に対して、網の目も許されないほどの厳しき因果律が、厳然として積み重ねられていくわけである。

そこで『女人成仏抄』という御書には、「されば経文には一人一日の中に八億四千念あり」といわれ、その念々が、ことごとく業因になっていくと述べられております。

――漠然としていれば、なにもわからないですむように、社会にも、また自身に対してさえも、傍観的な生き方はできるかもしれない。しかし、それなりの厳しき因果律は、どうしようもないと思います。

池田　日蓮大聖人が、「先臨終の事を習うて後に他事を習うべし」（『妙法尼御前御返事』）と説かれている。

他事――政治、経済ということも、もちろん大切であるが、まず、この「生死」という根本命題に挑戦し、解明しゆかんとすることが、人生の最大の課題であるということだと思います。

いまの世界の人びとの志向性は、政治優先、科学優先、経済優先で一見、賢明のようであるが、じつは、本末転倒しているといわざるをえない。

――まったく、そのとおりですね。ところで、人間は、いつ自分が死ぬかというこ

とがわかるわけにはいかないんでしょうか。（笑）

池田　われわれ、凡夫はわからない。（笑）

ただ病人が死の直前になって、なんとなく、自分は、もはや余命いくばくもないという察知は、あるようです。

ある医師が語っていたことですが、病人が「もうこのへんだと思います」とか「これまで、ありがとうございました」などの言葉を口にすると、かならず二十四時間以内には死んでいくといいます。

しかし、何年、何月、何日、何時ごろ、死ぬかというようなことは、当然、わからないと思う。

生命の流転は永遠

木口　仏さまは、どうなんですか。

池田　覚者であられるから、知っておられる。その証拠として、釈尊も、日蓮大聖人も、きちっと、一つの仏法上の方程式を自ら示されている。

木口　それはどういうことですか。

池田　釈尊は、霊鷲山（りょうじゅせん）*において仏法を説き、霊鷲山の東北にあたる跋提河（ばっだいが）のほとりの沙羅林（しゃらりん）で入滅している。そこは純陀（じゅんだ）という大工さんの家でした。大聖人は、身延山で妙法を講誦し、やはり東北にあたる現在の多摩川、当時は「たはがわ」といっておりましたが……、そのほとりの池上にてご入滅なされている。また、池上家は鎌倉幕府の建築奉行でした。釈尊も、大聖人もわれわれでは考えられない、ひとつの同じ儀式というものをふまえられておられる。[注2]

木口　なるほど。不思議な一致ですね。

池田　ですから、日蓮大聖人は「委細（いさい）に三世を知るを聖人と云う」（『聖人知三世事』）

とも仰せなのです。

木口　なるほど。なるほど。

池田　近きをもって遠きを推す、また一事が万事である。ゆえに、私どもは「仏」を信ずることができるのです。

――ただいまの脱益（だっちゃく）の仏*である釈尊と、下種益（げしゅやく）の仏*である日蓮大聖人のご入滅の符合というものは、まことに不思議ですね。

池田　これらのことについて、「如来は如実に三界の相を知見せり」と『法華経*』では説かれている。

つまり仏法とは、「悟り」の哲学であり、この現実世界の姿を知見したものである。それに比して、いわゆるマルクス、ヘーゲル、カント*といったギリシャ哲学に端を発した西洋哲学、思想というものは、いまだ、そこに到達しえない過程の段階にある。ここに、抜本的な違いがあることを知らなければならない。

――そのとおりですね。西洋の哲学は科学の発達、時代の進歩、社会構造の変化と

いった、いわゆる人間生活の営み、文明といったものを客観視した次元においては、大きな功績を示してきたといえます。しかしいわゆる客観視だけでは、人間というものは、とらえきることができない……。

池田　人間そのもの、生命それ自体をとらえるには、そこにどうしても、主観視していくいき方が必要になってくる。

それが、絶対性の追究であり、宗教、信仰へと延長されていくわけです。

木口　なるほど。人間を主観視すれば生命、客観視すると生活であり、社会であるということもわかるような気がします。

池田　私の人生の師である戸田先生は、死の問題について、興味ぶかいことをよくいわれていた。それは――。もし、自分が昭和何年何月何日に死ぬということが、みなわかってしまったら、これほど、おもしろくないことはない。むしろ苦痛である。こんなわびしいことはない。

むしろ凡夫は、わからないほうが幸せに生きられるものであるということで、そのこ

とを仏さまは残してくれたのかもしれない……と。（笑）

木口　おもしろい話ですね。

池田　ともあれ、以前にも申し上げましたように、生命の流転というものは永遠である。これが仏法の大原則論となっているところです。

八万法蔵*という膨大な法門の魂ともいうべき、『法華経』の『寿量品*』には「方便現涅槃*」と説かれている。

これは、一日にたとえてみるならば、朝日が昇り眼をさます。「生」である。その「生」の延長として一日の行動が始まる。一日の行動を終えて、疲れを癒すために家路につく。夜、あすの「生」のために休息の床につく。これすなわち、一日の「死」である。これと同じように、一生の価値ある活動を終え、新たな活力ある生命力をえるために、「死」という方便の姿を示すというのです。

この流転を、三世永遠に繰り返しゆくのが十界にわたる「生命の本体」であるという意義だと思います。

太陽、月そして地球の寿命は!?

――ところで木口さん、星もうまれては死んでいくわけですが、星の寿命は、どういうふうになっているのでしょうか。

木口　そうですね。

星には、それぞれ寿命がありますが、まえにもお話したように、星は回転するガス雲からできます。

それが、かたまるときの質量の大きさによって、一生の長さが決まってしまいます。

池田　質量の大きい星ほど短命であるといわれていますが、それだけ行動が大きく、活発ですから、エネルギーを早く使い果たしてしまうのでしょうか。

木口　そのとおりです。質量の小さい星は、逆に、あまりエネルギーを使いませんから長命です。

―　われわれの地球の寿命は、どれぐらいなんでしょうか。

木口　地球は現在、約四十五億歳といわれます。あと何年、寿命が残っているかは、当然、太陽と密接な関係があるわけです。

池田　太陽は、あと約五〇億年から六〇億年で、自らのエネルギーを使い果たし、崩壊が始まるといわれていますね。

木口　ええ、太陽の現在の年齢は約四十五億歳、つまり太陽の寿命は、ほぼ一〇〇億年となります。

―　どうやって寿命を計算するのですか。

木口　簡単にいえば、太陽は、水素が核融合し、ヘリウムとなって、エネルギーを光として放出しています。

そこで、太陽から地球に届く光の熱量と太陽との距離から、太陽が時間あたりいくら熱量を出しているかを計り、太陽の重さから燃料の量をもとめて寿命を計算します。

―　地球の年齢は、どうやってわかるのですか。

木口　地球上の鉱物のなかの放射線を出す物質の量から計算します。

―　月はどうですか。

木口　詳しくは、まだ分析されていませんが、ただ地球と同時期の誕生ということは間違いありません。

池田　太陽が約四十五億歳。地球も月も同じく約四十五億歳。この三者に、密接な関連性が見いだせるわけですね。

木口　そのとおりです。

―　その他の天体はどうですか。

木口　太陽系内の他の惑星については、残念ながらデータ不足ですが、ほとんど地球の年齢と同じであると信じられています。ところで太陽の年齢がたって、この水素が少なくなると、太陽はどんどん膨張を始めます。

――すると地球上にも、重大な変化がおこりますね。

池田　温度は急上昇し、あらゆる生態的バランスがくずれ、ついにはすべてが焼きつくされてしまいますね。

木口　そのとおりです。太陽は、現在の大きさの一〇〇倍から二〇〇倍にもふくれあがり、水星、金星、そして、おそらく地球をものみこんで、いっしょに燃えてしまいます。

これを、「赤色巨星*」といいます。こうした星の終末は、他の天体で、実際に観測されています。

――その後は、どうなるのですか。

木口　太陽の膨張は、約二〇億年つづき、その後、逆に急速に収縮していきます。そして、ついには大爆発を遂げて、太陽の外層部をガスや塵として宇宙にバラまき惑星状星雲をつくります。残った部分は「白色矮星(わいせい)*」という、ごく小さな星となってしまいます。

スカイラブに取りつけられた太陽望遠鏡がとらえた太陽のプロミネンス活動。

すべてに「成住壊空」のリズムが

池田　そうですか、まことに壮大で劇的な、われわれの想像を絶した太陽の「死」ということになりますね。

太陽も、月も、そして地球も、すべてが、仏法の説く「成住壊空（じょうじゅうえくう）」*の法則のうえにのっとって運行している。

まえにも述べたように、宇宙それ自体もいま膨張期にある。この膨張期こそ妙法が広まっていく大前提になるわけです。

ともあれ森羅万象、いかなるものといえども、「成住壊空」のリズムにのっとっている。その点を、厳しく見きわめたのが仏法なのです。

この「四劫」で、人生をとらえてみるならば、

「成」とは、誕生。青年期。

「住」とは、壮年期。

「壊」とは、老年期であり、

「空」とは、死である。

―――そうなるでしょうね。

池田　また、「一日」にもたとえられる。

朝は「成」

昼は「住」

夕方、夜は「壊」

深夜は「空」

木口　なるほど、そういう流れになるでしょうね。

池田　ですから、今度は「一年」としてとらえてみれば、

春は「成」

夏は「住」

秋は「壊」

冬は「空」

とも考えられる場合もあるでしょう。

――　よくわかります。

池田　ここで、西洋哲学と対比して、いちだん深く、実在論の思索をしていかなければならないことがある。

それは、少々むずかしいですが、いわゆる「空」という問題です。ここに大乗仏教*の真髄（しんずい）がある。

「有る」といえば有る。「無い」といえば無い。しかし、厳然と実在する存在。

それを、仏法では「中道一実」、「我（が）」と説いております。この「我」という存在が、なんらかの具体的な一つの生命に発現され、誕生しゆくことが「成」である。それが「住」「壊」「空」というリズムに流転されていくことになる。

――最近は、天文学者のなかにも、星の誕生から消滅までが、仏法で説くような「成住壊空」の原理に、非常にちかいという人が少なくないようですね。また先日も、『日本経済新聞』の論説に、「成住壊空」の原理に「近代科学の宇宙像が奇妙に、にかよっている」と、載っていましたね。

近代天文学の発見と仏法の宇宙観

木口　たしかに、不思議なぐらい近代天文学の発見と、仏法の説く宇宙観とは相通ずることが多いと思います。現象面での星の誕生・消滅と、それをつらぬく重力の法則は、物質面の次元にすぎませんが、さきほどの話題のなかの「客観」と「主観」のお

話を彷彿させます。

――そうですね。

「主観」と「客観」という立場については、今世紀最大の科学者の一人といわれたドイツのハイゼンベルク*の志向性も同じであるといえるのではないでしょうか。

池田　彼の「不確定性原理*」は、よく知られていますが、とくにノーベル賞を受けて以来の、ハイゼンベルクの思想の傾向は、急速に〝万物の合一性〟についての考え方を強めてきた。

木口　そのとおりです。「不確定性原理」という理論は、二十世紀の科学を前世紀までの科学と峻別する大原理なのです。この原理によってニュートン*の機械論も、ダーウィンの進化論*も破産してしまいました。これによって、人間の主観が物理学に復権したといえます。

池田　たとえば、ハイゼンベルクは、「われわれが観測しているのは、自然そのものではなく、われわれの探究方法に映し出された自然の姿である」という意味のことを

いっている。

木口　ええ、ハイゼンベルクが、デンマークの物理学者、ボーア*博士と共同提唱した「観測される系」（客体）と「観測する系」（主体）との合一性です。

ボーア博士は、世界的学者を多く育てたノーベル賞学者として著名です。

ハイゼンベルクたちのこの見解を、量子物理学では、「コペンハーゲン解釈」といっており、二十世紀の前半の西洋哲学の出発点となっています。たとえば、イギリスの哲学者、ホワイトヘッドの形而上学（一九二九年、『過程と実在』）もそうですし、アメリカの哲学者、ライヘンバッハやカルナップの実証主義もそうです。

しかし、物理学者はこれらの哲学に、どうしても満足できませんでした。

現代科学も仏法を志向

――ボーアもハイゼンベルクも、晩年は仏教に関心をいだくようになっていた、と

いうのは有名な話ですね。

池田　そうですね。まえにも何回か述べてきましたが、偉大な科学者は、かならずといってよいほど、宗教を志向している。そのなかでも仏法を志向してきたことが、不思議なぐらい一致しておりますね。

――そうですね。どうやら、現代科学の志向性も仏法の世界に入っていますね。

池田　仏法では、環境としての「依報」と、主体としての「正報」が、二にして不二*であるととらえます。

『瑞相御書』という御書には、「夫十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし」とありますが、人間と環境社会との関連性を鋭くとらえております。

木口　「二にして不二」ですか。まさに卓見ですね。

科学の世界では、長い間、「環境」は「環境」、「主体」は「主体」として分離して考えられてきました。

それゆえに、科学は長足の進歩を遂げましたが、進歩すればするほど、じつは袋小路に迷いこんでいるということは事実といえます。

――なるほど、そうですか。

太陽はマイナス二十六等星

――ところで、ハレー彗星*が、約七十六年ぶりで帰ってきますね。

木口　ええ、今回も周期どおり、間違いなく太陽のほうに向かって戻りつつあります。

池田　昨年（一九八二年）の十月十六日でしたか、アメリカのパロマ天文台が、早々とみつけましたが、わが〝地球国〟に近づくのは、あと三年かかりますね。それにしても、よく確認できたものですね。

木口　まったく、おっしゃるとおりです。ハレー彗星を、こんなに早くみつけたといっても、まだ土星の軌道の外側を飛んでいるところです。光度は、二十四等級と観

測されています。

――ところで、星の明るさを示す等級は、どのぐらいまであるのですか。

池田　これは、木口さんの分野ですが（笑）、ふつういわれているのは、目のいい人が、よく晴れて澄んだ空を仰ぎみるとき、その肉眼でみえる明るさが六等星である、となにかで読んだ記憶がありますが……。

木口　ええ、そうです。それより一〇〇倍、明るい星が一等星です。もっと明るくなりますと、マイナスをつけます。反対に、等級の数が多くなるにしたがって、光の弱い星となります。

池田　すると金星などは、いちばん明るい等級になりますね。

木口　そのとおりです。

金星は、マイナス四・四等星になっています。

池田　東京では、実際に金星がそれほど輝いてはみえませんね。

木口　ええ、都会の灯（あか）りや、スモッグなどで汚れていますから……。

―その星の等級を定めるとき、なにによって決めるのですか。

木口 星の等級は、地球からみて、最も明るくみえるとき、これを最大光度といいますが、それを基準にしています。

―太陽系のなかの惑星は、ぜんぶ、肉眼でみることができますか。

木口 海王星、冥王星はムリです。

池田 土星はどうですか。

木口 マイナス〇・四等星ですから、原則的には、みえる明るさです。

―火星は、何等星ですか。

木口 マイナス二・八等星ですから、金星についで明るい星です。

池田 太陽は、何等星ですか。

木口 マイナス二十六等星です。

池田 さすが、巨星ですね（笑）。月はどのぐらいですか。

木口 満月で、マイナス十二等級です。

ハレー彗星の地球への接近

――なるほど。そうしますと、二十四等級ぐらいのハレー彗星を、どうやってみつけたのですか。

木口　五メートルの反射望遠鏡と、特殊な電子技術を組み合わせて、とらえることができました。ちょっとまえまでは、考えられなかったことです。

池田　最新科学のめざましき成果といえますね。いま、どのあたりを飛んでいるのですか。

木口　パロマ天文台の確認した位置から計算しますと、八月（一九八三年）いっぱいは、まだ土星の軌道をゆっくり飛んでいます。

――その後の動きはどうですか。

木口　九月には、土星軌道を通過し、来年（一九八四年）いっぱいは、木星の軌道の

外側を飛んでいます。

池田　太陽に近づくにつれて、動きが速くなると聞いたことがありますが。

木口　ええ、そのとおりです。太陽の引力が強くなりますから、急に速くなります。来年の十一月には、火星の軌道に入ります。

池田　そのころから、太陽の熱によって、有名な箒（ほうき）のような尾に成長してきますね。

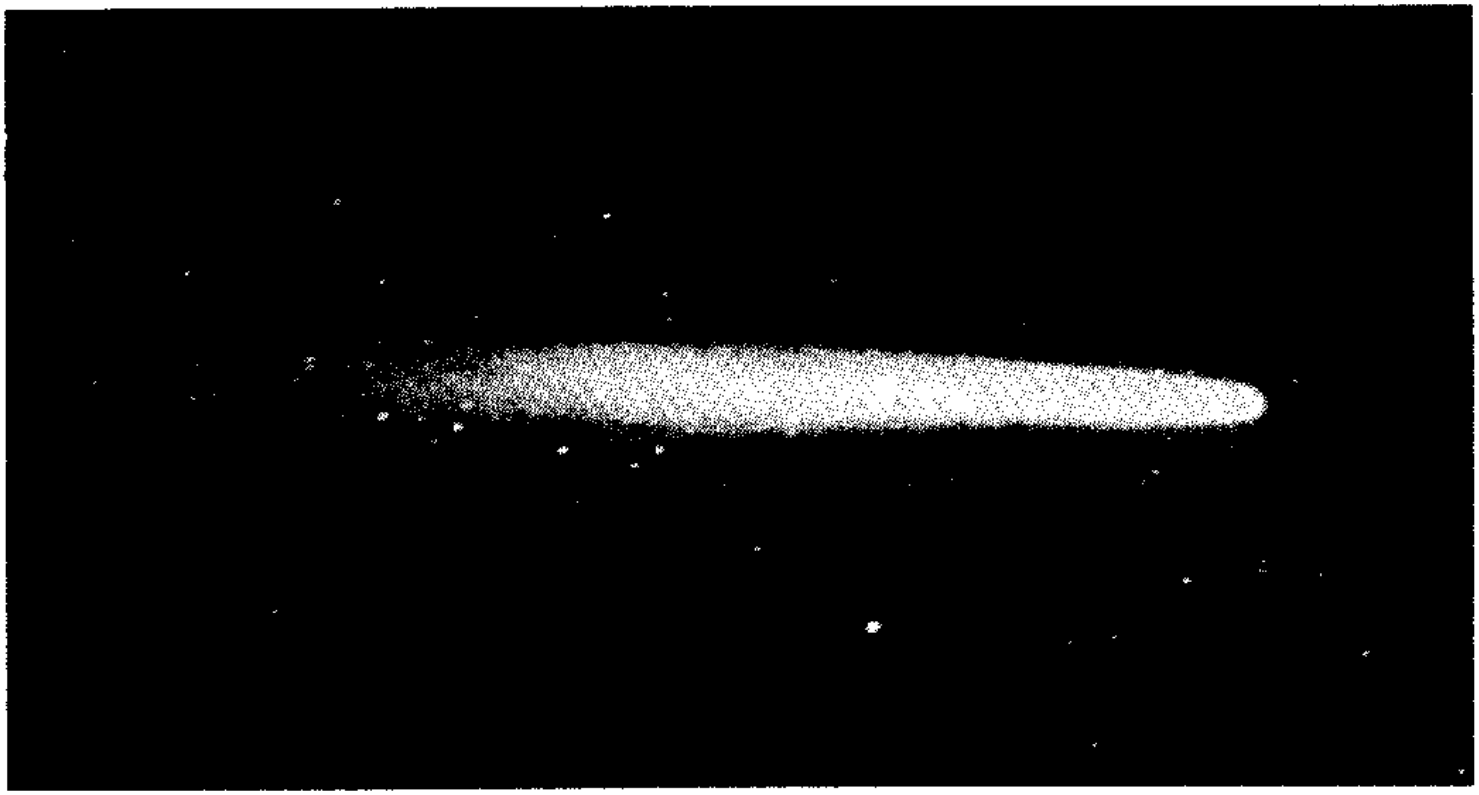
木口　そのとおりです。彗星の頭の部分は核といいますが、宇宙塵*を含んだ水や炭酸ガスの凍ったかたまりです。

ドライアイス状で、雪ダルマに似ていると考えられています。

熱をうけますと、蒸発して、ガス体が核を包みます。

それをコマといいますが、飛びながら尾となって、一見、長い髪の毛のようになびかせます。

池田　彗星は、英語で「コメット」といいますね。この語源は、ギリシャ語の「コメテス」からきていると聞いたことがありますが、どうですか。



『吾妻鏡』をはじめ，世界中に古い記録が残されているハレー彗星が76年ぶりに戻ってくる。

―それは、長い髪の毛の意味ですね。そこから由来しているのでしょう。

木口　ええ、太陽に最も近づくのを「近日点」といいますが、そのときが最も長く流れます。

前回（一九一〇年）は、その長い尾は毒ガスで包まれていて、かすめた場所の生き物は死に絶えると、世界中が大騒ぎになったことが記録されています。

池田　そうでしたね。科学的無知につけこんだ、無責任な人心攪乱（かくらん）といえますね。

ところで、ハレー彗星の周期と、太陽の

黒点活動の周期とは同じだと聞いたことがありますが、どうなんでしょうか。

木口　そうです。黒点が多くなり、太陽の活動が弱められる周期は、いろいろあります。現在確立しているのは十一年です。それより長い周期では、約八十年の説もあります。

ハレー彗星の周期は、七十六年でだいたい同じ周期です。

――この関係は、どのていど解明されていますか。

木口　まだ、じゅうぶんにわかっていません。

宇宙の運行だけは、いまのところ科学でも、どうにもならないことがあまりにも多いのです。

「いかに」といえば答えられることでも、「なぜ」というと答えに窮(きゅう)します。

池田　この宇宙には、科学ができることと、科学にもできないことがある。

当然、これからも科学ができることは、ますますふえていく。と同時に、科学ができないことをどうするかについても、真剣に考えていかなければならないのではないで

しょうか。

仏法は、そのたてわけを、明確にしている哲理ともいえますね。

木口　よくわかります。

科学にいま必要なのは、さらなる進歩と同時に、〝科学かならずしも万能ならず〟という現実を、率直にうけとめていくことだと思います。

――ところで、今回の接近で、ハレー彗星が、地球からよくみえるのは、いつごろになりますか。

木口　再来年（一九八五年）の十一月と、その翌年の四月です。

今回のハレー彗星の軌道は、地球からみる位置としては、あまりよくありません。

それでも、一九八六年の四月二日の早朝四時ごろには、東京ですと、南の低い空でみえるはずです。

池田　日本では、人工衛星で、ハレー彗星の調査をすると聞きましたが、木口さん、どうなっているのですか。

木口　ええ、一九八五年の十一月に、惑星探査機が打ち上げられます。私どもも注目しています。

この調査は、彗星を近くでみるだけではなく、直接、彗星の物質をさぐるので、いわば「さわる計画」になるようです。

古文書に記述されているハレー彗星

――ところで、ハレー彗星の出現については、世界中に、古い記録がたくさん残されているようですが。

池田　そうですね。

日本では、有名な『吾妻鏡』をはじめとする、鎌倉時代の歴史書の記述は、よく知られている。

木口　どのように記録されているのですか。

池田　いろいろ記されていますが、たとえば、一二二二年の八月二日に、大きさが月の半分ほど、長さが一丈八尺（約五・五メートル）の彗星があらわれたとあります。後世によって、これは初期のハレー彗星と確かめられています。

すさまじい光芒（こうぼう）を放っていたようで、中国では、このとき驚いて年号を変えている。また、隣の朝鮮では、昼間でもみることができたという記録が残っている。

――木口さん、いっぺん天文学史上の記録と、いま名誉会長がいわれた古文書の記録をつきあわせてみると、おもしろいのではないでしょうか。

木口　そうですね。

これは「古天文学」という分野ですが、ハレー彗星が、昼間みえたという天文学上での記録が残っているという話は聞いたことがあります。

たしか、唯一の記録のはずです。

池田　そうですか。

このハレー彗星が、記録的な明るさをみせた年は、私どもが信奉する日蓮大聖人が、

誕生された年（一二二二年）になります。

――ええ、そうですね。

記録といえば、今年（一九八三年）の五月三日に観測された新彗星が、地球にたいへんなニアミス（異常接近）をおこしましたね。

木口　そうですね。それは、まえでもちょっと出ましたが、「アイラス・荒貴・オルコック彗星」です。

ニアミスは五月十二日でしたが、私どももヒヤッとしました（笑）。発見以来、十日間ほどで飛び去っていきましたが……。

――どのくらい近づいたのですか。

木口　四五〇万キロです。

池田　これまで、地球にいちばん接近した彗星は何キロですか。

木口　一七七〇年のレキセル彗星で、一〇〇万キロでしたから、今回のものは、史上二番目になります。

―少しでも軌道がはずれていたら、地球と衝突したかもしれないですね。

木口　まったく、そのとおりです。新しい彗星ですから、私どもの重大な研究課題です。

―これまでに、彗星が地球と衝突した例は、ありますか。

池田　なにかで読んだ記憶ですが、二十世紀の初めでしたか、シベリアに、大きな〝火の玉〟が落下したことがありましたね。

木口　ええ、それは一九〇八年六月三十日のことです。〝火の玉〟のようなものが飛んできて、六〇キロ範囲の森林がなぎ倒されました。

池田　その風圧で、シベリア鉄道が脱線したほどの爆発だったにもかかわらず、その〝火の玉〟が、なんであったか長い間、ナゾにつつまれていましたね。

木口　ええ。

その後、地面に残されていた物質の分析などから、今日では、小彗星の核が、衝突したと考えられるようになってきました。

天体異変が最も続出した文永年間

――ああ、そうですか。〝火の玉〟といえば、鎌倉時代の記録には、よくそうした表現がでてきますね。

池田　そうでしたね。

さきほどの『吾妻鏡』のほかにも、有名な歌人で、「百人一首」の撰者（せんじゃ）でもあった藤原定家の日記『明月記』にもでてきます。

――よくご存じですね。

池田　いやいや、私も関心があって……。

木口　定家には、天文知識があったのでしょうか。

池田　当然、天文学者ではないし、当時は京都に住んでいたわけです。ですから、地方の天文現象などは伝聞にもとづいています。

その彼が、彼なりに、天文現象をとらえ残したということは、たいしたものだと、私はみています。

余談になりますが、この定家については、最近では作家の堀田善衛さんが、「定家明月記私抄」（雑誌『波』に連載中）にかなり詳しく書かれておりますね。

木口　そうですか。

定家は、〝火の玉〟を、どのように表現していますか。

池田　ここにちょうど、きょうの「てい談」のために、原文を持ってきましたので、志村さん、ちょっとそこのところを読んでいただけませんか。

――　わかりました。次のようなところでしょうか。

「夜ようやく半ばならんと欲して天中光り物あり、その勢、鞠の程か、その色燃ゆるが如し、忽然として躍るが如く、坤（南西）より艮（北東）に赴く、須臾（しばらく）にして破裂し、炉を打ち破るが如し……」

池田　たいへんに文学者らしい描写をしています。表現力も鋭く、豊かである。

それでいて、正確な臨場感もあります。

木口　やはり、科学者の記述とは違いますね(笑)。さきほど、お話した「古天文学」では、古い時代の天文現象を最新の天体科学の粋を駆使して究明しています。

池田　なるほど、「歴史」の真相に、現代科学が挑戦しているわけですね。たいへん興味ぶかい話です。

木口　この分野の専門家のなかには、天体異変が多いといわれるこの時代に、本格的に取り組もうとする人も、でてくると思います。

池田　そうですか。かつて、調べてもらったことがあるのですが、「文永」年間が、天体異変が最も続発していたようです。

――どのような記録が残っていますか。

池田　ちょっとみてみますと、たとえば主なものでも、文永元年(一二六四年)の六月から九月まで、彗星があらわれては消え、「光芒半天に及ぶ」と記した『五代帝王

物語』がある。

さらに、文永二年十二月の彗星については『外記日記』にある。文永三年正月の彗星は『関東評定伝』に載っている。

文永五年七月の彗星は『公忠公記』にみえる。

また「文永」の十三年間は、さらに日食、月食、星食がつづき、大雨、旱魃（かんばつ）、大風、地震など、当時の史料は、異常気象でうまっている。

木口　世界の天文学史からみても、あまり類例のないことですね。

――なかんずく、「文永八年」の一年間は、天体異変が集中的に続発しているようですが。

『立正安国論』と天文現象

池田　そのとおりです。

有名な『立正安国論』に説かれた時代相が、ますます深刻化されてきた年です。まさに、御文どおり「国土乱れん時は先ず鬼神乱る鬼神乱るるが故に万民乱る」という時代であったわけです。

木口　「鬼神」とは、どういう意味でしょうか。

池田　「鬼神」の「神」とは、一言でいえば思想のことをいいます。「鬼神」とは、とくに、人間をして不幸におとしゆくような悪思想をさします。

木口　なるほど。

池田　ですから、「正法」に対して「邪法」をさしているわけです。まあ現代的にいうならば、人間の思考作用が破壊され、人間性が危機に瀕（ひん）する状態といえましょうか。

人びとをして幸福へと昇華（しょうか）させゆくべき軌道からはずれた思想であるがゆえに、万民が乱れる。

つまり、人間的な秩序の混乱であり、異常な社会不安の増大という意味になりましょ

うか。

――すると、人間社会と国土、自然現象とのかかわりあいも、明確にとらえた意味と考えることができるわけですね。

池田　そう思います。

『立正安国論』の深義は、そこにあると思いますし、その関係性を鋭く見ぬいておられると、私は拝したい。

木口　十数年もまえになりますが、池田先生は、こうした面における学問研究は、「まだまだこれからの課題」と書かれていたのを読んだことがあります。

池田　そうでしたか。

「文永年間」周辺の異常な時代相は、ヨーロッパにおける中世暗黒時代とあいまって、人類の重大なる一大転換期をはらんでいたと、私は思う。

文学者は文学者なりに、科学者は科学者なりに、人間というものを考えるうえでの、一つのエポックとして、時代とともに無限のテーマをあたえていくことでしょう。

「竜口の法難」の歴史的事実

――ここでふたたび「死」ということにもどりたいと思いますが。（笑）

仏法を説かれた仏さまは、常に、たいへんな迫害をうけておりますが、殺された方はいるのですか。

池田　ありません。

仏の弟子である「人師」「論師」、すなわち菩薩の位の場合は、殉教――犠牲になった人は、多くおります。

木口　ああ、そうですか。激しい布教の連続でしたから、仏さまのなかにも、殺された方がいるかと思いました。

――そういわれれば、そうですね。

有名な日蓮大聖人の「竜口（たつのくち）の法難*」は、史実にも残っていますね。「頸（くび）の座」という

死刑でしたが、ついに大聖人の命を奪うことはできませんでしたね。

木口　そうでしたね。

――　文永年間は、世界的に類例のない天体異変の連続だったということでしたが、この「竜口」の不思議な場面について、少し語っていただけませんでしょうか。

木口　ええ、そうですね。「竜口の法難」は歴史的にもたいへん有名です。約七百年前の事件でありましたが、史実も確かなようです。

――　そうですね。

木口　ただ、驚くべきことは、由比ケ浜の刑場上空を閃光（せんこう）のようにはしった〝火の玉〟が、あたりを昼間のように照らしたという事実です。

日蓮大聖人が、その場において、いままさに処刑にあわれんとした事実との関連性も、まさしく不思議といわざるをえませんね。

――　事実というものは、どこまでも事実でありますから……。

いかなる原因といいますか、因果関係によってかかる現象となったか――というこ

とを追究し解明したい、というのも現代人として当然のこととなりますね。

池田　私は、何度も申し上げますように、日蓮大聖人の仏法の信仰者です。この荘厳なる儀式を、当宗では「発迹顕本」*といいます。

それは、凡夫の姿をはらって、「本仏」としての立場をあらわされたという意義になります。

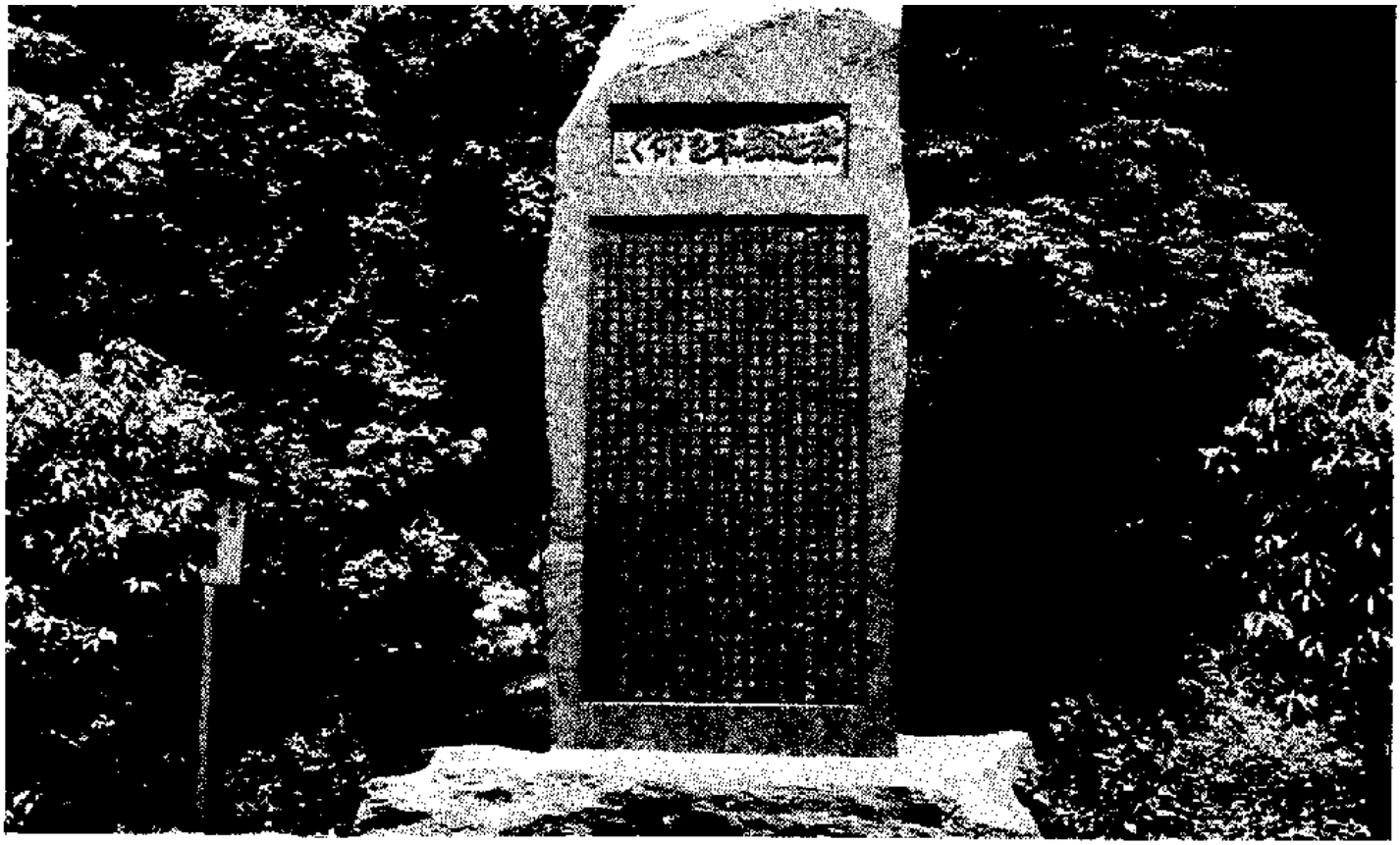
そして、いわゆる通途の仏法にみられる三世十方の諸仏の根源ともいうべき、久遠元初の自受用身の大境涯を示されたととります。これを本仏といいます。すなわち、ご自身の三世永遠にわたる本身を開顕されたと拝するわけです。

――まことに深遠ですね。なにか、わかるような気もしますが、たしかに難解にして、不思議なところですね。

池田　ひたすらな信仰の行動と真剣なる思索の積み重ねによって拝する以外ない。

木口　まさしく、「『仏法と宇宙』を語る」の真髄ですね。

――「竜口の法難」について、私どもが歴史で学んでいるのは、世の乱れの根本原



天体異変が続出した文永年間。鎌倉の護国寺にある「竜口の法難」の碑。

因を仏法の正邪によりあきらかにされ、一歩もひかれなかった日蓮大聖人を、時の権力者らが、斬首処刑の暴挙に出たということです。

池田　一往、そうでしょう。

仏法は、仏法者同士の法論によって、その正邪、優劣を論議、峻別していく伝統になっている。

それを、他宗の僧が法論をさけ、讒言し、為政者と結託しての宗教弾圧となったわけです。

木口　なるほど。

池田　しかし再往、仏法の次元では、も

はや当時は末法に入っている。

そこで末法に出現される仏がうける迫害については、『法華経』に明確に予言され、示されております。

木口　『法華経』のどこでしょうか。

池田　『勧持品』第十三の「悪口罵詈され刀杖を加えられる」、また「しばしば所を追われる」という経文ですね。

池田　そうです。

日蓮大聖人は、「竜口の法難」以前には、伊豆流罪、松葉谷の焼き打ち、後には佐渡流罪にあわれている。

その他の迫害も数えきれないというのは、あまりにも有名です。

さきほどの『勧持品』の色読は、ここに意義がある。すなわち、文上では、『法華経』で予言された地涌の菩薩のふるまい、文底では、末法の御本仏・久遠元初自受用報身如来の本地の御姿を顕現なされているわけです。

〝光り物〟の正体はエンケ彗星だった

木口　滝口の刑場で兵士の一人が、まさに頸(くび)を切らんと太刀を振りかざしたとき、とつぜんの天体現象が起こり、切ることができなかったというのは有名ですね。

池田　信じがたいほど不思議と思いますが、これは有名な事実ですね。

木口　とつじょ、月のような〝光り物〟が飛びきたったことは、古来、種々の真偽の議論がなされたところです。

池田　なるほど。そうでしょう。

木口　しかし、それは仏法についての無認識と偏見、またその史実を裏づけるような科学の未発達が、背景にあったといわざるをえない。

池田　このときの状況は、『開目抄』『種種御振舞御書』、あるいは、このとき殉死の覚悟で馳(は)せ参じた四条金吾への手紙などに、詳しくしたためられていますね。

池田　そのとおりです。

文永八年（一二七一年）九月十二日の丑寅の刻、いまの時刻でいえば、午前二時から四時にあたります。

漆黒のような暗闇のなか、毬のような〝光り物〟が、江ノ島の方角から飛んできた。その強烈な閃光に、太刀取りは目がくらみ倒れ臥し、他の武士たちも、恐怖に大混乱をきたしたとあります。

――たしかに、いくつもの御遺文にしたためられておりますね。

池田　この天体異変を研究した天文学界の権威がおられる。故広瀬秀雄博士です。博士は、天文学上の史料をもとに、年月日、時間、高度、方位角から逆算して、これをエンケ彗星の通過による大流星であると確定している。

――私も、広瀬博士のその研究論文のコピーを持っております。いや、さきに申し上げればよかった。（爆笑）

この方は東大の名誉教授で、東京天文台台長をなさった方です。

木口　広瀬博士は私も知っていますが、エンケ彗星は、地球に接近する周期が三・三年と最も短い彗星です。

これはアメリカの有名な天文学者フレッド・ホイップルが研究していることは、よく知られています。

池田　そうですね。

広瀬博士は、そのホイップル博士の研究から確認していったわけです。

――この点を、もう少しすすめていただけないでしょうか。

池田　そうですね。

まず、文永八年九月十二日の「丑寅（うしとら）の刻」を『年代対照便覧』でみますと、一二七一年十月二十五日の明け方「午前四時」になります。

――なるほど

池田　次に博士は、ドイツのK・ショッホがつくった『天体運行表』で計算していますが、それによると、この日の月没の時刻が、午前三時四十四分となっています。

御文にも、「夜明けなばみぐるしかりなん」（『種種御振舞御書』）と処刑を重ねてうながされている。

木口　なるほど。

池田　また、『上野殿御返事』の御文には「三世の諸仏の成道はねうし（子丑）のをわり・とら（寅）のきざみ（刻）の成道なり」とあります。博士は、午前三時四十四分の「丑の刻」の終わりから午前四時の「寅の刻」までのあいだにおきたという〝光り物〟を、この季節に明るい流星を発生させる「おひつじ・おうし座」流星群に属するものではないかと考えていったわけです。

木口　そうですか。「おひつじ・おうし座」流星群は、エンケ彗星を母彗星としています。ホイップルが研究したエンケ彗星による流星群が、四方に飛び散るときの中心点の位置から、地球の運動を補正して逆推算していくと確認できますね。

池田　そのとおりです。

どうも広瀬博士は、この〝光り物〟を、ホイップル博士のデータから、午前四時に出

現した高度三四度、方位角は南から西へ七九度の「おひつじ・おうし座」のエンケ彗星によって生まれた大流星に間違いないとしたようです。

木口　たしかに広瀬博士の研究は、日蓮大聖人の御文を科学的に裏づけていますね。私もなにかの機会に、もう一回、その論文をもとに計算してみたいと思います。

池田　ぜひ、研究してください。

――それにしても、「おひつじ・おうし座」は、不思議な天体です。今年（一九八三年）の五月に、アメリカのサンタクルーズ大学の研究者が、太陽系外で、初めて惑星とみられる天体を確認したと発表していますね。

木口　ええ、われわれの太陽系以外で、惑星の存在が、直接観測されたのは、初めてです。

――また、先日（一九八三年八月十一日）はこの銀河系内に、われわれの太陽系以外の恒星のまわりを、固体の物体が回っているのがみつかり注目されましたね。

木口　ええ、こと座の主星ベガのまわりに、球状の固体でできた輪をアメリカ、イギ

リス、オランダの赤外線天文衛星が発見したもので、いわば惑星のタマゴのようなものです。

池田　またひとつ、新しき宇宙時代の夜明けですね。いや、新しき地球平和へのめざめとしなければならない段階に入ったわけですね。

――行きづまりのこの地球世界を、確かなる希望の未来へと転換せしめていくには、やはり宇宙観……。つまり自己の小宇宙と広大なる宇宙をみつめた、新しい物の見方というものが必要不可欠ですね。

仏法では病気をどうみるか

木口　ところで「死」ということと関連しますが、いま「健康」ということに、たいへん関心がたかまっていますが。

――衣食たりて「礼節をしる」が、「病をしる」になっている感がありますね。（笑）

先日の厚生省の調査（一九八三年八月十三日発表）によると、八人に一人は、本格的治療を要する病気にかかっているそうです。

木口　これは、たいへんなことですね。

池田　たしかに「病」というものは、人生の最難問にはちがいない。私も幼少のころから病弱で、「死」という問題については、ひと一倍悩み、煩悶（はんもん）した人間かもしれない。

木口　そうですか。「生老病死」といいますが、仏法では「病」と「死」を、どのようにみるのでしょうか。

池田　そうですね。

関連性はないとはいえないが、イコールとはいえないでしょう。厳密にいえば、「病気」は「病気」、「死」は「死」である。

このことについて、戸田先生は、「病気じょうずの死にべた」という諺をいわれながら、よく指導しておられた。

木口　なるほど。

池田　ただ病理学的に、「死の原因はなにか」というときに、肝硬変であるとか、胃ガンであるとか、心筋梗塞（こうそく）、脳卒中というようなことになってくる。

木口　すると仏法では、病気そのものをどのようなとらえ方をしているのですか。

池田　仏法では、身体は「地水火風」の四大によって構成されていると説きます。この四大が調和を乱すと身体の病気になります。『法華経』には、「仏」は「少病少悩」といわれている。

仏身といえども生身（なまみ）だから、四大によって形成されている。ゆえに環境の変化によって四大が少し不調和になると、身体も少し病むことになる。また複雑な人間社会ですから、当然、多少の悩みもでてくる。

しかし仏は、すぐに四大の調和をとりもどし、悩みをのりこえていかれる。凡夫のように四大の調和を大きく乱し、「大病」「大悩」にまで引きずられてはいかないという意味ではないでしょうか。

―そうですね。仏法には、「四百四病」とありますが、これは、どういうことでしょうか。

池田　『治病抄』という御書に説かれた御文で、四大つまり「地」「水」「火」「風」の不順、乱れによっておこる病気の総称です。「身の病」と仰せです。

木口　ずいぶんありますね。（笑）

池田　一方、三毒*（貪瞋癡）などの煩悩や*業*によっておきる「心の病」では「いわゆる八万四千」とも説かれています。（笑）

―「地水火風」の四大とは、どういうことなんでしょうか。

池田　そうですね。

四大とは、身体を構成する一種のエネルギーともいえます。この身体エネルギーに、四種の性質があります。

「地」とはかたさの意で、地大はものを保持する作用です。人体でいえば、主として「骨」「髪」「毛」「爪」、あるいは「皮膚」や「筋肉」などになってあらわれます。

「水」とは、湿り気の意です。水大のエネルギーは物を摂(おさ)め、集めるという作用をもっています。主に血液、体液などの体液成分になってあらわれます。

「火」とは熱さで、「火大」はものを成熟させる作用をもっています。発熱、体温となってあらわれます。

「風」は動きの意です。「風大」はものを増長させる作用です。呼吸作用などになってあらわれます。

この「四大」が順ならざるゆえに病気になると説いているわけです。

木口　なるほど。たしかに、お医者さんは、どんな病気でもまず体温・血圧・脈搏を計り、呼吸をみますね。（笑）

――これは、ギリシャ哲学の原子論にも影響をあたえています。ただ、アリストテレスの「四元素説*」でも現象論にとどまり、いま名誉会長がお話されたようなエネルギー論にまでふみこんだトータルな体系ではないようですね。

池田　そうですね。

また仏法では、「心の病だけは、いくら名医でも治せず、仏の法門によってのみ治すことができる」とも説いております。

木口　なるほど。

この場合、「心の病」とは、思想的なものまで含まれているわけですね。

池田　そのとおりです。煩悩のなかに悪見や邪見として含まれています。

さらに、御書には、「法華誹謗（ひぼう）の業病最第一なり」（『太田入道殿御返事』）とまで説かれているのです。

木口　なかなか、厳しいものですね。

この「四大」が整うということは、宇宙自然の調和の姿にもあてはまることですね。

池田　そのとおりです。この宇宙も、四大という物質的エネルギーによって構成されている。四大が不調和になれば、宇宙現象も乱れます。四大が調和をとりもどせば、

万物もリズム正しい運行をかなでていきます。妙法は汝自身の生命の一切の調和、ひらいて社会の調和、世界の調和、宇宙の調和にまで広がっていくのが原則になっております。

木口　たしかにそうですね。

星のなかには、「変光星*」という、せわしなく息をはずませている発育不全のような星があります。（笑）

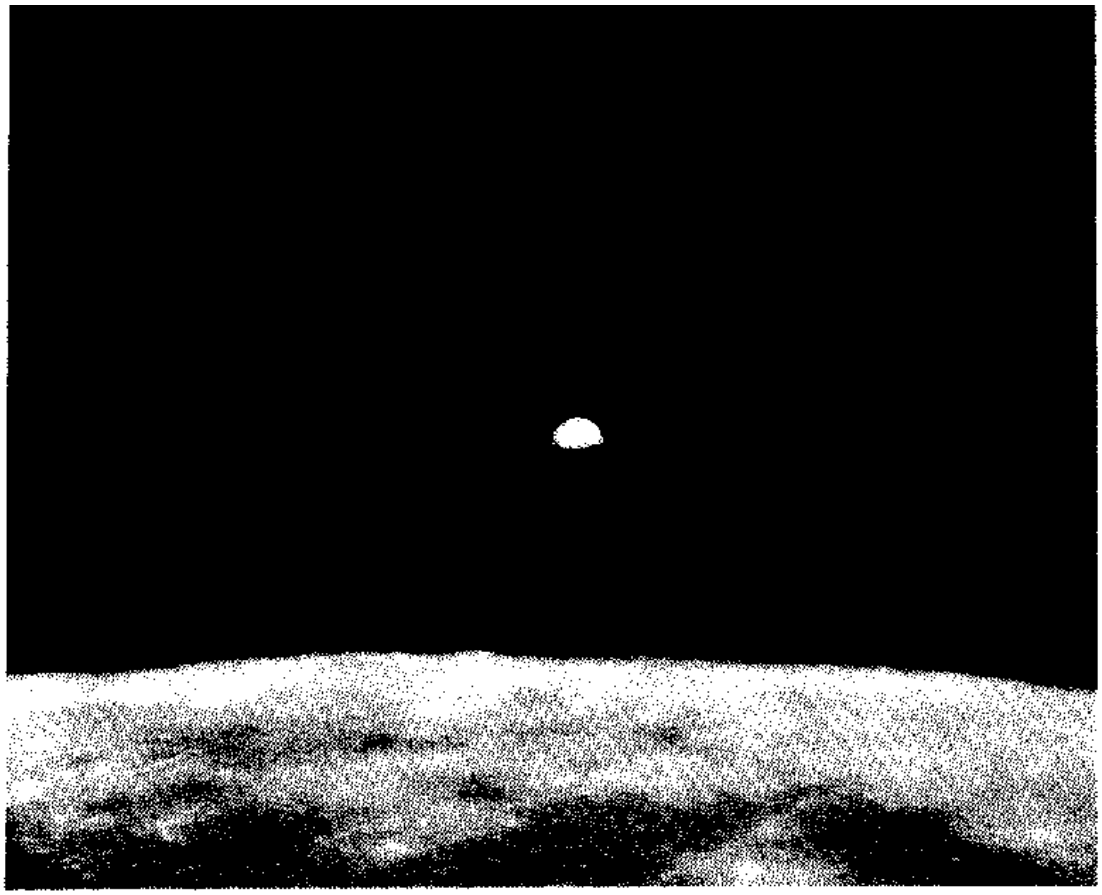
これは、重力や熱の出入が不安定な状態で、光も落ち着きがなく、地球からみると激しく光が明滅しています。

池田　なるほど。

まさに四大の不調和ですね。

仏法では「四大は万物を育て」と説かれます。星一つとってみても、絶妙なる「四大」の摂理により運行しているわけですね。

木口　そのとおりだと思います。



月面からとらえた宇宙空間に浮かぶ地球も，
絶妙なる四大の摂理によって運行している。

人は死後どれぐらいで生まれるのか

――ところで「病気」から「死」の問題にもどりますが、信仰していても自殺者はいると思いますが、信仰すれば自殺者がなくなると断定できますか。

池田　それはむずかしいでしょう。信仰といっても、「法華経を信ずる心強きを名づけて仏界と為す」（『三重秘伝抄』）、また、「信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり」（『生死一大事血脈抄』）となり、信心の強弱、厚薄が大前

提である。
ゆえに、いちおう信心しているだけであるとか、ただ形式のみの場合には、薄情のようであるが、別問題といわざるをえない。
ですから、信仰の確立、深化ということが大切になってくるわけです。

―― なるほど。

木口 信仰していて事故死にあった場合はどうですか。

池田 それもありえます。
ただ仏法上では「悪象」に踏まれて、とあり――現代でいえば交通事故のようなものですが、かりに、それで死ぬようなことがあっても、それが因で、地獄などの三悪道におちるわけではないということも論じられています。

木口 なるほど。

池田 また仏法では、そうした「死」を遂げた生命に対し、追善の法要ということが説かれております。

――ところで、人間は死んだのち、どのくらいでまた生まれてくるのでしょうか。

池田　たいへんな難問ですね。（笑）

これは、あくまでも信仰のうえから考えねばならない問題ですが、仏法では、死という意味での最高の成仏というものを、「上上品の寂光の往生」と説きます。これは、またすぐ新たに、この世に生まれる。

新しい躍動の生命で、社会に貢献しゆく人間として誕生してくる、ということになっている。

また、「中有（ちゅうう）の道」ということが御文にある。これは、死後の生命が、夢をみるようにさまよい、やがて宇宙の十界の次元の、いずれかに融合していくということになりましょうか。

たとえば、悪因悪果をもった生命の場合は、この「中有の道」を、こわき夢、悲しき夢、または、苦しき夢をみるごとくさまよいつづけ、最終的には、地獄、餓鬼、畜生の三悪道、または四悪趣、六道という低い次元におさまっていってしまうわけです。

一般的に「中有」とは、死の瞬間から次の生をうけるまでの期間のことで、「中陰」「中蘊」ともいいますね。

池田　そうですね。

人の「中有」は、いちおう四十九日とされ、七日ごとにふたたび生をうける機会があり、最後の七七日までに生縁が決定されるという経文もあります。

そこで、故人に対して追善回向する初七日から四十九日の法要という、今日みられるような伝統儀式ができあがってきたのではないだろうか。

なるほど。

「七」という数字はおもしろい数字ですね。

木口　月火水木金土日の一週間も七日です。

曜日の「曜」とは「かがやく」ということですね。

池田　そうです。太陽と月と、それに火星、水星、木星、金星、土星の五星をそれぞれ一週間に配したわけですね。

木口　ドレミの音階も七音ですね。

――色も七色の虹といいますね。（笑）

池田　宇宙の音も色も、すべて七音のリズムと、七色の光の光彩に集約することができるということでしょうね。

――たしかに「七」という数字は、「基本」というような意味あいがありますね。

追善とは死後の生命に法味をおくること

木口　さきほどの死後の問題についてですが、エンマ大王なんかは、どうなんですか。

池田　それは比喩（ひゆ）でしょう。

そうした譬（たと）えは、すべて、生命に内在する喜びとか、恐怖とか、苦悩とかの象徴としての生命の働きではないでしょうか。

木口　なるほど。よくわかります。

池田　ともあれ、それこそさまざまな「死」があり、「死に方」があるが、人間、一度は「死」が到来する。そのときに「苦痛なき死」――これが人間本来、最大の願いではないでしょうか。

――そのとおりですね。

木口　そのとおりだと思います。

池田　真実の仏法というものは、人に生きる希望をあたえる。さらに、ありとあらゆる悩みをすべてつつみながら、のりこえていける境涯をもつことができる。そして、さらに安らかな微笑をたたえゆく、後悔なき死を迎えられることができると思っております。

木口　なるほど。

池田　ちょっと題名は忘れましたが、たしか裁判関係にたずさわった人で、すでに絶版になった本だと思いますが、次のようなことを書いてあった。

木口　どのようなことでしょうか。

池田　それは、いくら、この地球上の人間が善行をおよぼしても、この社会がよくなるとはかぎらない。そこに、別な要因を含めて考えなくてはならない。さまざまな苦しい死に方をした「霊」のようなものが宇宙にはたくさんあるわけで、それを成仏させなかったら、正しい社会はできない――というような内容であったと思います。

――たしかに、そこらへんまで、考えていかざるをえないこともありますね。そうした存在を変えゆく、深い清らかな「法」といったものが必要と思いますね。

木口　深い話ですね。

池田　人生、社会へのまじめな思索の結果が、漠然（ばくぜん）とはしているが、人間の力では、いかんともしがたい、なんらかのものを感じとっていったのではないでしょうか。

木口　わかるような気がします。

池田　いまの話は、あくまでも、思索の範疇（はんちゅう）にすぎないことであるが、仏法上の「追善」ということは、そうした死後の生命に、妙法の法味をおくるという甚深（じんじん）の意義と

なるわけです。

木口　科学者の立場としては、「追善」という意義については、なかなか納得しないむきがありますが、たしかになにか永遠性のものがあることは感じます。

池田　仏法の勤行という儀式は、この「法味」を服（たく）するという意義になっております。そこに「追善」という意義も摂せられ、さらに、まえにもお話しましたが、日月、四天をはじめとするあらゆる諸天善神*にまで本源力をあたえていくという方軌があります。

――そうですね。

池田　その点については御書に「くろがね（鉄）を食するばく（獏）もあり、地神・天神・竜神・日月・帝釈（たいしゃく）・大梵王（だいぼんのう）・二乗・菩薩・仏は仏法をなめて身とし魂とし給ふ」（『曾谷殿御返事』）と説かれています。

――いま「くろがねを食する」というお話がありましたが、「鉄喰（く）う虫」という温泉地や沼に生存する細菌がありますね。

木口　一般には、「鉄」を食べることなど考えられないことですが、現実に「鉄」を食して生命を維持している細菌がいるわけです。

それにしても、七百年もまえに、大聖人はよく調べておられたのですね。

――一つの事実作用ですね。

池田　この「法味」ということも、仏法上からみれば、諸天善神もこの法味を食して、威光を発揮する。われわれもまたやはり、「南無妙法蓮華経」という無上の法味を、朝な夕なに食しながら、わが色心を調和させながら、生命力を満々と発現させゆく以外、真実の人生はない――ということになるわけです。

木口　なるほど。いつものことながら、眼前の視野が、大きく広がる思いがいたします。

第八章　〝生存の危機〟と仏法者の使命

「生の力」より「死の力」が強まっている

志村（司会）　大韓航空機が撃墜（一九八三年九月一日未明、サハリン沿岸モネロン＝海馬島＝上空近くで、ソ連空軍機により撃墜。死者二六九名）され、多くの人命が、一瞬にして失われてしまいました。十五か国もの方が乗っていたようで、世界的な問題になっています。先日、『朝日新聞』に「暗い時代だということは承知していた。しかし、これほどじゃないとあまくみていた」という声が載っていました。

池田　それは、多くの人の実感でしょうね。

たいへんに、いたましい事件です。本当に、お気の毒なことです。われわれの社会は、平和のようにみえていてもじつは、いたるところに「危機」がある。

木口　戦争の危機、ということでしょうか。

池田　それもあります。

――もっと幅広い「生命生存の危機」ということでしょうか。

池田　そうです。

われわれは、毎日、毎日を安穏に暮らしていきたいものだ。ですから、きょうも、あすも「生きていける」ということを信じている。また、疑おうとはしない。

しかし、じつは「生の力」よりも、何倍、何十倍も「死の力」が現実的に強まってきているのが、末法*という時代の特徴のようです。

木口　なるほど。「生と死」という問題は、永遠にわたる最も重要な課題ですね。

池田　たしかに、医学の進歩により、むかしは不治の病といわれた、結核や肺炎のような病気で、亡くなる人は少なくなった。文明の進歩とともに、自然災害からのがれられるようになったことも、少なくはない。

また、人間の寿命が、のびていることも事実でしょう。

だが、それでは、現代人の「生の力」がより以上、増長されたかといえば残念ながらそうではない。

ますます「死」の衝動が、私たちのまわりを、常にとりまいている実感が深まってきている。

――そのとおりですね。むかしには考えられなかった飛行機事故、交通事故といったことで、非業の死を遂げてしまうこともある。あるいは、ガンや心臓病、糖尿病というような病気が、最近とくに多くなってきています。

また、そこまでいかなくとも人間らしく生きることが、非常に困難になってきてしまっている、という危機が、しだいにしのびよっているような気がしますが。

木口　そのとおりですね。

いつまでも鮮烈な「死」の光景

――飛行機事故で思い出しましたが、もう十数年前のことですが、取材でたいへんにお世話になった『朝日新聞』の相場正久氏が、モスクワ郊外に墜落した飛行機に

乗っていて、亡くなったときは、私も愕然としました。一日中、白日夢のようであったことを強く記憶しています。

木口　私は若いもので、そうした体験はありませんが、池田先生は事故死のようなものに、直面したことがありますか。

池田　いくつかあります。

もう、戦後間もない昭和二十三、四年（一九四八、九年）のことと思いますが……。

静岡県の田舎道で、少年がバスにひかれて亡くなった。そこへ、父親でしょう……。真っ青な顔でとんできて、その子供の骸に、名前を呼びながら「なぜ死んじゃったんだ。なぜ死んじゃったんだ」と慟哭していた光景は、いまでも忘れることはできない。

木口　そうですか。なんともいえない、かわいそうな姿ですね。

―そうした記憶は、いつまでも鮮烈に残りますね。ほかにもありますか。

池田　そうですね。

小学生のころ、当時は、現在の東京・大田区の糀谷に住んでいた。

学校の帰り道、いまの第一京浜国道で、鉄材をたくさん積んだトラックから、なにかのはずみでその鉄材がくずれ、乗っていた職人でしょう……。完全にはさまれてしまって、身動きできずに血だらけになっていたことがありました。その人が亡くなったかどうかは、わからないが、ともかく、そのときの恐ろしい場面は、いまでも脳裏に刻みつけられてしまっています。

あまり鋭敏な少年時代に、そうした光景はみないほうがいいと思います。

木口　そうですか。そういうこともありましたか……。

そのとき、死というものが、恐ろしいものと感じましたか。

池田　つよく感じました。

死を、恐ろしい、怖(こわ)いと思う気持が刻みこまれてしまった。

木口　まだありますか(笑)。このさい、自分の将来のためにも、いろいろとうかがっておきたいと思います。

池田　もう一つ、記憶にあります。これは戦前のことです。

家の近くに、呑川（のみがわ）という川があった。日曜日で、ハゼ釣りか、なにかの舟だったんでしょう。それに乗っていた一人が、なにかのひょうしで川に落ちて、大騒ぎになった。おおぜいの人が、それをみに集まった。私もそのなかに入って、死体があがってくるのをみた。

二十五、六歳の青年でしょうか。着物姿であったことが、深く印象に残っております。

事故死はまさに「諸行無常」

木口　そうですか。

楽しみにしていた休日で、きっと朝は元気だったんでしょうが、しばらく後には、死という粛然（しゅくぜん）たる姿になってしまうとは無常ですね。

池田　大、小にかかわらず、このような事故死というものは、みるにしのびない。まさしく「諸行無常（しょぎょうむじょう）＊」という法理に、ピッタリの現実ですね。

このたびの大韓機事件で亡くなった方々のご遺族の悲しみは、言語に絶するものだと思います。

池田　「老少不定は娑婆（しゃば）の習ひ会者定離（えしゃじょうり）は浮世のことはり」（『聖愚問答抄』）との御文に、私はたいへん感銘をうけます。これこそ人生であり、社会であり、最高の厳しさである。

木口　まったく、そのとおりですね。

戦後も、いろいろ大きな事故がありましたね。

木星号の墜落（一九五二年四月九日、日本航空機が伊豆大島三原山に衝突。死者三七名）、桜木町事件（五一年四月二十四日、根岸線桜木町駅で国電パンタグラフが発火、二両全半焼。死者一〇六名）、三河島（六二年五月三日、常磐線三河島駅で貨車が安全側線に突入脱線。そこへ下り国電が衝突脱線、さらに上り国電が衝突し脱線転覆。死者一六〇名）や鶴見の電車事故（六三年十一月九日、東海道本線鶴見―横浜間で下り貨車が脱線、そこへ上り電車が衝突脱線して下り電車側面に突っこむ。死者一六一名）、洞爺丸の沈没（五四年九月二十六日、台風のた

め青函連絡船「洞爺丸」が函館七重浜海岸沖で転覆。死者一一五五名）等々、数えればかずかぎりない。

木口　交通事故などは、あまりにも日常的になってしまった。ですから、怖さの感覚が、だんだんとうすれてしまっている感もしますが、これは恐ろしいことですね。

――年間では、死者が昨年（一九八二年）でも、九〇七三人という数にのぼっています。

日本でも事故死は、たいへんな数になりますが、世界に広げてみれば、異常な数といわざるをえませんね。

木口　そうした目にみえる事故だけでなく、精神的な抑圧、人間の疎外感、虚脱感といった目にみえない現代病といったものが、私たちのまわりにはあまりにも多いと思います。

現代ほど、人間が生きにくくなった時代はないのではないでしょうか。

――科学の進歩に反比例して、生命の危機というものが、たかまってきたことは、

現代は，科学の進歩に反比例して，人間それ自体の危機がたかまってきている時代といえる。

たいへんな悲劇ですね。

戦争は「死」という危機の極限

木口　たとえば、原子力の平和利用も、克服しなければならない多くの課題が残されています。この問題も、決して安易に考えてはならないと思います。

池田　たしかに、人間それ自体の危機の時代と、とらえることができるでしょう。

木口　私もそう思います。

――戦争というものは、「死」という危機の極限のかたちですから、いちばん「死の力」がはっきり出てくるのではないでしょうか。

池田　そうです。

戦争になれば、人間は、「勇気」や「愛情」をふだんと比べものにならないほど、強くだそうとするものです。

しかしそれは、「生」のためではない。

「死」との対決のためです。

木口　なるほど。

――まえに、仏法が生命世界の実像をえがいた説話として、餓鬼道におちた目連尊者の母親の話をうかがいました。

飢える母親に水や食物をあたえても、みな火になり、ますますそれが燃えさかる。

餓鬼界の命が支配するところでは、人間本来の親子の情愛も、餓鬼界の生命に支配されてしまうという話には、深い示唆(しさ)がありますね。

池田　そうです。

「勇気」は、人間本来の美徳を生きいきと、輝かせていくものでなければならない。また「愛情」も、美しく、さわやかに輝きわたらせていくものでなければならない。戦争の場合は、それが逆に、その「勇気」が人を殺す「勇気」に変わってしまう。その「愛情」が、国のため、妻子を守るためという殺戮（さつりく）への大義名分になってしまう。それでは、あまりにもいたましい、悲劇の「勇気」と「愛情」といわざるをえません。

木口　そのとおりです。

そうした美徳も、時と場合によって、両面性がありますね。

――この「勇気」や「愛情」は、本来、平和とか幸福のために発揮され、妻や子供のためにそそがれるべきものが、そうしたかたちになってしまうことは、たいへんに不幸です。

木口　まえにも、自殺についてのお話がありましたが、戦争は、いわば「他死」ということですが、最近は、「自死」、自ら命を絶っていくことが、急激にふえている感が

あります。

これなど、どう考えても、なにかが狂っているとしかいいようがありませんね。

――一家心中などは、あとに残しては、かわいそうだからといって、いたいけな子供を道づれにすることがあまりにも多い。

それが、せめてもの親の愛情だと、思いこんでいるのでしょうか。

池田　この「悲惨」の二字を、この世から消していこうと努力することが、仏法者の使命です。

希望に満ちた「生の力」は、すべてが「生」の「生命」へと合流していく。

反対に、暗き「死」にとらわれた「生命」は、すべてのものが「死」にむかいゆく方向にと、合流してしまうようです。

この内奥の「一念」を、深く堅固にたもちゆくことが、目にみえないようであるが、じつは、人の一生を左右しゆく、最も大事なこととなるのではないでしょうか。

そこにひとつの信仰の力というものが、私は提示されると思っております。

「貪、瞋、癡」にそめられた生命とは

――なるほど。生きようとする力が強いかどうかですね。それにしても、最近は、安易に「死」を選ぶ傾向が目立ちますね。「死」を選ばせるような痛苦を感じるというのは、なにが原因なのでしょうか。

池田　戸田先生は、よく「幾多の生命流転の途上に、みな誤った生活が生命にそまって、一つのクセをもつことになる。そのクセをつくるもとが、貪（むさぼり）、瞋（いかり）、癡（おろか）等のもので、これによって種々にそめられた生命は、宇宙のリズムと調和しなくなって、生命力をしぼめていくのである。このしぼんだ生命は、宇宙の種々の事態に対応できなくて、生きること自体が苦しくなるので、すなわち、不幸なる現象を生ずるのである」と指導していた。

木口　なるほど。誰もが、そうした生命のクセをもつ可能性がありますね。

―いまお話のあった「貪」とは、どういうことですか。

池田　一言にしていえば、「貪欲」といわれるごとく、エゴのかたまりといえるでしょう。それは、感謝の心がなく、どんなに恩をうけ、どんなに親切をうけても、常に憤懣ばかりもっている。そして、満ちたりた心を知らない人間の心の状態といえるでしょう。

そこで、これを客観視してみれば、それらの状態の人びとは、「名聞の聞こえ高く」、仏法の眼からみるならば、すべて餓鬼界の姿となっておるわけです。

木口　なるほど。厳しいですね。われわれ現代人は、たしかに、些細なことにも、憤懣が吹き上げてくる精神状態におかれつつありますね。（笑）

―「瞋」とは、目をカッと見開くという文字ですね。

池田　そうです。

強い怒りに支配された地獄界の生命です。原因が自分にあっても、すべて他人、あるいは環境のせいにし、見さかいがつかない怒りの状態です。この人は、心をもやしな

がら身を滅ぼし、地獄におちるといわれます。

私も、よくみかけてきました。（笑）

――「癡（ち）」とは愚（おろか）という意味ですが、物事の筋道がわからなくなってしまうことですね。

池田　そのとおりです。

仏法では、「癡（おろか）は畜生」（『観心本尊抄』）と断じますが、理性を失い、本能をそのままむき出していく状態といえるでしょう。ですから、「賢きを人と云いはかなきを畜といふ」（『崇峻天皇御書』）と説かれている。

木口　なるほど。

仏法は、自殺という行為の生命状態を、深くとらえておりますね。

たしかに、自殺が多いということは、それだけ、われわれの時代が生きづらく、息苦しくなっている、人間自身の躍動性がなくなってきているという、ひとつの証明ともいえますね。

現代が「五濁悪世」といわれるゆえん

――そのとおりですね。仏法では「貪・瞋・癡」を「三毒*」といいますが、なぜ「毒」としたのでしょうか。

池田　『法華経*』に「毒気深入(どっけじんにゅう)*」と説かれている。

この「毒」には、簡単にいえば、人間本来の善性が犯され、溶けて、腐敗してしまうという意義もあります。

病には身体の病もあるが、心にもまた、この三毒によって「三界の一切の煩悩を摂す」（『大乗義章』）と説かれております。

この毒は沈毒といい、「脳壊(のうえ)の甚しき」という、恐ろしいものなのです。

これは病原菌のように、今世の生命を破壊していくだけではなく、妙法に縁しないかぎり、三世にわたって厳しく連続されていくと説かれている。

木口　なるほど。苦しみから逃れようと思って自殺しても、そこで苦しみが断たれるわけではない、ということになりますね。

池田　そのとおりです。

釈尊自身が、末法という時代をさして、「五濁悪世」と断定した。

そのとおり現代社会は、三毒強盛の生命の汚れ、濁りの社会となってきてしまった。

木口　その「五濁」とは、どのような状態をいうのですか。

池田　これは、ぜんぶ『法華経』に説かれる言葉です。簡単に、わかりやすく申し上げれば、

「劫濁」とは、時代の濁り、

「衆生濁」は、人間社会の濁り、

「煩悩濁」は、人間の本能的な迷い、

「見濁」は、思想の濁り、

「命濁」は、生命それ自体の濁り、

ということです。

――なるほど。それを広げていえば、公害の濁り、日本もアメリカもゴミ処理に困っている濁りがある。（爆笑）

池田　大聖人は「法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覚の位に猶備われり元品の法性は梵天*・帝釈*等と顕われ元品の無明は第六天の魔王*と顕われたり」（『治病抄』）とおっしゃっておられる。つまり人間の善も悪も、また法性（悟り）も無明（迷い）も、その根本の本体を「元品」と名づけ、一つであると説かれておられる。

そこで、われわれの一念というものは、また言葉を違えていえば、元品というものは「悪縁に遇えば迷と成り善縁に遇えば悟と成る」（『当体義抄』）とも説かれています。

末法は「三毒」が人の心を支配

――すると人間には、性善、性悪がともにそなわっており、「縁」によって善に

上空からみたハドソンリバー。川の水が公害によって汚染されている状況がよくわかる。

も、悪にもあらわれる。どちらかだけであるということはないわけですね。

池田　そのとおりです。

木口　最も、しぜんな考え方であり道理だと思います。

池田　そこで、末法は「三毒」が基本となって、人の心を支配しきってしまっている。ゆえに当然、生命が濁り汚れてきてしまっている、ということになります。

――そうしますと「五濁」のなかでも、最も重要なのは、「命濁」というとらえ方にもなりますね。

池田　そうかもしれないが、依正不二(えしょうふに)*の原理で、やはり他の四つの濁りと「命濁」は連動されていくでしょう。

当然、関連性となるでしょうね。

池田　そこに、釈尊*も、天台*大師も、末法においては、日蓮大聖人も、この元品の、人間生命のもつ不幸の根源である「無明」を冥伏(みょうふく)させ、また断ち切ることが、一切の善性を湧現させ、幸福と社会の安穏をもたらしゆく法なりと、お説きになっておられる。

木口　なるほど。私ども天文学者は、宇宙の広がりばかりを追っていましたが、たしかに、自分自身の内なる宇宙、一念とも、一心とも、元品ともいうようですが、その自分自身の奥の奥に光をあてられてきたような気がいたします。

池田　これ以外に、いかに有形のものが繁栄し、進歩しても、永遠にわたる人間それ自体の真実かつ最大限の生き方はない。また、正しき方軌にのっとった生き方はない。幸せへの蘇生の持続もない。

――現代は、多忙すぎて、静かにその一点をみつめようとするいとまがないように思いますが。（爆笑）

池田　いや、そういえばそうかもしれないが、真実の生死観を確立することは、すべて、自分自身のためである。また、永遠の平和社会を志向するならば、まず、この一点を凝視することから始まるのが道理ではないでしょうか。

いくら忙しいからといっても、一生は「光陰矢のごとし」で、なにをなしたかもわからないで、一瞬のうちに終わってしまうことも考えなければならないでしょう。（笑）

人間の「寿命」とはどういうことか

木口　「生」から「死」のあいだを一般的に寿命といいます。宇宙のありとあらゆる恒星も惑星も寿命というものがあります。

いわゆる人間の「寿命」とは、どういうことなんでしょうか。

池田　「寿命」という文字の意味は、ふつう「寿」とは、文字の上の「尹」が、髪の長い老人の姿を表し、下の「寸」の部分が曲がった足を表している。また、「ノ」と、一筋長く引きのばしているのは、命が長くのびることを願っているとも、いわれております。

――そのとおりと思います。各種の辞典をみても、そのようにでておりますね。

池田　そこで、通途（つうず）の仏法では、三界六道という、この世界に生まれきたるありとあらゆる生命が、それぞれ、その命の量が一定であると説き、これを「寿量」ともいっております。

――すると、『法華経』『寿量品*』の「寿量」という意味は、どういうことになるのでしょうか。

池田　それは、端的にいうならば、「永遠の生命」ということであり、また、三世にわたる生命ということです。

これは、人寿の次元からもとらえられますが、とくにこの『寿量品』は、仏寿が三世

永遠にわたることを明かされたところです。

木口　なるほど。人寿、仏寿となると、天体でいえば、惑星は〝惑寿〟、恒星は〝恒寿〟となりますかね。（笑）

池田　そこで、それぞれの人が、もちきたっている宿業（しゅくごう）*により、もはや寿命が定まっていることを「定業（じょうごう）*」といいます。

――すると、定業とか、運命とか、宿業とかいう言葉は、同じような内容をもっていると考えていいでしょうか。

池田　多少のニュアンスの違いはあるかもしれないが、だいたいは、同義ともとれますね。

ただ宿業のほうが、定業よりも広い意味をもっています。

木口　天文学でも、定業とか宿業とか考えざるをえないものがあります。なにかのときにつける必要がありますね。（笑）

池田　しかし、その決まった寿命でも、なんらかの悪縁によって、病気になったりし

て、それよりも早く亡くなってしまうこともある。また逆に、仏法では妙法によって寿命をのばすこともできるという、まことに深き法理があり、偉大な力があるのです。

――なるほど。「定業」ですか。人の寿量の「量」から考えると、なにか運命的なものをはかる計算器のようなものがあるのでしょうかね。

生物の一生というのは、「ゼンマイ時計のネジが、じょじょにもどり、止まったときが死だ」といった人がいます。いまは、電池がきれたらということでしょうが。（笑）

木口　生物学者のなかには、あらかじめ決められた寿命があるのではないか、と研究している人もいますね。

――ドイツのハイルブラウンなどですね。彼は、動物のなかで最も大きい象と、逆に小さなハツカネズミの心臓の収縮を、実験で比べています。

両者の一生のうちの収縮数が、象が七十歳として一〇・二億回、ハツカネズミが三・五歳として一一・一億回と、非常に数字がちかくなっていると報告しています。

木口　あらかじめ潜在する生命エネルギーが定まっているのではないか、というこ

とですね。

――この研究は、『サイエンス』というアメリカの権威ある科学誌にも紹介されたことがあります。

池田　まことに、寿命ばかりは、はかりがたしですが、おもしろい研究ですね。

風習にみる日本人の「死生観」

――ところで、先日、今年（一九八三年）の百歳以上の全国長寿者の番付が発表されましたが、やはり誰からも祝福される慶事ですね。

池田　そうですね。

たいへん、うるわしい姿です。また、よく生きぬかれたものと感嘆します。立派なものです。

沖縄などでは、元旦の朝早く、女性や子供が、長寿者の家を訪ね、挨拶（あいさつ）するという風

習が、長くつづいていたと聞いたことがあります。

――私も最近、同じような話を聞きました。また、社会的に功労があった人が亡くなると、皇室から供物（くもつ）が届けられることがあります。その人が、あるていど、長寿をまっとうして亡くなった場合、紅白の重ね餅が届けられるそうです。

木口　ふつう、お葬式では考えられないことですね。

――これは、皇室というものが、古来、伝統文化の中心でしたから、長寿を祝うという、むかしからのしきたりが残っているのかもしれませんね。

木口　いずれにしても、人は、長寿で楽しく、豊かに充実しきった人生をおくりたいものですね。

池田　ともかく、人間として寿命をまっとうし、自然死できることが、誰しもの願いでしょう。そのためにどうするか、ということが当然のことながら、大きい課題となってくるわけだ。

――先日、読者の方から人が死んだとき、いろいろないい方をする。一般的には、「死去」「死亡」「永眠」などといいますが、ほかにもいい方があるのでしょうか、この点を名誉会長にうかがってほしい、という要望がありましたが。

木口　おもしろい質問ですね。

池田　それについては、ある古文書に、仏の死を「涅槃」といい、天子の場合は、「崩御」、諸侯は「薨」、智人は「遷化」あるいは「逝去」、将軍には「他界」と記されています。

――なるほど。すると、一般の人に対しては、やはり「死去」「死亡」「永眠」ということでしょうか。

池田　そうですね。その古文書では、平人については「死」ともいい、「遠行」とも載っています。

――すると、牛や馬などの動物が死んだ場合は、なんというのですか。（笑）

池田　それは、「斃」といわれている。そこで、もし人が不義を行えば、牛馬と同じ

であるゆえに「多く不義を行えば必ず自ら斃(たお)る」ということも記されています。

木口　なるほど。そうでしたか。そうした深い意味あいがあるものとは知りませんでした。

――日本語の場合、なぜ、こうした多くの「死」の表現があるのでしょうか。

池田　おもしろい質問ですね。英語では、だいたい「death(デス)」で表現していますね。それは、中国文化や思想の影響が、たぶんにあると思いますが、ともかく、日本人独特の感受性による死生観が、反映したとみるべきでしょうか。

――良し悪しは別としまして、針や筆のようなものでさえ供養するという習俗が残っている例は、外国では少ないですね。

池田　日本人が、まことに繊細な感受性をもってきたことは事実である。現代は、どうだかわからなくなってきたが。(笑)

そうした民族が、「死」という、人間にとって究極的かつ最大の課題を、単純にひとつの言葉でいい表すことは、できなかったのであろうと、私はみています。

木口　なるほど。なるほど。

池田　そこで、「死」という文字ですが……。これは、「歹（がつ）」（ばらばらの骨の意）と「匕（か）」（人が倒れて死ぬこと）を意味し、二つ合わせて「人の命が尽きはてる」となります。

「死」は古来から最大の恐怖とされている

――なるほど、よくわかります。それと、一方には、死後の生命を表現する言葉として、一般に「魂」とか「魄」とかいうことがあります。

つくりは「鬼」ですが、これは、どう考えたらいいのでしょうか。

池田　「鬼」という文字は、もともと死者の形相をそのままかたどった、といわれています。

木口　なるほど、よくみると、たしかに死の苦痛を象形しているようですね。

池田　ですから、「死」という実感が文字に表れてきたんでしょうか。多くの人が、臨終の苦しみをもって亡くなってきた。その人間の、どうしようもない苦悶の表情というものを、表そうとしたのではないでしょうか。

――　そうですね。その死の姿というものをみて、肉親や友人までが、悲惨な形相に変わっていってしまうことも、一つの依正のなせるところでしょうか。

池田　そのとおりです。無惨な死に接した場合、その肉親の方々の深い苦しみ、悲しみの姿は、本当にみるにしのびない。

ですから、一般に「死」というものは、古来から、最大の恐怖であったとされておるわけです。

――　さまざまな、土俗信仰も「死」に対する恐れからおこっていますね。

池田　そうです。

苦しんで死んだ「怨霊」には、祟りがあるという考え方ですね。

木口　若死にしたり、不慮の死を遂げたような場合、「若宮」としてまつる風習の地

方もあるということを聞いたことがあります。

――また、非業の死や恨みをのんで死んだ場合、「怨霊信仰」というのもありますね。

歴史的に有名なのは、菅原道真（平安初期の学者、政治家。北野天満宮に学問の神としてまつられる）とか、平将門（平安中期の武将。神田明神などにまつられる）、佐倉宗吾（江戸時代前期、百姓一揆の指導者として妻子とともに処刑された義民。宗吾神社などがある）などですね。

木口　「死」に対する恐怖や無知を利用して、念仏などが広まったといわれていますね。

池田　そのとおりですね。

この世は、苦しみばかりの穢土である。念仏さえ唱えれば、極楽往生できると聞いた人びとが、こぞって自殺した――という、まことに狂ったとしかいいようのない、不幸な史実もありましたね。

木口　いまでも、われわれのまわりには、そうとうの教養ある人でも、「仏滅」や「友引」にこだわるのを見聞きします。そうした「死」に対する恐怖感や、無知の時代からぬけきっていませんね。

池田　そのようですね。

こうした習わしは、古代の「陰陽道（おんようどう）」*から派生し、通俗化したものでしょうが、裏づけのない迷信であり、根拠のない俗信という人もいますね。

「仏滅」というのも、もともとは「物滅」という文字だったが、「物」よりも「仏」のほうが尊く、庶民のうけがいいということから、いつしか変えてしまった。まったく根拠のないことだという学者もいます。

木口　なるほど。そうでしょうね。

極端な「友引」の信じ方に、岡山県のある地方では、兄が死ぬと、弟を呼びにくるといって、日ごろの呼び名を変えるという風習が、いまでも残っているそうです。

池田　はあー、そうですか。

「死」に対する恐怖や観念ほど、根強く保守的に、人びとの心を暗闇にしばりつづけてきたものはない。

木口　まったく、そのとおりだと思います。陰陽道にしても、いまから千数百年前の平安時代に流行したものですが、それが迷信化してしまっている。

池田　そうですね。

もちろん、古い観念だから問題だというのではない。

古くとも、いまもなお人びとの生活の知恵として、生きいきと生きつづけ、価値あらしめているものも少なくないわけです。

だが時代がうつり、文明が進歩し、政治や経済の体制が一八〇度転換しても、なかなかこの「死」についての考え方だけは、古代の観念が意識の底に深く、重く沈殿してしまっているといわざるをえない。

――そのとおりですね。民俗学者のなかには、「常世」とか「他界」を信じる古代の宇宙観の影響だという人もおります。

現代人は「死」をさけている

木口　天文学上からみましても、むかしの宇宙観には、その時代なりの宇宙観がありました。

それが、説話や民間伝承として残るのであれば、現代のロマンということでけっこうでしょう。だが「死」という、人間にとっての最大のリアリズムを、いまなお無意味な風習とからみあわせて考えることは、ちょっとどうかと思いますね。

池田　どうやら、現代人は「死」というものを、真正面から見すえることをさけてしまっている。

その理由は、さまざまあるでしょうが……。

深く「生死」を考えていくならば、これは万人がさけてとおるわけにはいかない、絶対的な道である。

そこに大光明の道を見いだすことが、どうしても必要となってくるわけです。

木口　そうですね。天文学者たりとも人間です。政治家、経済人もすべて人間です。人間には、かならず「死」がある。この「死」という問題の解明ができれば、本当に幸せであろうと思います。

池田　そのとおりです。

「死」をさけるということは、死の本当の姿が、怖(こわ)いということかもしれない。たとえば、地獄の苦しみで死ぬかもしれないということが、無意識のうちに、自分自身の生命に記憶されている働きがあるのでしょうかね。

――そう思います。きょう（一九八三年九月十五日）は敬老の日で、テレビで中曽根（康弘）首相が、会田雄次（京大名誉教授）氏らと、これにちなんで語っておりました。

老後を楽しく過ごすにはどうしたらよいか、という内容で、「死」という問題まではふれてなかったんですが、よく考えてみますと、われわれのまわりには、苦しんで死

んでいった人ばかりがいるわけではない。悔いない人生をおくり、静かに、楽に亡くなっていく人も多くあるわけです。

池田　まったく、そのとおりです。

ですから、静かに眠るがごとく死ぬことができる、という自信が、自分自身に対してもてれば、これほど幸せなことはない。

たしかに、一般的にはさまざまな死の姿を見聞きし、死は恐ろしいものと、観念してしまっていることが、多いことも事実である。

しかし、逆に死を安らかに迎えうることができる、ということも、これまた事実だということを知らねばならないでしょう。

木口　たしかに、そのとおりですね。

池田　そこで、その後者を確実ならしめる「大法」というものをたもつことは、人生において、最も大事なこととなってくるのではないでしょうか。

――なるほど。そのとおりだと思います。

池田　そうした、さっぱりした、さわやかな死生観をもてることは、毀誉褒貶の、利害や打算にしばられた人生からはおよびもつかない、幸せな人生といえるでしょう。

木口　そのとおりですね。もし、そのような人生観をもつことができれば、すばらしいことですね。

池田　「死」は、誰人もさけることはできない。教会の神父であろうと、いわゆる宗教家であろうと、またいかなる階層の人であっても、あすは、わが身のこととなるわけです。

だが、ふだんから多忙のためか、それを実感することは、なかなかむずかしいようだ。ただひとついえることは、真剣に生の根源をみつめていこうとする人には、その延長として「死」というものを看過することはできなくなってくる、ということも事実だということです。

――数日前の『朝日新聞』の投書欄に、ある老人から自分は老人ホームに入っていて、いろんな人が慰安にきてくれる。だが「自分たちが最も恐れている死について

は、誰も教えてくれはしない」というような声が出ておりました。

池田　そうですか。その一言は千鈞の重みがありますね。

木口　いまの世の中、死を語る人はいますが、それを解決してくれる人はいませんね。

――こうした人びとの不安に便乗した、無責任な商魂たくましい姿もありますね。いまの一般的宗教家といわれる人たちにも、「死」の企業化を考えたりしている連中がおりますが、じつは生死という問題を自分自身、解決できない。だから、平然とそうしたことができるのではないでしょうか。（笑）

金星の一年は〝約二日〟

――ところで、明の明星、宵の明星として親しまれている金星が、十月一日（一九八三年）に、地球に最も近づき、昼間でも光っているのがみえるようです。

木口　ええ、私たちからみて金星は、太陽、月についで明るい星です。

太陽からの光を、地球の二倍も受けているので、それだけ光を多く反射します。また、地球に最も接近する惑星です。

池田　昨年の春、ソ連のロケットが金星表面に軟着陸し、鉛も溶けるような高温下で、カラー写真の撮影に初めて成功しましたね。

木口さん、金星の昼間は、どのくらい明るいのですか。

木口　まだ、はっきりはわかりませんが、カラー写真を分析すると、冬のモスクワの曇り空の、お昼ごろの明るさだそうです。（笑）

池田　そうですか。だいたい想像できますが。（笑）

なぜ太陽の光を地球の倍もうけているのに、暗いのですか。

木口　金星は厚い大気でおおわれているからです。地球も、できたてのころは同じ状態でした。

――その大気は、なんでできているのですか。

木口　大部分が、炭酸ガスと水蒸気です。

―そうしますと、地球の炭酸ガスの場合は、どこにいったのですか。

木口　ほとんど、岩石のなかに含まれてしまいました。

―そうですか。それはどんな石にですか。

木口　最も典型的な石は、石灰岩です。

池田　大気のなかの水蒸気は、どこにいったのですか。

木口　地球の表面が冷えるにしたがって、水になり、それが海になりました。そのとき同時に、大気中の炭酸ガスも海水に溶けこみ、だんだん沈殿して、それが積もって岩石になったわけです。

―そうですか。なぜ金星には炭酸ガスが大量に残っているのですか。

木口　いま申し上げたように、太陽からの光が強いために、その熱で、水蒸気は水素と酸素に分解されてしまいます。水素は軽いので、宇宙に逃げてしまい、酸素と炭酸ガスが大気中には残ったようです。ところが酸素のほうは、しだいに金星の地表に降りて、大地を赤茶けたように酸

化させました。
それで、いまのように炭酸ガスだけが残りました。
池田　なるほど。
太陽からうけた熱量によって、水ができるかどうかが決まってしまう。
そして、水によって星の運命が決定されてしまう、ということですね。
木口　そのとおりです。
火星は、地球より太陽に遠いので、水は永久凍土になって、地表に閉じこめられたままになっています。
――なるほど。「水」というのは生命発生と密接な関連性があるわけですね。
木口　そのとおりです。
池田　金星は、月と同じように、満ち欠けがありますね。
木口　ええ、それについては、有名なエピソードがあります。
ガリレオ*が、金星の満ち欠けを、自分でつくった望遠鏡で観測して、あの四面楚歌(そか)の

なかでも彼は、いっそう地動説に対する確信を深めたといわれています。

――なるほど。そうですか。

ところで、金星が地球に接近するときは、地球のほうにみせている面は、月と同じように、常に同じ面だそうですね。

その理由は、なんでしょうか。

木口　月が片側しかみせないのは、ご存じのとおり地球の潮汐(ちょうせき)力(引力)のため、月の自転のエネルギーが散逸してしまったからです。

ところが金星もまた、たいへん不思議なことに、太陽の影響と同時に地球の影響をうけているかもしれないと考えられているのです。

池田　なるほど。地球が、金星の自転を、コントロールしている可能性があるということですね。

木口　ええ、じつはこれがナゾなのです。

――金星の一年は、〝約二日〟しかないそうですね。

木口　ええ、日の出から、次の日の出までを一日としますと、金星の自転周期と、公転周期がほぼ一致しているので、金星のカレンダーではそうなります。一日の長さということでいうと、金星の一日は、地球の約百十七日にあたります。

池田　金星は地球よりゆっくり自転し、地球より小さな軌道をやや早く公転している、ということですね。

木口　そのとおりです。

池田　自転による一日も、公転による一年も、天体にはそれぞれの尺度がある、ということですね。

――これは、おもしろいことですね。先日、イギリスの天文学者フレッド・ホイルの研究論文を調べてみましたら、彼の計算では、初期の地球は、一日、五時間で自転していたそうですね。

木口　ええ、そうですね。

現在は、約二十四時間ですから、五倍も回転が遅くなっているわけです。

――そうしますと、現在の一日二十四時間のリズムが、最も生命生存に適しているような気がしますね。もし地球の初期にわれわれが生きていたら、あまりの忙しさに目がまわってしまう。（笑）

木口　他の天体をみても、土星の一日は十時間です。

池田　時間や空間に対する感覚も、絶対的なものではない。結局、おのおのおかれた立場に相対的なものだということがよくわかりますね。

――まったく不思議なことですね。

池田　私もホイル博士の、月と地球の距離の計算を聞いたとき、たいへん興味ぶかく思いました。

かつて、月はいまより三分の一も、地球に近かったそうですね。

ところが、その後、だんだん遠のいてきている。

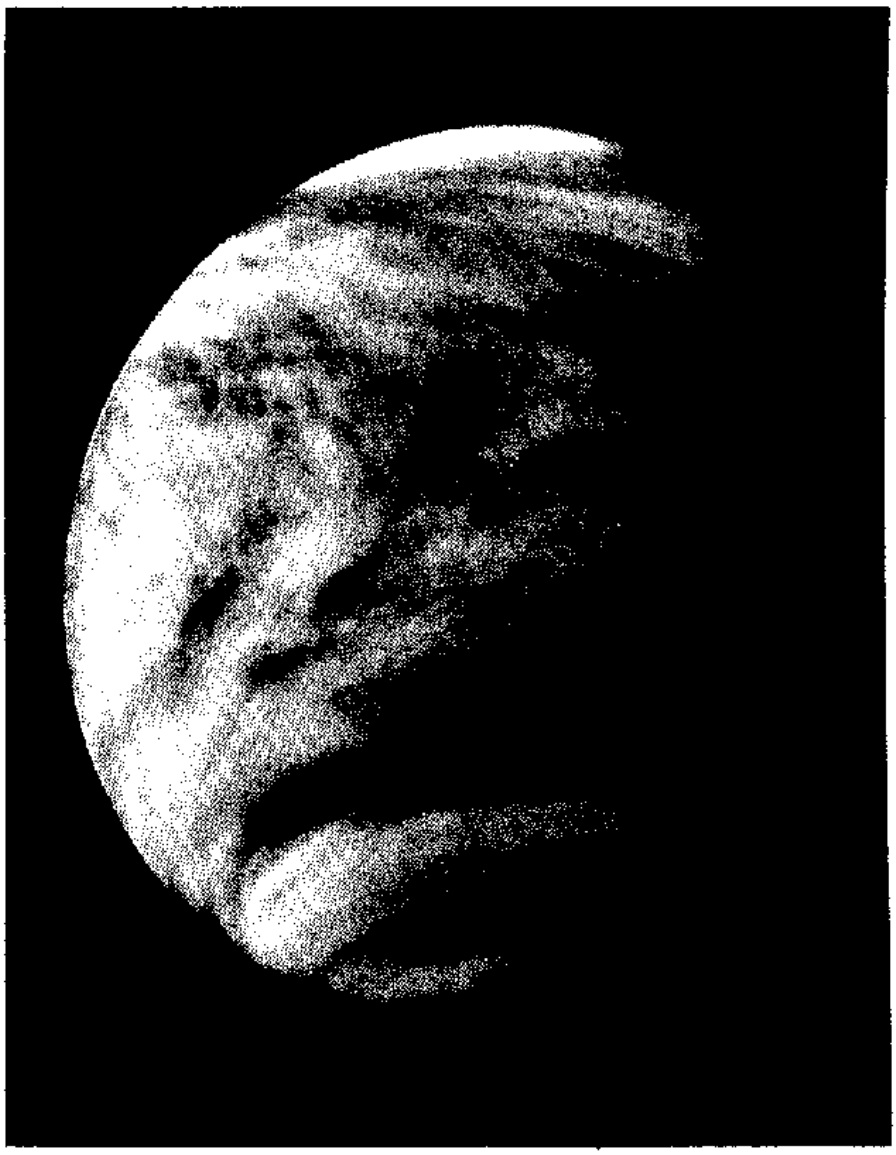
木口　ええ、月はいまでも、一年に三センチずつ地球から遠ざかっています。

遠い将来には、月が地球のそばからなくなってしまうことは、じゅうぶんありうると

いう天文学者もいるほどです。

――そうしますと、地球上の物理現象も生態系も、一変してしまいますね。

木口　そうです。ですから、池田先生がいわれたように、私たちの時間や空間に対する感覚も、常に絶対的ではありえない、ということになります。



明けの明星として親しまれる金星は，太陽，月についで明るく，地球に最も近い惑星。

―アメリカの雑誌で読んだのですが、なにかの変動で、急に、月が遠ざかっていくのをみて、類人猿は驚きのあまり、思わず立ち上がってしまった。これが原因で、それまで四つんばいだった人類の祖先が、いまのように、二本足で直立するようになった（笑）、というようなことが書いてありました。

すべてが、相対的というお話でいえば、オウムガイという、生物の祖先のような貝についての研究は、たいへん興味ぶかいものですね。

木口　どんな貝ですか。

―化石で有名ですが、南太平洋にはまだ生き残っています。

木口　なるほど。

―この貝の殻のなかにある気房を調べると、年輪のようになっています。成長係数は、一日一本ずつで、その跡が残るようになっています。その跡が三十本で、一か月とほぼ同じ日数になります。

ところが、この貝の古生代という、大昔の化石を調べてみますと、気房についている

成長係数は、九本しかないのです。

そこで、化石を時代順に調べていきますと、だんだんふえて、今日の状態になっていることがわかったわけです。

木口　そうすると、大昔は、一か月が九日だったという見方になるわけですね。

池田　なるほど、たいへん興味ぶかい話ですね。

――　ええ、一年は百八日であった。現在は、その三倍半ですね。

いま平均寿命が八十歳で、一年が三百六十五日ですから、そのころは、もし人類が生きていたら、平均寿命は、短かったことになりますね。

木口　だいたい、二十五歳ぐらいになってしまうわけですね。（笑）

依智の「星下り」は金星だった

――　ところで、金星は、仏法上、大明星天といわれますね。

池田　そうですね。

普光天子ともよばれ、星の代表として、諸天善神*の働きの一つとして象徴されています。また古くから「太白」といわれ、また「あかぼし」(明星)ともよばれていました。

――この「太白」は、「大将軍」として、京都の祇園などの社にまつられていたようです。

宮中には、いまでも、元旦に四方拝という式が伝わっていますが、北極星と天地四方を拝し、次に金星を拝するといわれているようです。

木口　地方によっては、「とびあかりぼし」「かけあかりぼし」といわれますが、それほどの躍動感をうける星のようです。

池田　そうですね。星の研究家、野尻抱影さんが、日本の各地での星の珍しい現象などを蒐集したなかで、明けの明星を、

「この星は、三時ごろに、水平線から三間ぐらいに飛びだす」

という千葉県勝浦の老漁夫の話を、どこかで紹介していたということを聞いたこと

があります。

――東京の八王子は、絹織物の産地でしたが、ここの古老が、金星は絹で透かしてみると、よくみえるので、子供のころ、みんなそうしてみたものだ、といっていた話をうかがったことがあります。

木口　そうなんです。星の光の回折現象で、絹や鳥の羽根で透かすと、幾つにもみえることがあるんです。

池田　すばらしい話ですね。これも、まえに調べてもらったことがあるのですが、神田茂という方の労作といわれた『日本天文史料』をみると、「星昼アラワル」という記述が、『続日本紀』（六国史の一つ。『日本書紀』の後まとめた編年体の史書）だけでも十か所もあると述べられています。

――そうですか。それだけ光が強いということですね。ところで「竜口の法難*」と〝光り物〟現象」についての考察は、たいへんな反響がよせられております。

この法難の翌日、いわゆる大聖人が、依智（現在の神奈川県の厚木近辺）の本間邸の庭

で、月に向かって経文を読誦し、諫暁（かんぎょう）された直後、大きな明星が降り下ったという不思議な天文現象がありましたね。

木口　そうですか。それも、ぜひおうかがいしたいですね。（笑）

池田　日蓮大聖人は、この「星下（くだ）り」については『種種御振舞御書』、あるいは『四条金吾殿御返事』に、記されておりますね。

木口　どのようなことが書かれているのですか。

池田　まず御文を拝しますと、この出来事は「九月十三日の夜なれば月・大に・はれてありしに」（『種種御振舞御書』）とあります。これは十三夜の月でしょう。

木口　なるほど。

「自我偈」とはどんな経文か

池田　また、「夜中に大庭に立ち出でて月に向ひ奉りて・自我偈少少よみ奉り諸宗の

勝劣・法華経の文あらあら申して」（前記、同御書）とあります。つまり『妙法蓮華経如来寿量品第十六』の「自我偈」を月に向かって読まれた。

木口　「自我偈」とは、どういう経文なんでしょうか。

池田　まえにも少々お話しましたが、『寿量品』*の「自我得仏来」という句から、「速成就仏身」という句にいたるまでの五百十字からなる「偈」のことです。

木口　「偈」というのは、韻文ですね。

池田　そのとおりです。仏法上、一往この「偈」とは、仏の徳、教理を賛嘆する詩ということになりましょうか。

――韻文を用いるのは、まえの長行（散文）で説いたものを、かさねて人びとの心に響くように説いたという話を聞いたことがあります。

池田　私どもの信奉する当宗では、もっと深い意味があるかもしれませんが、通途の仏法ではそういうことでしょうね。

そこで、私なりに、思考させていただければ、この自我偈とは、「始終自身なり」と

あるがごとく、「自」が初めの文字であり、「身」が終わりの文字である。初めと終わりの文字を合して「自身」となり、この偈全体が、仏の生命それ自体であると説かれているのです。

――すばらしいことですね。法華経には文上、文底のとらえ方があるのでしょうが、じつに深遠な哲理が含まれている。

池田　また、この自我偈について、「本有とことわりたる偈頌なり」（『御義口伝』）とあります。この意義は、久遠劫初の仏の生命が三世永遠にわたるものなりとの道理を説きあかしたのが、この偈であり、頌といえるのではないでしょうか。

この根本の理、その究極の法がなにかといえば、「南無妙法蓮華経」の一法であると、とらえるのです。

木口　なるほど。

池田　ですから、日蓮大聖人は『法華経』の文字を、「肉眼は黒色と見る二乗は虚空と見・菩薩は種種の色と見・仏種・純熟せる人は仏と見奉る」（『法蓮抄』）とおっしゃっ

ておられるわけです。

――なるほど。よくわかりました。

月に向かっての経文の読誦のあと、大聖人は「いかに月天いかに月天」（『種種御振舞御書』）と、宇宙の諸法諸力に対し、「法華経の行者」を守護するという「誓言のしるし（験）をばとげ（遂）させ給うべし」（前記、同御書）と、強く諫暁されたわけですね。

木口　この「誓言」とは、仏典のなかにあるのですか。

池田　そうです。

『法華経』の『安楽行品』に、

「諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す」とあります。

また『嘱累品』には、

「世尊の勅の如く、当に具さに奉行すべし」ともあります。

木口　なるほど。

――そうした諸天に対する諫暁が終わるやいなや、月光にさえわたる夜空から、大

きな明星が降り下り、庭の梅の木にかかったと記されていますね。

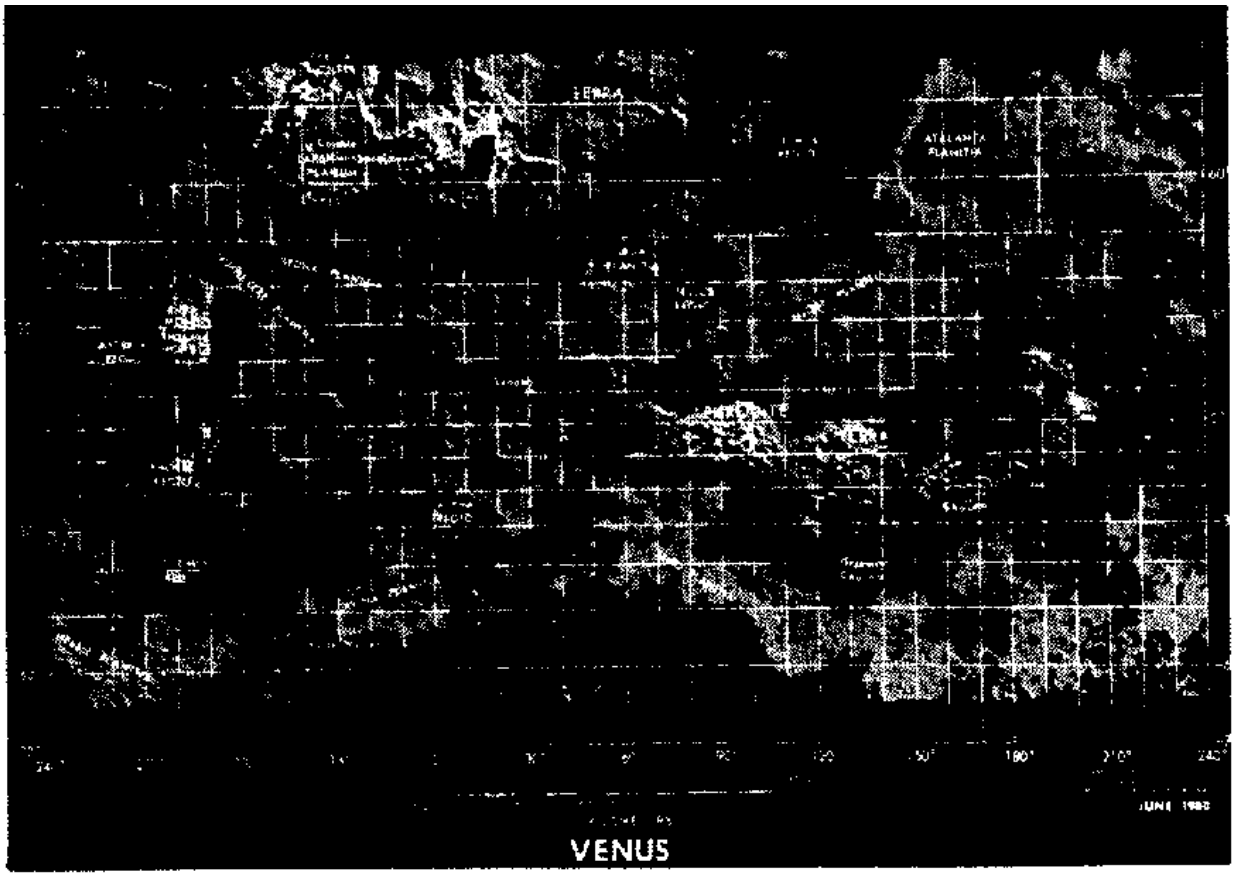
「星下り」現象に科学的な裏づけ

池田　そのとおりです。この不思議な現象については、九月二十一日の日付でしたためられたお手紙にも、「明星天子は四五日已前に下りて日蓮に見参し給ふ」（『四条金吾殿御消息』）とあります。

この依智・本間邸におきた「星下り」についても、広瀬秀雄博士の研究資料が残っております。

博士は、御書のいまのくだりをみて、直観的に「これは、金星だ」と思ったと、書いております。それから計算に入ったわけです。

木口　そうですか。不可思議としかいいようがない現象ですが、これもまた、天文学的に考察されているわけですね。



パイオニア探査船のレーダーマップにより視界をさえぎる雲をはぎとった金星の地表面。

池田　そのとおりです。しかし、なぜその瞬間に、かかる現象がおきたかという、どうしても本源的な意義は、天文学では当然のことながらわからない。これは、仏法上の次元になります。また、そう拝していかなければ、たんなる史実で終わってしまうでしょう。

木口　そうですね。よくわかります。

池田　まず、この日は、文永八年(一二七一年)九月十三日ですが、『年代対照表』では、一二七一年十月二十六日になります。

博士は、この星というものを、金星にしぼって、この日の運行を、ドイツの天文学者・ショッホの『恒星基礎星表』から逆推算していったわけです。

――私も、その資料をみました。

木口　そうですか。その「星表」というのは、私ども天文学者にとっては、主要な恒星の固有運動や、精密な位置から、他の天体の位置を決めていく、基準としているものです。

池田　博士は、この金星の観測表のデータから計算してみると、この日の金星の状態は、マイナス四等星の明るさで、最大光輝に達している。

つまり、一等星の一〇〇倍もの光を放っていたはずだ、といっております。

木口　なるほど。金星の最も明るい状態ですね。

池田　つまり、この「星下り」があったという日は、金星が東方最大光輝で、宵の明星であったわけです。

博士は、この日の日没は午後五時ごろであり、金星は日没後、約二・五時間だけみえ

る計算になるというのです。

木口　なるほど。驚きです。

池田　ですから、この夜の出来事については、博士は次のように推定するわけです。日暮れてまもなく、東の空は晴れわたり、十三夜の月が出ていた。一方、西の空には、低いところに雲があって、金星はまったくみえていなかった。そして、大聖人が「自我偈」の読誦、月天への諫暁（かんぎょう）を終わるやいなや、雲間より突如として最大光輝の金星が、西方の梅の木のあたりに輝き出た。また「やがて即ち天（そら）かきくもりて」（『種種御振舞御書』）と御文にあるので、西方に雲がまもなく出始めたのであろうと。つまりこれは、短い間の出来事だったにちがいないと結論づけているわけです。

木口　なるほど。

池田　私ごとき者が、一資料をもってこの場の厳粛な、不可思議なる天文現象を論ずる資格はありませんが、ただひたすら、凡人として、いちおう納得いくような気持に

なる、という意味で論じたわけです。

木口　広瀬博士はたいへんな追究をされた、大事な証言者となりますね。

――異論があるとしても、一つの歴史的現象のとらえ方としては意義が深いと思います。

木口　そう思います。

――それと、「星下り」と御文にはありますが、このことについて、いささか調べてもらいましたところ、金星には、「薄明弧」という現象があるそうですね。

木口　ええ、金星の、円板状の輝きのまわりには、薄く、光の環がみられることがあります。

池田　そうですか。

そうしますと、金星がとつじょ輝き出すとき、さきほどの野尻さんの老漁夫の話にもあったように、飛びはねるようにあらわれる。

そして、また金星が最大光輝に輝くところには、月影のような「金星影」を地面に、

投じるということも考えられる。

木口　よくお調べですね。

それが星が下ったような現象としてみられたということも、じゅうぶん推測することができると思います。

第九章　「生死」こそ最後のフロンティア

「難波」とは〝太陽を迎える場所〟の意

志村(司会)　きょうは、大阪の地でお話をうかがうことになりました。この大阪も、むかしからたいへんに宇宙とは関係深い土地柄のようですが。

池田　そうです。古代から、大阪が「難波(なにわ)」とよばれていたのは、よく知られていますね。

木口　ええ、私も大阪生まれですので……。

池田　この「難波」という言葉は、もともとは、「ナルニハ」とよばれていた。それが、時代を経るにしたがい、「ナニハ」と約(つづ)めていわれるようになった、といわれているようです。

木口　なるほど。そうしますと、最初の「ナルニハ」とは、どういう意味だったのでしょうか。

池田　私も若いころから、この大阪の地とはたいへんに縁がありまして、つねづね、関心をもっていました。

最近、ある研究書をみておりましたら、「難波」とは古代朝鮮語からうまれた、という記述があります。

そこで、さらに調べてみますと、「難波」のもとの言葉「ナルニハ」の「ナル」とは、「太陽」を意味する言葉とありました。

木口　ああ、そうですか。知りませんでした。

たしかに関西圏には、むかしから朝鮮の人たちが多く渡来し、住みついたことは事実のようです。

私も、日本の古代文化に、そうした人びとが大きな影響をあたえていたことは、知ってはいましたが。

――「ナル」が太陽ということになりますと、「ニハ」とは、どういう意味になるのでしょうか。

池田　「ナルニハ」で、「太陽を迎える場所」という、意味になるようです。

木口　なるほど、なるほど。

「難波」という言葉の成り立ちが、そのような由来だったとは、まったく知りませんでした。

大阪には、「西成（にしなり）」とか「東成（ひがしなり）」という区名があります。むかしは、この「ナリ」を「ナル」とよんでいたと聞いたことがあります。そうしますと、これも、池田先生が話された言葉の名残りなんでしょうか。

池田　そのとおりです。

「ナリ」といういい方は「ナル」がなまったもので、「西成」とは、夕日が沈んでいく場所です。

また「東成」は、朝日が昇る場所、ということになるんでしょうか。

木口　大阪の地が、古代から「太陽を迎える」という、雄大な気概にもえていた土地であったということは、すばらしいことですね。

――いまの、関西の創価学園（中学・高校）がある交野（かたの）市の近辺が、そうした関西文化圏の中心地だった、と『日本書紀』（奈良時代に完成したわが国最古の正史）などにはありますね。

池田　そうですね。

古代の、有力な豪族としてよく知られている、物部（もののべ）氏（大和朝廷時代の大豪族）の一族が、当時の交野郡を本籍としていたことは、たいへんに有名な伝説になっている。また一族は、淀川を下り、海から「難波」に上陸したようです。そして生駒（いこま）山麓に根拠地をかまえ、一大文化圏を築きあげてきたようですね。

それが、東征してきた天皇家に引きつがれていく、という説もありますね。

木口　そうだとすると、まさに、日本文化のひとつのルーツですね。

――こうした、いわれのある地名は、日本の各地にもあるようですが。

池田　ええ、いまの宮崎県の旧国名「日向（ひゅうが）」も、そうですね。

木口　これなど、文字どおり「日が向かう」そのものですね。

池田　そうです。

「ひゅうが」は、もともと「日向（ひむか）」といわれ、日が向かうところ、夕日のかくれるところ、という意味です。

これに対し宮城県に、むかし、「日高見」という地名があったそうですね。くわしくは知らないんですが……。

いまの仙台平野あたりをさすようです。日が昇る方向という意味で、この名称がつけられたとうかがったことがあります。

――そうですね。私も、そういう古文書を読んだことがあります。

「北上川（きたかみがわ）」は「日高見」から由来し、仙台平野には、「日高見」という神社が現存しているそうですね。

池田　当時の大和朝廷からみると、東北方面はまだ「エゾ」とよばれておったのではないでしょうか。

ですから、都からみて、東の涯（はて）を「日高見」といい、西の涯を「日向」としてなぞら

えたような気がしますが。

木口　なるほど。地名のおこりにも、太陽そして宇宙との関係が、密接になっているものがあるわけですね。

〝生命の触発〟が教育の原点

――昨日（一九八三年九月二十二日）は、あの有名な峰つづく交野にある、関西創価学園の開校満十年を迎えた式典に、創立者である名誉会長は出席されてましたね。

池田　ええ、半年ぶりでした。

――じつは、私も一度、名誉会長と生徒たちの交流を、じかに拝見したいと思って、招待はありませんでしたが（爆笑）、ちょっと、その光景をみせていただいた。（笑）

木口　いかがでしたか。

――まあ、強烈なカルチュア・ショックでしたね。（笑）

木口　そうでしたか。

――ともかく前日は、関西小学校で、六百人以上もいたでしょうか、児童たちが創立者のまわりで、目を輝かせながら、小さな身体に喜びをいっぱいはずませていた。そして、自由奔放に走りまわっている。いわば、子供の生命がつぎつぎに爆発しているようで、まあ、一時間半ぐらいだったんですが、みているだけで疲れました（笑）。これは、その場にいた人でなければわかりませんが。（笑）

木口　そうでしたか。

かつて、池田先生が「幼児とはあまり断絶を感じない」と書かれていたのを、読んだことがありますが、眼にうかぶようですね。

――ちょっと近年、私にはみたことのない光景でした。

名誉会長は、あの、ほとばしるような歓声と小さな生命の躍動のウズに、とけこまれていました。

池田　かならず行くという約束をしてしまいましたもので……。私は、子供たちとの約束は絶対に果たさなければならない、と常に思っています。

木口　簡単なことのようですが、なかなかできない大切なことですね。

池田　生まれながらの、無垢（むく）で幼い子供の動作には、珠玉（しゅぎょく）のような輝きが五体をかけめぐっているものです。

ですから、そうしたものとふれあうことは、それをいつのまにか忘れてしまった大人たちに、自分にも純粋な子供のころがあった、と気づかせずにはおかないものです。

木口　なるほど。だが残念なことに、子供の心になにも感じなくなった大人が、だんだんふえている。

――そのとおりです。

先般もある調査で、「子供の教育に自信を失った」お母さん方が、五〇パーセントをこえるという結果が発表されていた。

生命と生命の触発という「教育」の原点を見失い、育ちゆく子供の姿をまえにして、

親が戸惑っていることを強く感じますね。

木口　多くの人が、教育が大事なことは口にしますが、いうはやすく、行うは難しですね。

池田　私も耳のいたい一人ですが（笑）、まったくそうですね。子供はなんの容赦もなく、育ちゆくものだ。この一点を、大人は忘れてはならない。

そうですね。子供は大人の後ろ姿をみて育つといいますが、大人のほうにも、常になにかしら向上していくものがなければならない。

木口　私にはまだ子供がいないんですが、そのとおりだと思います。学園では、いかがでしたか。

野外グラウンドで、全校の生徒、先生たち、約一六〇〇人と聞きましたが、さわやかな秋空のもとで、名誉会長といっしょに、ともにジュースで乾杯し、弁当をとりながら歓談しているのを高い丘からみておりました。

ともに語らいながら、楽しげに箸を上げおろしする姿に、壮大な、なんともいえないリズムを感じ、胸を強くうたれました。

木口　私も教育者の一人ですが、たしかに子供の生命と共鳴するような指導者は、少ないと思います。

池田　私も、波瀾万丈の半生をおくってきました。またそれこそ、数えきれないほどの多くの人びととの出会いがあった。

しかし、そのなかでも小学校時代に教わった先生の顔は、忘れられない。

それほど、子供の瞳には自らを教え、自らを育んでくれた尊い姿というものは、長く心にやきついているものなのでしょうか。

私の恩師、戸田（城聖）*先生も、教育者であった。

その恩師が身をもって、教育の大切さを教えてくれた。私もまた、私なりにそれを受け継いでいる、ともいえるのかもしれませんが……。

木口　なるほど。よくわかります。

宇宙と歴史と大自然との融和

――夕方六時ころからは学園で、「交野・秋の夕べ」の催しがありましてね。

木口　そうですか。昨夜ですと、ちょうど十六夜の月だったと思いますが。

池田　ええ、見事な「大月天子」との出会いとなりました。

――六〇〇メートルもの高さの峰々を煌々と照らしながらの満月は、生まれて初めてみました。

はるか万葉の時代を思わせるがごとき、あのような月の光景は、一生涯で何度もみることはできないでしょう。

池田　そうですね……。ともかく見事な満月でした。文学的にいえば（笑）、古の万葉、白鳳の峰々の波が、現在と過去のへだたりを瞬間的にのりこえ、悠久の詩情をただよわせた演出であった、といってよいかもしれない。

それは、宇宙と歴史と大自然とが、完璧なまでに一つに融和した、別世界のような絶妙の時空であった、といえるでしょう。

――私もはじのほうにおりましたが、まったくそのとおりでしたね。あたりにはススキや萩もみえ、自分も詩人であったらな、と思いましたよ。（爆笑）

池田　十六夜の月とはよくいったもので、たしかに、山の端をたどり、美女が美しい顔を恥ずかしそうにまた、優雅にみせていくような姿でしたね。

――学園の寮生も、地元の交野の方々も、本当に心から喜んで拍手していましたね。

池田　ええ、学園には寮生、下宿生たちが三百数十人おります。故郷を離れ、父母から離れ、勉学に勤しんでいる生徒たちに、少しでもいっしょに楽しみ、思い出をつくらせてあげたいという気持でやりました。まえにも、こうした「月見の宴」をやったんですが、なにぶん多忙なため、今回は十年ぶりだったんです。

木口　ああ、そうですか。

関西創価学園の「交野・秋の夕べ」にて。野外グラウンドの上空に見事な十六夜の月がうかぶ。

本当に、すばらしいことですね。月も喜んでいたことでしょう。（笑）

――そこで、満月が昇ったあの山の端は、『古事記』（現存する日本最古の歴史書）や『日本書紀』に出てくる「竜王山」といわれているようですね。

池田　ええ、学園の先生方からそう説明をうけました。

この山頂に、物部氏の先祖が降臨したという伝説があるそうです。

――ええ、たしか『旧事本紀』という文献の「天孫本記」にも、「河内国河上哮ケ峰」に「磐船」にのって降臨したと

あります。それがいまの学園のある交野のあたりだ、というのが研究者のあいだでは通説になっているようです。

池田　私も、そのようにうかがっている。たしかに学園の近くには「磐船」という地名が、いまでも残っておるようです。

最近、その竜王山の裏のほうで、小学生が偶然に五～六世紀ころの古墳群を発見した、ということも聞きました。

――天皇家は、この地で独自の文化を築いていた物部氏から、太陽信仰と同時に、天孫降臨の伝説も受け継いだのでしょうか。

木口　なるほど。そういうことも考えられますね。つまり交野は、古代日本の文化揺籃の地であったわけですね。

池田　そうです。

ですから平安時代になっても、桓武天皇が交野の一角に離宮をつくったりしている。また大宮人が観桜、観月、観風の宴をはる地であったともいわれていますね。

木口　いまでも交野近辺には、「天野川」という川も流れています。また、「星田」という地名も残っています。なにか太陽とか、星とかに所縁のある土地柄だったんでしょうかね。

――興味ぶかいことですね。そういえば、業平が交野でつくったといわれる和歌がありますね。

池田　ええ、『古今和歌集』（勅撰和歌集のはじまり。九〇五年または九一四年ごろ成る）に載っています。

「飽かなくに
まだきも月の隠るるか
山の端にげて入れずもあらなん」

この和歌は、歌人業平が惟喬皇子のともをして交野にきたとき、詠んだものですね。

――昨夜の月は十六夜ですが、そのあとの月も、風流なよび方をされていますね。

池田　ええ、立待月、居待月、臥待月といわれるように、月の出の時間によって、そ

れをながめる姿と見あった名がついています。

木口　そうですね。

生命の状態で多彩に映ずる天体

――ところで、よく、夕日が実際より赤く大きくみえる場合がある、と聞いたことがありますが、本当でしょうか。

木口　それは、目の錯覚現象でしょうか（笑）。どの空でみるのも、大きさは同じです。

――当然のことですね。大きくみえるのは大気との関係や、目の錯覚でしょうね。

池田　私は、夕日や月を、写真機におさめることがあります。すばらしく大きく、美しく感じることがありますが。

木口　そうですか。池田先生の撮られた、『夕陽』と『月』の写真集を拝見したこと

があります。たいへんに感銘しました。

池田　いや、どうもどうも。

―人間と天体の関係については、おもしろい研究をしている人を知ってますが。

木口　どういうことをやっているのですか。

―たとえば、日中の太陽が人によって、何センチぐらいにみえるか、というようなことです。

木口　たいへん、興味があります。天文学者はそこまで手がまわりませんでしたが、今後の重要テーマの一つだと思っています。

―その研究によると、ふつうの人の場合、日中の太陽は平均三、四〇センチぐらいの大きさにみえるそうです。しかし、気持の大きい人、創造的な仕事をしている人はどちらかといえば、より大きくみえるそうです。

また、細かい計算などを職業としているような人や、あるいは、理屈の多い人などは、逆に小さくみえる場合があるようだ、といっています。（笑）

木口　心の状態が太陽をみる働きにも影響するのですね。

――調査の対象になった人のなかには、一メートルほどにもみえる、と答えた人がいるそうです。

池田　いやいや、これはこれはおもしろい話だね。人それぞれの生命の一念の状態、生命の一念の境涯、この大小によって、同じものをみてもそのように多彩に変化して映ずるのですね。

――そうですね。月も同じことがいえるかもしれません。

「月がとっても青いから、遠まわりして帰ろ」などと歌われる月は、たぶん楽しい、ロマンチックな気分で、大きな月にみえたのでしょうね。（笑）

木口　物理的にいえば、地平線から昇ったばかりの月も、高い空に昇った月も、また、さまざまな条件の月も、大きさはまったく同じです。たとえば、月に五円玉をあて、腕をのばして穴からのぞいてみます。すると、同じように穴の中に入り、大きさが同じであることがわかります。

池田　なるほど。ところで、なぜ月は昼間みると白く、夜みると黄色にみえるのですか。

木口　夜は太陽の光が、直接私たちにはとどかず、月の表面で反射された太陽の光だけがとどきますので黄色くみえます。昼は、空気が太陽の光を散乱し、青い光が黄色い光に加わりますと、青い光も黄色い光もスペクトルの広がりをもっていますので、黄色プラス青で白にみえることになります。

人間の生理に影響をあたえる月の満欠

――　たとえば、ライアル・ワトソンの『スーパー・ネーチァー』のなかの文献などに、黄色い満月といえば、米国の医学気候研究所が報告した「人間行動に対する満月」という研究資料が出ていたのを読んだことがあります。

その資料には、放火、盗癖、無謀運転、殺人等々、激しい精神的行動をともなう犯罪は、すべて満月のときにピークになると出ていました。

木口　そうですか。二〇〇年前、イギリスでは、法律のなかに慢性で不治の精神病によるものと、月によって錯乱した場合とで、犯罪をはっきり区別した一項があったと聞いたことがあります。

池田　満月の夜の犯罪には寛大であった、ということですね。（笑）

木口　ええ、たぶんそうなんでしょう（笑）。また、収容所の管理者たちは、満月の夜は持ち場を離れてはいけない、という決まりもあったそうです。

――ええ、私もなにかで読んだことがあります。

木口　また十八世紀ころには、犯罪者が満月の夜に暴れることを恐れて、その予防策として、まえの日にムチ打ったこともあったそうですね。

――人間と月には、直接的な生理的関連があるのでしょうか。

池田　あると考えざるをえないことがありますね。先日、そういう資料があるかどうか調べてもらったのですが、アメリカの精神科医が長い間、患者の頭と胸との電位差を測定していた。その結果、満月のときに、その差が最大値を示していることがわ

ボイジャー無人惑星探査船が7億キロ離れたところで撮影した静寂そのものの地球と月。

かった、という話だそうです。

木口　そうですか。月の満欠にともなう地球、月、太陽の位置関係の変化によって重力の大きさや方向が変わる。それにともなって血液の流れ方などが変わり、電位差が変化するのかもしれません。とくに精神病患者のように精神的なバランスの不安定な人たちでは、そうした傾向が顕著になるのでしょうか。

――また、満月の夜には医者は手術をしたがらなかった、となにかで読んだことがあります。

木口　迷信として、私も聞いたことがあります。

――これに似たようなことで、お医者さんの専門雑誌に論文が載っていたことがあります。

それによると、手術における出血のピークは満月のときで、月は潮汐（ちょうせき）をコントロールしているのと同じ方法で、血液の流れをコントロールしている、といっている。ですから、よくわかりませんが、手術をさけたがったというのも、うなずけるような気もしますが。

木口　そうですか。月と人間の出血の関係を示す話ですね。

――人間と月との研究は、まだこれからの段階のようですが、関係すると思われる現象をあげていくとたくさんあり、どうしても、そのつながりを考えざるをえないようです。

イギリスではかつて、月を「偉大なる助産婦」ともよんでいたことがあるそうです。これなどは、月の周期と、人間の出産時間とが密接に関係しているという、人びとの

むかしからの経験から出た言葉ではないでしょうか。

池田　なるほど。

死の場合については、ドイツの医学者が結核患者の死亡時刻についても、人間と月との相関関係がある、と報告しているのを、なにかで読んだことがあります。

――イギリスのペーターソンという医学博士も、結核による死亡は満月の十日前が最もたかい、というような研究資料を発表しています。

博士は、血液中の酸とアルカリの比が、月の周期とつながりがあるかもしれない、と推定しています。

木口　なるほど。そうですか。たいへんに興味ぶかい研究ですね。

――そういえば、月夜のカニは食べるなといいます。これもなにか関係があるのですかね。（笑）

木口　満月になるとカニの活動が活発になり、そのぶん、〝み〟が少なくなるからだという説もあります。これをカニの夜遊びというらしいんですが。（笑）

「死」と対決した文学者たち

――たしか、むかしのギリシャの哲人の言葉に「常に死ぬ覚悟でいる者のみが真の自由な人間である」というのがありました。これは、ひとつの理想論かもしれませんが、しかし誰人にも、いつかは死が訪れるわけです。

池田　「死」ということは、「生」あるかぎり、誰もがさけることができない絶対の理（ことわり）です。ゆえに人は、死の姿を直視しようとする姿が、うまれてこなければならないわけなんですが……。

――そのとおりだと思います。たとえば、明治の文豪、島崎藤村のエピソードなどは、その例にあてはまるかもしれません。

木口　そうですか。藤村といえば『若菜集』など、私もよく読みましたけれど、どのような話ですか。

――あるとき、藤村は、死期のせまった作家田山花袋（たやまかたい）を見舞うわけです。ところがそのとき、枕元で、「田山君、人間、死ぬときは、どんな気持がするものか」と聞いて、家族やまわりの人から顰蹙（ひんしゅく）をかってしまった。後日、藤村は、おたがいに文学をやっている仲間なのだから、他の人には聞けない真実を聞いておきたかった、と弁解しています。

木口　なるほど。やはり藤村も文学者として、少しでも「死」の実体をかいまみておきたかったのでしょうね。

池田　たしかに、「死」と対決しようとした文学者は多い。外国でも、たとえば、いま思いつくだけでもフランスのプルースト、ロシアのドストエフスキー、アメリカのヘミングウェーなどがいます。

――そうですね。日本でも夏目漱石、芥川龍之介、志賀直哉などの作品にもありますね。

池田　歌人、斎藤茂吉にも、有名な歌がある。

「死に近き母に添寝のしんしんと
遠田のかはづ天に聞ゆる」
これは、母の「死」の床のあたりにただよう沈んだ気配と、かわずの荒々しい鳴き声にたとえた「生」の息吹きとを対照させている。
――やはり、母だからこそ、子だからこそ、そうした実感がおのずからかもし出されてくるのでしょうね。
木口　私もかつて、池田先生の『母』という長編詩を、よませていただいたことがあります。その詩のなかで、
「その母子の伴奏のなかにのみ
人間という人間の
深い心性が光沢にみがかれ」
という節を、印象深くおぼえております。
――この詩には、名誉会長の詩境が美しく、力強くかなでられているような感じが

いたしますが。

池田　いやいや、私の詩はともかくとして、茂吉の詩は、母と子の生命の共鳴でしょう。

――なるほど。最愛の人が、いままさに死にゆかんとする。そのかたわらに結晶された「生死」のさかいめの瞬間を、茂吉は見事にうたいこんでいますね。

池田　すぐれた文学を志す作家の詩魂は、この厳粛なる瞬間に感じとった「生」と「死」とのあいだの深き状況を、決して見のがすことはできなかったのでしょう。

木口　なるほど。茂吉は医者でもあったわけですから、幾度か、死の瞬間に立ちあってきたことにもよるのでしょうね。

医学では「死」への不安はとりのぞけない

――最近も、あるお医者さんが、身近にみた患者の死の姿を一冊の本にまとめ、べ

ストセラーになりました。
それは「死」が、いかに深刻なものであるかをレポートしたものです。
木口　どんな内容でしたか。
――たしか、社会的な地位や名誉があり、日ごろは冷静な人でも、いざ死を迎えたときには、
「神さま、助けてください」
「死にたくない。やり残したことが、たくさんある」
「恐ろしい……」
等々、かなり取り乱してしまう、ということが載っていました。
木口　現代医学は患者の死への不安、恐怖感をとりのぞくことには無力ですね。
――どのように死を客観的に観察しても、またその認識を深めたとしても、そこから死の解決策を見いだすことには、つながらないような気がしますが。
池田　そうですね。

「死」についてだけは、それを客観的に認識する次元と、解決する次元とは、おのずから違うことになるでしょう。その人自身の生命というか、我というか、それが感じとる以外ない。

――なるほど。

木口　「死」の瞬間の不安、恐怖がいかなるものか、それは、死に直面した人しかわからない。ただ九死に一生をえた人が語る、死の体験というのはありますね。

――たまたまあります。とくに死の衝撃について、驚くような話がたくさんありますね。

ドストエフスキーの「死」の体験

木口　私も聞いたり、読んだりしたことがあります。銃殺台に立たされたが、銃から

弾丸が出ずに助かった。その一瞬で白髪になり、身体も老いてしまった、という人の話もありますね。

――そうですね。たしかドストエフスキーに、そうした体験があったと思いますが……。

池田　たしかにそうでしたね。

ドストエフスキーの場合は、あまりにも強烈な体験であったようです。それが一人のすぐれた文豪をうむ、大きなきっかけになっている。

――そういえば、名誉会長はかつて『ある文豪の生命（いのち）』という詩で、ドストエフスキーの文学と人間像に、鋭くせまっておられましたね。

池田　ずいぶんまえのことでしたが……。

木口　そうですか。ドストエフスキーの体験とは、どのようなものだったのでしょうか。

――私の記憶では、青年ドストエフスキーが当時、ロシアで発禁になっていた社会

主義思想家ベリンスキーの『ゴーゴリへの手紙』を、人前で朗読したことなどによって逮捕された。

そして危険分子の一人として、死刑に処される話だったと思います。

池田　そうです。

彼らは順番に目隠しされ、銃殺されることになった。

最初の三人がクイにしばられ、いままさに射たれんとする寸前に、皇帝からの処刑中止の指令が届く。そして、それを伝える白いハンカチが一人の将校の手で振られた。死をまえにした、このたった数分のあいだに、そのなかの一人はその場で発狂した。他の一人は、髪の毛がみるみる白髪になってしまった。

ドストエフスキーは三番目の組にいたが、彼自身もこのとき、言語を絶する衝撃をうけたといっている……。

このように記憶しているけれど、志村君、どうだろう。

――　要点は、そのとおりです。ところが、この処刑は民衆に皇帝の情け深さを示す

ために、わざと仕組まれた芝居だったんですね。

池田　そうそう、たしかに窮地に立たされた政治家、権力者たちが、青年たちの生命を政治の手段として利用した話ですね。

――　そのとおりです。

池田　いまも大なり小なり、このような方程式があると思う。われわれは常にめざめ、常に強く、常に連帯を組まなければならない。

いつの時代にもみられる、権力の奥の手といっていいでしょう。

そこからドストエフスキーは、人間にとっての「死」や、権力の魔性といったことをえがきつづける作家へと、大きく変貌していくわけです。

木口　なるほど。『罪と罰』をはじめ、『白痴』や『悪霊』など、彼の名作のうまれてきた背景がよくわかりました。

――　名誉会長の詩を拝見しますと、その後のドストエフスキーを人生の苦闘のみならず、大衆のなかに身を投じ「ますます充実した姿を没する」「その余影で後世を

震撼させる」とうたっておりますね。

池田　ドストエフスキーは、机上だけで「人生」や「死」を考えるようなことは、できなかったのでしょう。

木口　それにしても、死についていろいろな話がありますが……。つくづく、生命というものは不思議なものと思いますね。

――九死に一生をえた人でさえこうなのですから、実際の「死」というのは、ふつう想像することさえできないと思いますが、いかがでしょうか。

仏法で説いている「死」の瞬間

池田　そう思います。

仏法では、苦しみの「死」の瞬間について、

「先人一期の命尽て死門に趣んとする時、断末魔の苦とて八万四千の塵労門より色々

の病起て、競ひ責る事、百千の鉾剣を以て其身を切割が如し。之に依て眼闇く成て見たき者をも見得ず、舌の根すくんで云ひたき事をも云ひ得ざる也」（『昭和新定日蓮大聖人御書』第一巻、富士學林刊、『十王讃歎鈔』）と、厳然と説かれている。

木口　すごい御文ですね。

池田　そうです。

またさらに、

「又荘厳論に、命尽終る時は、大黒闇を見て深岸に堕るが如く、独り広野を逝て伴侶有ること無しと云て正く魂の去る時は目に黒闇を見て、高き処より底へ落入るが如くして終る。さて死してゆく時、唯独り渺々たる広き野原に迷ふ。此を中有の旅と名くる也」（前記、同御書）

――まったく厳しい御文ですね。

池田　ですから、こうした姿で死にゆく人は、もはや言葉をもたない、といっていいでしょう。ただただ、姿でその苦しみを訴えているだけです。

その瞬間をかたわらで見守る人が、こうした苦しみを、自己の想像力でうけとめているのです。

――いわば、代理体験をしているわけですね。

池田　そのとおりです。

本当の死の苦しみは、死んでゆく人しかわからないものです。

ですから、死という現実をまえにしては、財産も、名誉も、地位もなんの意味ももたなくなってしまう。まことに、厳しき人生の法則である。

トインビー博士と「死の思想」

――次元は異なりますが、死の実体にせまろうとして思索した人には、それなりの「死の思想」というものがありますね。

池田　そうですね。

トインビー*博士なども、その一人でしょう。たとえば博士は、

「生の最中に、われわれは死の中にいる。誕生の瞬間から、常に、人間には、いつ死ぬかわからない可能性がある。そして、この可能性は必然的に、遅かれ早かれ、既成事実になる。理想的には、すべての人間が、人生の一瞬一瞬を、次の瞬間が、最後の瞬間となるかのように生きなければならない」

といっている。

木口　非常に、考えさせられる話ですね。

池田　ただ博士も、こうした考え方は理想論であり、ふつうはむずかしい、ともいわれている。

しかし博士は、思索のはてに、次のように結論づけていた。

「人間が、この理想の精神状態を手に入れるところへ近づけば近づくほど、それだけ、立派な、そして、幸福な人間になるということである」と。

――なるほど。深い洞察ですね。かつて小林秀雄*さんが、死を解決する一つの手段

として、「人間の生と死に、じかにむかい合うことだ」といっていました。懇談したおり、それは、どういう意味かとたずねたことがあります。

木口　なんといっておられましたか。

――それは、「ふつう、個人が、死を理解することはむずかしい。だから、まず、人間のことをいちばんよく知っている人、また、死の問題をいちばんよくわかっている人のことを、まず研究することだ。それが第一歩だ」といっていました。

木口　なるほど。誰もが、個人のかぎられた一生のうちで、「死」を実感することはむずかしいですからね。

池田　そうです。

釈尊*の出家の動機も「四門遊観*」といって、生老病死*の解決をどうしたらよいか、であった。そのために、激しい修行と思索を約十年間つづけ、出離生死の法というものを見いだしている。

釈尊は、その自身の悟達をもって、民衆を救済したように発願したわけです。

木口　なるほど。その釈尊が悟達したその「法」とは、なんでしょうか。

池田　それが、二十八品の『法華経*』となるわけです。

現代における「出離生死の法」

――釈尊の時代の悟達と発願については、そういうことになりますが、現代すなわち、末法*という時代の仏法では、「出離生死の法」とはどのようになるでしょうか。

池田　御文には「生死も唯妙法蓮華経の生死なり」（『生死一大事血脈抄』）と。人間生命のみならず、宇宙森羅万象の一切をつらぬき、生と死にわたる根源の「法」を示されている。

木口　なるほど。生と死をつらぬく根源の法とは、すごい現実的な法となるわけですね。

池田　そのとおりです。三世永遠にわたる大法則です。この生死の二法をつらぬく

「法」とは、具体的かつ明快にいうならば、「南無妙法蓮華経」となります。この「妙法」こそが、「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」（『生死一大事血脈抄』）とも、説かれているわけです。

木口　すると、好むと好まざるとにかかわらず、この「妙法」にのっとる以外に、「生」も「死」も、根本的かつ完全なる解決はできなくなってしまう、という結論になるわけですね。

――そうしますと、末法の仏法では、この「生死」という問題をどのように示されているのでしょうか。

池田　簡単にいいますと、ふつう、生命は「生で始まり」、「死で終わる」と考えられている。

しかし日蓮大聖人は、生命とは三世永遠にわたるものであり、「生」も「死」も、生命にもともとそなわった「本有」の理であると説かれている。

木口　なるほど。

池田　ですから、この仏法の永遠の生命観について、御文では、「自身法性（じしんほっしょう）の大地を生死生死と転（め）ぐり行くなり」（『御義口伝』）、また、「我等が生死は今始めたる生死に非ず本来本有の生死なり、始覚の思縛解（しばくと）くるなり云云」（前記、同御書）と説かれております。

――なるほど。なるほど。

「妙は死、法は生なり」の意味

池田　そこでまた御文には、「妙は死、法は生なり」（『生死一大事血脈抄』）とも説かれています。

木口　なるほど。これは、たいへん深遠な哲理ですね。しかも、断定されて異論をはさむ余地はありませんね。

池田　わかりやすくいいますと、「生まれる」「死んでいく」……この生死という厳然

たる、生命に存在する実相そのままが妙法であるというのです。ですから、この一個の生命が、具体的にあらわれた状態を「生」とし、かくれた状態を「死」とみるわけです。

――なるほど。死後の生命が、たとえば、宇宙のなかにとけこんでいる、と聞かされても思議し、実感することができない。ゆえに、「妙は死」ということになるわけですね。

池田　深くは、代々の御法主上人猊下のご説法を拝していただきたいのですが。まあ、簡単にいえば、そうとっていただいてけっこうでしょう。経釈には「生死の二法は一心の妙用」（『天台法華宗牛頭法門要纂』）ともある。

木口　それは、どういう意味でしょうか。

池田　これも簡単にいいますと、このどうしようもない一個の「生」というものを発動させていくのが「妙」である。「妙」という力が原動力になっている。そして、この「生」が燃焼しきって、やがて、休息のために死におもむいていく。

すなわち御文には、「法界に開くは去の義なり」（『御義口伝』）とある。「去」つまり「死」のそれ自体は、宇宙の大生命に冥伏（みょうぶく）することとなる。そしてその宇宙根源の力、すなわち「妙」によって、新しいエネルギーを充電させながら、ふたたび「生」として誕生する。その間を「死」というわけです。

木口　わかるような気がします。もう一つうかがわせていただきたいと思います。

池田　どうぞ。

木口　「妙」が生を発動させる原動力ということは、どういうことですか。

「妙の三義」と人間の蘇生

池田　日蓮大聖人は、それを、「妙の三義」として説かれております。

三義とは、「開」「具足・円満」「蘇生」ということになります。

木口　「開」とは、どういう意味になりますか。

池田　わかりやすくいいますと、無限の可能性がしまわれた部屋の扉を開くことのできるような力、というようなことです。

つまり、「妙法」を信じ、行ずることにより、潑剌（はつらつ）と生命が躍動し、この宇宙をつかさどっている本源的な生命を、自己の生命力として開示していくことができる、という意義になるでしょう。

また宇宙が、無限に膨張しているといわれるのも、この「開」の義といえるでしょう。

――なるほど。「具足・円満」の義とは、どういうことでしょうか。

池田　これも簡単に申し上げれば、わずか一滴の水のなかにも大海の水と同じ成分、性質がある。大宇宙のなかの一個の生命にも、大宇宙の全素質がそなわっているという意味にもとれるでしょう。

木口　なるほど。わかるような気がします。アメリカの宇宙飛行士が、月世界から持って帰ってきた一塵にも、月全体の成分が含まれております。

宇宙を解明する、科学の基本的な考え方も、そこにあると思います。われわれをとりまく、どんな小さな空間にも、大宇宙と同じ法則や、力が支配しているというのが、アインシュタインの相対性理論*の出発になっていますからね。

池田　また、この「具足・円満」の義について、経釈には、「治し難きを能く治す故に妙と称す」とある。つまり、いかなる悩みや苦しみの人生であっても、希望へ、楽しみの人生へと転換せしめゆく無量無辺の力用がこの妙法にそなわっている、という意義もあるわけです。

――なるほど。「妙とは蘇生の義なり」（『法華経題目抄』）とは、たいへん有名な御文ですね。

池田　そうですね。

「蘇生」とは、活力を失った状態から、ふたたび生きいきとした根源の力がみなぎり、よみがえってくる意義です。

木口　宿命に泣く人、行きづまった人類には、たいへん希望にあふれる話であり、原

理ですね。

池田　「蘇生の義」とは、妙法をたもつことにより、一人も残さず生きいきと、かぎりなく生命変革を成し遂げていくということになります。それが、自己の人格完成の根本にもなる。さらにまた、長き宿命の道を転換しゆく力にもなる。

戦後有名な言葉になった、東大の南原繁総長（一九四五年十二月、東京大学総長となり、占領下にあって学問の独立を主張。その訓示や講演は警世の言として注目をあびた）の「人間革命」の意義も、ここにあるのではないでしょうか。この「人間革命」を軸として、社会に時代に、地域に世界へと貢献しゆくことが、私どもの眼目であり、使命であると思っております。

木口　すると、仏法を基調とした、また正法の信仰からなる、個人の目的観、社会への運動観、平和への方法論となるわけですね。

池田　そう思っていただいてけっこうです

「人間革命」とは生命蘇生の大運動

―― 南原総長は、昭和二十二年（一九四七年）の卒業式のときに「人間革命」ということをいったわけですが、その具体的方途はありませんでしたね。

木口 ええ、そうでしたね。

―― いま徳川家康のテレビドラマが評判になっていますが、原作者の山岡荘八さんも、なにかの本の「はしがき」に、「人間革命」という言葉を使っておりましたね。

池田 人びとが心奥ふかく希求するのは、無限の価値創造といえるでしょう。そのかぎりなき可能性をうむのは、人間それ自体である。ですから、無限に行きづまることのない法をたもつことが、人類の願望であり、要請となってくるのではないでしょうか。

木口 学問や、研究の世界も、そうです。

事業や団体においてもそうです。

池田　その意味で、私どもの信仰活動が、客観視すれば、すべての根本である生命蘇生の大運動ととらえていくことも、一次元としてできうるでしょうね。

木口　なるほど。よくわかりました。たしかに仏法は、「生と死」を宇宙大に広がる眼でとらえておりますね。私自身、まったく新鮮な、深い示唆をうけることができました。

私も同感です。また、多くのすぐれた識者も、それを感じはじめているようです。

たとえば、アメリカの有名な生態学者、ルネ・デュボス博士もその一人だと思います。かつて、名誉会長と懇談されたことがありましたね。

池田　ええ、いい方でした。博士とは文通もありました。先年亡くなられたようですが、忘れえぬ真摯で立派な大学者と、いまでも胸に残っています。対談したのはもう、十年もまえのことだったでしょうか。来日されたおり、ご夫妻で訪ねてこられま

した。

――いやじつは、私はその翌日であったと記憶していますが、博士のホテルにうかがったんです。そのとき、開口いちばんに、「池田先生は宇宙的、地球的にものごとを考え、そして、個人的、地域的に行動、実践されている方だ」と、感慨ぶかげに語っておられました。

池田　初耳だね（笑）、志村君は根っからのジャーナリストだね（笑）、いつも早いね。（爆笑）

宇宙に地球型生命の可能性

――ところで、今年（一九八三年）は例年になく、天文関係の新しいニュースがあいつぎましたね。

木口　ええ、私も研究者の一人として、たいへんにはりあいのある一年でした。

アメリカの生態学者，ルネ・デュボス博士と生命についての意見を交換する。（1973年11月28日）

―なかでも木口さんが最も関心をもたれ、現在の研究に力づけられたのはなんでしょうか。

木口　そうですね。やはり、宇宙に他の「地球型生命」が存在する可能性を追究するうえで、重大な手がかりとなったS・ポナムペルマ教授（アメリカ・メリーランド大学）の実験の成功です。

池田　教授の研究は、生命の起源に関する一歩前進の成果といえるわけですね。

―私たちは新聞報道の範囲でしか知りませんが、わかりやすくいえばど

ういうことなのですか。

木口　あの研究はたいへんむずかしいものですが、じつは、私が京都大学で教えをうけている林（忠四郎）先生の研究と関連してくる面があります。

池田　どのような点ですか。

木口　林先生は、われわれの地球がどうやって、できてきたかを研究されています。林先生の説は、地球誕生のドラマを、最も明快に解明しているといわれています。

――世界的にも、最も信用されている理論ですね。

木口　ええ、この宇宙には無数の銀河系が存在することを理論的に説いた、カント＝ラプラスの星雲説*を直接継承しています。

当時、この理論はデータ不足で、ひとつの予見であったわけです。

しかし現在は、惑星間探査の進展により膨大な量のデータが集まってきています。ですから、この理論が節目、節目で検証できるようになりました。

――なるほど。そうしますと宇宙や天体の解明も、すでにわかっている物理法則か

ら演繹的に未知の現象を推定し、そこからすべてを研究していくわけですね。

木口　そのとおりです。ガスやチリの集まりである星間雲が重力やさまざまな運動により、詳しくは省略しますが、原始惑星*という星の卵のようなものになります。この原始惑星は、さらに百万年くらいかかり、引力によって星間ガス*（原始大気）をとりこみます。この濃い大気は毛布効果とよばれ、保温作用をもちます。

――そこに微惑星が落下し、この惑星を熱くしていくわけですね。

木口　ええ、そのために原子惑星を構成している岩石や金属がすべて溶融し、重い金属は底に沈み、比重の軽い岩石は浮きあがり、しだいに分離がすすみます。

池田　なるほど。地球もその一つですね。

これがコア（核）とマントル（外とう部）の二重層をつくったのですか。

木口　そのとおりです。地球の場合、ちょうどそのころ、太陽がいまの一〇〇〇倍の明るさをもって輝きだすわけです。その結果、太陽からくる紫外線が地球の大気を吹き飛ばしました。

――その影響で、地球が冷えるにしたがい水分（H_2O）は海となり、二酸化炭素（CO_2）は石灰岩として海に溶け、光合成の作用で二酸化炭素から酸素（O_2）をつくり、現在の姿になったわけですね。

木口　その間、地球の表面には薄い地殻ができます。地下では溶岩が煮えかえっています。大気中はイオンも多く、いたるところで雷鳴がとどろき、隕石は頻繁（ひんぱん）に落下していたようです。しかしじつは、その最中に生命体の発生の準備が着々となされていたとみられているわけです。

――なるほど。

木口　さきほどのポナムペルマ教授の実験では、いまお話した地球の「原始大気」を想定しています。その混合気体に放電をすることにより、生物の遺伝暗号をになっている五種類の塩基を、ぜんぶ同時につくることに成功したわけです。

――教授はこの実験の結果、宇宙に「地球型生命」が存在する可能性がたかまったと述べているわけですね。

木口　そのとおりです。

生命の発生は絶妙の自然作用

池田　ところで地球誕生の初期には、生物に有害な紫外線はどうなっていましたか。

木口　さきほどお話したように、大気がなくなってしまったので、そのまま防御されることなく海面下一〇メートルまで達していました。

池田　現在でも、その有害な紫外線などの影響で、飛行機が飛べる高さには制限があるわけですね。

木口　そのとおりです。飛行機の場合は、さらに高エネルギーの宇宙線なども害になるので非常に危険です。乗客にとっては問題はありませんが、長時間滞空する乗員にとっては問題となり、これはきちんと検討されています。

初期の地球では、この紫外線により水を分解し、わずかにオゾンができます。また、

太陽の光による光合成で二酸化炭素から酸素ができ、酸素が現在の一〇〇分の一くらいまでふえてきます。そのためオゾンが多量になり、紫外線は海面下一〇センチ以上は入らなくなります。

――そこで、最初の生物が海中に発生するわけですね。

木口　ええ、大発生します。たちまち光合成で、酸素が現在の一〇分の一にまでふえ、オゾンによる紫外線の遮蔽（しゃへい）が完成するからです。

池田　なるほど。本当に壮大であり、また絶妙のなかの絶妙の自然作用という以外ありませんね。溜息（ためいき）が出ます。まあ、凡夫からみると、不可思議という賛嘆の言葉しかない……。

こうして一切の自然の条件が整えられ、地上に生物が進出したわけですね。

木口　そのとおりです。地上の生物は、海から生まれたわけです。

その時期はプレカンブリア代で、六億年以上前と現在ではいわれます。

――なにもないようにみえる宇宙空間に、地球というかけがえのない天体ができ

た。そしてその地球に、ありとあらゆる要素がからみ合い生命が発生する……。考えれば考えるほど、厳粛な気持になります。

木口　まったく、そのとおりです。しかもこの地球も、遠い未来には太陽とともに消滅してしまうわけです。

池田　まさに地球の「生」と「死」ということになる。宇宙に存在する森羅万象、ありとあらゆる生物も、物質も、この厳しき法則にのっとっている。

すべてが「生死」を繰り返す宇宙観

木口　ええ、ですから天文学者は星の進化を研究しているうちに、思わぬひとつのことに気がつきました。

――どういうことでしょうか。

木口　つまり、われわれの太陽系が死んでも、それで終わりではない。今度はそれがもととなり、また、想像もつかないような時間を経て、ふたたび新しい恒星が生まれ、惑星ができるわけです。

――ふたたび、太陽系のような構造ができる。

木口　そのとおりです。その繰り返された太陽系のような惑星に、人間と同じような高等動物が出現するかもしれないと考える科学者もおります。

池田　なるほど。まことに興味ぶかい話ですね。

木口　多くの天文学者は、こう考えています。星の成り立ちの研究は、現代科学の偉大なる成果である。

しかしその導き出された一つの答えは、じつは、すべてのものは「生死」を繰り返すという東洋仏法の宇宙観だったと……。

――なるほど。たしかに、「生死」が繰り返されるという概念は、西洋哲学には、厳密な意味ではありませんからね。

木口　しかも、元素の起源の理論からいって、われわれの地球の土も植物も動物も人間も、すべてその淵源（えんげん）は、初期の宇宙にあった簡単な構造の元素にあるわけです。またこの宇宙のいろいろな構造、たとえば銀河や星も、その源はビッグバン*以降の初期宇宙のウズだった。

――つまり、このわれわれの手や足もそのウズだった（笑）。気が遠くなるような話ですね。（笑）

木口　科学者は、そう考えるわけです。

たとえば、ＮＡＳＡの宇宙科学研究所の初代所長として有名なジャストロー教授は、この大宇宙では、無生物界が生物界と相互に密接な関係を結んでいると主張しています。

――なるほど。

木口　そして教授は、「天文学者たちが語る『創世記』は、西洋の科学とその精神がもたらしたものであるにもかかわらず、なんと東洋の仏教徒や哲学者が考えていた

ことと、きわめてよく似ている」と述べています。

池田　なるほど。たしかに仏法は、正報と依報を密接不可分なものとしてとらえている。また、御文には「正報をば依報をもつて此れをつくる」（『瑞相御書』）ともあります。戸田先生はよく、「真実の宗教は、科学と相反したり、矛盾しない」といわれていました。まったく、そのとおりと思います。

木口　ジャストロー教授はもちろん、仏法の全体を把握しているわけではないでしょうが、原始宇宙のガス雲から人類もうまれた、という革命的発見が、こうした一つの結論をもたらしているわけです。

注解

〈あ行〉

IRAS　地上では大気の影響で観測できない微弱な赤外線をとらえるための天文衛星である。この衛星は、アメリカ・イギリス・オランダ三国の共同プロジェクトであり、一九八三年一月打ち上げられた。

阿育大王（あそかだいおう）　生没年不明。マウリア朝第三代の王で、インドを統一した最初の王。在位はBC二六八年～BC二三二年ごろとされる。武力による征服をやめ、戦争の放棄・福祉政策・平和外交など平和主義の政治を行った。

アポロ計画　アメリカの月着陸有人飛行計画。一九六九年アポロ11号が打ち上げられ、アームストロング船長とオルドリン飛行士は、人類初の足跡を月面上にしるした。17号まで計六回の月着陸が行われ、十二人が月面に降り立った。

安楽行品（あんらくぎょうほん）　法華経安楽行品第十四のこと。迹門（しゃくもん）の最後の品にあたる。四安楽行が説かれている。

宇宙塵（うちゅうじん）　宇宙空間に存在する微粒物質。これが地球に落下してくると大気との摩擦により発光し、流星となる。また、星間物質のうち微固体の煙状物質をさすこともある。

依正不二（えしょうふに）　依報（えほう）と正報（しょうほう）が二にして不二であることをいう。正報とは生命活動をいとなむ主体をいい、その身がよりどころとする環境・国土を依報という。この二つは、ともに自己の過去の業（行為）によって招いたものであるから同じく報という。

つまり生活体である自己と生活環境である自然とは、観念のうえでは区別できるが、実際には分離することのできないものであり、両者の関係は而二不二（二にして二ならず）であり、相依相関性を成している。

陰陽道　古代中国の陰陽五行説にもとづいて天文・暦数・相地などをあつかう術。大宝令に規定があり、陰陽寮（陰陽道に関することの役所）がおかれたが、しだいに俗信化した。

〈か行〉

ガリレオ（Galileo Galilei 1564～1642）　イタリアの天文学者・物理学者・哲学者。近代科学の父。力学上の諸法則の発見、天体の研究など功績が多い。コペルニクスの地動説を是認したため、宗教裁判にふされた。主著『新科学対話』『天文学対話』など。

勧持品　法華経勧持品第十三のこと。持品ともいう。釈尊滅後の末法には、法華経をひろめる行者に三類の強敵が競いおこることが示されている、その三類の強敵を説いた文を「勧持品の二十行の偈」という。

カント（Immanuel Kant 1724～1804）　ドイツの哲学者。批判哲学の樹立者。ニュートン力学なども研究し、太陽系の構造と起源に関する論文を書いた。主著『純粋理性批判』『実践理性批判』『道徳哲学原論』など。

カント＝ラプラスの星雲説　太陽系は最初は星雲状で、回転運動の状態から収縮して環を生じ、星ができ、元の物質の周囲を回転するようになって惑星が生じたとする説。カントの創説をラプラスが力学的に補説したもの。

元品の法性　根本の悟りのこと。元品の無明に対する語。元品は根本の意で、法性は真実不変の本性のこと。つまり、衆生の生命にある真理・智慧の根本となる本性のことをいう。

元品の無明　衆生の生命に本然的にそなわっている根本の迷いのこと。元品は根本の意で、無明は物事が明らかにみえないことをいう。元品の法性に対する語。

境智の二法　境とは認識・価値判断の対象として客観視した世界をさし、智とは認識し評価する主観的智慧をいう。仏法では、この境智が深く融合しあうところに価値を生じ幸福があると説く。

下種益の仏　下種益とは、三益（下種益・熟益・脱益）の一つで、種蒔にたとえて、仏が衆生の心田に成仏の種子を下ろすことをいう。つまり末法の衆生は、釈尊に縁がないゆえに、妙法を下種され信受することによってのみ成仏できる。その教主・日蓮大聖人をさして、下種益の仏という。

ケプラーの法則　ケプラーが、惑星運動について発見した三法則。①惑星は太陽を焦点とする楕円軌道をえがく。②太陽と惑星を結ぶ動径の面積速度は惑星ごとに一定である。③太陽と惑星の平均距離の三乗と公転周期の二乗の比は、どの惑星についても同じである。

牽牛星　鷲座の首星アルタイルの漢名。和名では彦星という。七夕の伝説で有名。天の川をはさんで織女星と相対して白色光を放つ。表面温度七五〇〇度、質量は太陽の一・八倍と推定され、秒速二六〇キロ以上の急速で自転しているのが特徴。

原始惑星　微惑星（星の誕生にあたり固体層の重力分裂の結果うまれたもの）が、相互に衝突・合体を繰り返しできる惑星。質量が10^{25}グラム（ほぼ月

の質量）に達したものをいう。

業　過去におけるすべての所作によって、未来にもたらされる結果の原因となるもの。業因ともいう。善悪に分けて善業と悪業がある。また過去世の業を宿業といい、現世の業を現業という。

国連平和賞　国連に大きな貢献のあった人びとに国連事務総長から授与される賞。

小林秀雄（1902～1983）　独自の言語論を基調とし、プロレタリア文学の観念性を批判。近代日本文学の再検討、創造的批評の実践などをめざし活躍した。正統芸術派を代表するとともに、近代批評を創造した評論家として有名。主著『私小説論』『ドストエフスキーの生活』『無常といふ事』など。

〈さ行〉

三界の相　迷いの煩悩にわずらわされて、いつまでも六道輪廻を繰り返している三種の境界（欲界・色界・無色界）のこと。欲界とは食欲・性欲などの欲望の世界、色界とは物質だけの世界、無色界とは物質を超越した精神世界のことをいう。

三角測量　三角形の一辺とその両側の二角を測定して、他の諸量を三角法の計算で求める方法。その一辺を基線とよび、ふつう距離が既知の線を用いる。

三毒　善根を毒する煩悩で、貪瞋癡の三種。三根ともいう。貪とはむさぼり愛すること、瞋とはいかり、癡とは無知・おろかなことの意。この三種の煩悩は、一身煩悩の根本となり、衆生の心身を今世・後世にわたって毒するので三毒という。

四元素説　物質を構成する要素として考えられた四元素（土・水・空気・火）のこと。古代ギリシャの哲学者のなかで、タレスは水を、アナクシメネス

は空気を、ヘラクレイトスは火をそれぞれ元素とする一元論をとなえた。エンペドクレスはこれに土を加えた四元素説をとったが、これはアリストテレスに受け継がれ確立された。

十界互具　爾前経における十界各界の固定的な差別を取りはらい、法華経にいたって十界のそれぞれに、さらに十界がそなわっているとしたこと。つまり十界は、一個の生命にそなわっている渾然一体のものとして明かされた。これは一念三千の重要な原理となっている。

死魔*　四魔（煩悩魔・陰魔・死魔・天子魔）の一つ。仏道修行をする者が、死によって修行の道を閉ざされたり、その死によって他の者が仏法に疑いをもつことなどをいう。

四門遊観　釈尊が出家する以前、悉多太子のときに王城の四つの門から出て、人身に生老病死の四苦があるのを知ったこと。修行本起経によると、東門から出て老人をみ、南門で病人に会い、西門で死人をみ、最後に北門から出て沙門（出家者）に会い、その清浄な姿をみて出家得道の望みをおこしたという。

釈尊　釈迦牟尼世尊の略。釈迦の尊称。釈尊は過去世における修行によって、三千年前にインドに出現し、十九歳のときに出家、三十歳で成道したとされる仏である。そして成道のときより五十年の間、八万法蔵を説法し、最後の八年間で法華経二十八品を説いた。

宿業　過去世において、身口意の三業の積み重ねによってつくった業因のこと。よい宿業（善業）とわるい宿業（悪業）があるが、一般的にはわるいほうの意味に使われる。悪業は、三大秘法の御本尊の力によって、よく転換することができる。

衆生所遊楽　法華経寿量品第十六の文。「衆生の遊楽する所なり」と読む。衆生とはわれわれ凡夫のことで、所とは娑婆世界（現実社会）、遊楽とは最高の幸福境涯をさす。すなわち、寿量品で娑婆即常寂光土（最高の浄土）と説きあかされ、苦悩と無常の現実社会を妙法をたもつ衆生の最高の遊楽の場所と転じたことをいう。

寿量品　法華経巻六如来寿量品第十六の略。釈尊の本地久遠実成をあかした重要な品。その奥底には、日蓮大聖人こそ末法の御本仏であり、南無妙法蓮華経のみが衆生を救済できる唯一の法であることが説かれている。

定業　苦楽の果報をうけること、またその時期が決定している業のことをいう。善果をうけるのを善の定業、悪果をうけるのを悪の定業という。不定業に対する語。

生住異滅の四相　四有為相ともいう。一切の事象が生じ（生相）、存続し（住相）、変化し（異相）、消滅する（滅相）過程をいう。人間などの一生にあてはめた「一期四相」（大の四相）、瞬間の事象にあてはめた「刹那四相」（小の四相）などがある。

成住壊空　成劫・住劫・壊劫・空劫の四劫のこと。宇宙・生命その他いっさいのものの流転をあらわす。成劫は成立・形成する期間、住劫は安定期間、壊劫は壊滅していく期間、空劫は壊滅が終わり、空となる期間をいう。

生老病死の四苦　人の一生における根本的な四種の苦しみのこと。四苦八苦のなかの四苦のこと。①生苦（生まれ出る苦しみ）。②老苦（年老いていく苦しみ）。③病苦（病気による苦しみ）。④死苦（死ぬことの苦しみ）。

諸行無常・是生滅法　「諸行は無常にして是れ生滅の法なり」と読む。この世のあらゆる存在は、生と死を間断なく繰り返して移り変わり、決して同じ状態に止まることがない生滅の法であるということ。涅槃経巻十四の文。

諸天善神　法華経の行者を守護し、民衆や国土を守り、福をもたらす働きをいう。梵天・帝釈・八幡大菩薩・天照大神をはじめとする一切の諸天・諸菩薩の総称で、それ自体は信仰の対象ではなく、正法護持としての存在である。

真空冥寂　不可思議の意で仏の悟りのこと。妙法蓮華経の妙をさす。『修禅寺相伝日記』等にある。

星間ガス　宇宙空間に星のほかに存在する薄いガスのこと。その元素組成は重量比七〇～七五パーセントが水素、二三～二八パーセントがヘリウム、残りはそれより重い元素からなる。

赤色巨星　半径が大きく、表面温度が低くて色の赤い星のこと。大きいものでは、その半径は太陽の数百倍にもおよび、地球の公転軌道の大きさに匹敵する。うしかい座α星・オリオン座α星などがその典型である。

嘱累品　法華経嘱累品第二十二のこと。一切の菩薩に対する総付嘱が説かれている。嘱累とは、仏が教法を菩薩に付嘱すること。

〈た行〉

帝釈天　能天帝のこと。仏法を守護する諸天善神の一人。釈迦提桓因陀羅の訳。インド神話上の最高神で雷神。仏教では梵天王と共に護法の神となり、須弥山に住み、三三天を統領するとされる。

大乗仏教　小乗教に対する語。大乗とは大きな

乗りもののことで、小乗（小さな乗りもの）よりも多くの人々を理想境へと運びゆく意である。利他（他を利益すること）の菩薩道を説き、一切衆生を成仏させるために説いた教えをいう。

第六天の魔王　六欲天（四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化楽天・他化自在天）の最上に位する他化自在天王のこと。魔の領主。正法に反対し、成仏を妨げ生命力を奪う働きをなす。

ダーウィンの進化論　生物進化の仕組みを説明したダーウィンの説。生物は神によって個々に創造されたものではなく、きわめて簡単な原始生物から進化してきたものであるという理論。

脱益の仏　脱益とは、過去に下種された仏の種子が調養されて仏と同じ境涯になる意で、脱益の仏とは、インド応誕の釈尊をさす。下種益の仏に対する語。

竜口の法難　文永八年（一二七一年）九月十二日、幕府の役人平左衛門尉頼綱により、竜口（鎌倉時代幕府の刑場があったところ・現在の神奈川県藤沢市）において日蓮大聖人が斬首されようとした法難をいう。

中性子星　ほとんどが中性子から構成されている天体。恒星が進化の最後の段階で爆発をおこすとき、外部は吹き飛ぶが、中心部は強圧で押し固められ、超高密度の天体ができる。太陽と同じくらいの質量だとすると半径が約一〇キロに固まるので、その密度は一立方センチに富士山と同じくらいの質量がある計算になる。

伝教（767～822）　平安初期、日本天台宗の開祖・最澄のこと。著書に『法華秀句』『顕戒論』『守護国界章』など。

天台（538～597）　中国天台宗の事実上の開祖。智

者大師ともいう。中国の南三北七の十師を破り、五時八教の教判を立てて迹門の法華経を中国にひろめた。主著に『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の法華三大部など。

電波望遠鏡　天体から放射される宇宙電波・太陽電波などを測定する装置。微弱な電波を検出するため、巨大なアンテナと高性能の受信増幅器が必要。世界最大としては、西ドイツのマックス・プランク研究所に口径一〇〇メートルのパラボラアンテナをもったものがある。

トインビー(Arnold Joseph Toynbee 1889～1975)　イギリスの歴史学者。人間の自由な意志と行動による歴史・文化の形成を主張し、鋭い文明批判を展開した。主著『ギリシアの歴史思想』『歴史の研究』『試練に立つ文明』など。

戸田城聖(1900～1958)　創価学会第二代会長。石川県に生まれ、北海道で少年時代をすごす。その後上京し、創価学会初代会長牧口常三郎に師事。戦時中、治安維持法違反で牧口会長と共に投獄される。牧口会長は獄死し、戸田は二年間の獄中生活をおくる。戦後、創価学会再建にあたった。著書に『推理式指導算術』『戸田城聖全集』など。

毒気深入　法華経如来寿量品第十六の文。「毒気深く入って」とよむ。衆生の心が、貪瞋癡の三毒などでおかされており、素直に妙法を信受することができないという意。

〈な行〉

ニュートリノ　中性子がベータ崩壊で陽子と電子にこわれるときに放出される中性の素粒子。中性微子ともいう。電荷・質量ともゼロと考えて矛盾はない。現在まで、三種類のニュートリノの存在が確

認されている。

ニュートン(Isaac Newton 1643~1727) イギリスの数学者・物理学者。万有引力・微分積分学・光学の三大発見をなした。主著『プリンキピア』のなかで、力学原理・引力の法則・太陽系の星の運動などを述べ、近代科学理論を発展させた。

〈は行〉

ハイゼンベルク(Werner Karl Heisenberg 1901~1976) ドイツの理論物理学者。マトリックス力学・不確定性原理を提唱。量子力学建設の中心人物。ノーベル賞受賞。主著に『量子論の物理的基礎』他。

白色矮星(はくしょくわいせい) 白色光を放つ半径の小さな恒星で、マッチ箱ていどに一〇トンの質量をもつ高密度星である。白色は高温を意味するが、光量は少なく非常に暗い。シリウスの伴星が代表例としてよく知られている。

八万法蔵(はちまんほうぞう) 釈尊が説いたすべての教えをいう。八万は実数ではなく、多数の意。八万四千の法門ともいい、八万蔵と略すこともある。また法蔵は、宝蔵とも書く。

ハレー彗星 大彗星の一つ。一六八二年、イギリスの天文学者ハレーが初めてその軌道を計算。最近では一九一〇年に出現。周期は七六・〇二年で、次回の近日点通過は、一九八六年二月の予定。

万有引力(ばんゆういんりょく)**の法則** ニュートンによって発見された物体間に働く引力の法則。二つの物体間に作用する引力は、その質量の積に比例し、距離の平方に逆比例するという法則。ニュートンは、これによって天体の運行を説明した。

ビッグバン 宇宙は過去のある時点に、きわめて

小さく、超高温・超高密度の状態から爆発的に開闢し、膨張速度を減じながら現在にいたっているというビッグバン説で、宇宙創世期の初めに起こったとされる大爆発のこと。

不確定性原理　量子力学の確率的性格は本源的なものであるという主張。ドイツの理論物理学者ハイゼンベルクが提唱した。電子などの一つの系において、二つの物理量を両方とも正確に測定することは、原理的に不可能な場合があることを具体的に示したもの。

不可思議境　天台の摩訶止観にある。不可思議とは思議できないこと、考えられないことをいう。境は境界の略で客観世界のこと。すなわち、衆生の一念に三千の諸法が具しているとは、考えもおよばないことをいう。

変光星　明るさが変化する恒星。食変光星（連星がたがいに、かくしあうもの）と物理的変光星（恒星が膨張収縮するもの）とがある。変光の周期は数時間から数年までとさまざまで、また周期の決まらない不規則変光星もある。一五九六年、ドイツのファブリツィウスが初めて発見した。

ボーア（Niels Henrik David Bohr 1885～1962）デンマークの物理学者。量子条件、振動数条件などから原子の構造を明らかにし、量子論の発展に尽くした。また彼の提唱した相補性原理は、物理学にとどまらず哲学の認識論にまで大きな影響をあたえた。ノーベル賞受賞。

法器　一切衆生の生命が尊極の仏性を内に蔵した妙法の当体であることをいう。

方便現涅槃　法華経如来寿量品第十六の文。「方便して涅槃を現ず」と読む。死（涅槃）とは生命が滅することではなく、次の新しい生のための方便で

あるという意味。

法華経　釈尊が説いた八万法蔵の諸経のうち第一の経典。通常、中国の鳩摩羅什が訳した『妙法蓮華経』八巻二十八品のことをさす。

発迹顕本　垂迹（仮の姿）を開いて本地（真実の姿）を顕わすこと。釈尊においては、始成正覚を開いて久遠実成を顕わすことをいい、末法における発迹顕本は、日蓮大聖人が竜口の法難を機に久遠元初自受用報身如来の本地を顕わされたことをさす。

法性の智火　妙法の智慧を火の作用にたとえたもの。法性は諸法の実体、悟りをいう。火には照と焼の二つの意味があり、妙法が生死の闇を照らし、煩悩の薪を焼く効用をもつことが示されている。

梵天　大梵天王のこと。三天（大梵天・梵輔天・梵衆天）の一つ。娑婆世界の主とされ、帝釈天王と共に正法をひろめる者を守る働きをする諸天善神である。

煩悩　人間の心身を煩わし悩ませる種々の精神作用のこと。惑・随眠とも訳す。二種に大別できる。①根本煩悩。すべての煩悩の根本になるもので、貪・瞋・癡・慢・疑の五鈍使と有身見・辺執見・邪見・見取見・戒禁取見の五種の悪見など。②随煩悩。根本煩悩に付随するもので、放逸・懈怠・不信などの二十種をいう。

〈ま行〉

末法　三時（正法時・像法時・末法時）の一つ。釈尊滅後二千年以降のことで、闘諍堅固・白法隠没とされ争いが絶えず、釈尊の仏法が効力をなくしてしまう時代をいう。

文上・文底　文上とは経文の上・表面のことで、

元意を読みとるのではなく、経文を文字どおり読むこと。文底とは、奥底・根底の意で、経文を表面で読むのではなく、もう一重立ち入って、さらに深く読むことをいう。

〈ら行〉

霊鷲山（りょうじゅせん）　古代インドのマカダ国王舎城の東北にあった山の名で、霊山ともいう。釈尊はこの地で法華経などの諸経を説いたといわれる。山頂が鷲に似て、鷲が多くいるためこの名がつけられた。

注1　鉄隕石は地球の核（コア）に、石鉄隕石はコアとマントルの境界物質に、石質隕石はマントルあるいは地殻にそれぞれ相当すると考えられる。

注2　日寛（にちかん）上人は、『蓮祖義立の八相』の中で、「夫（そ）れ釈尊は、霊鷲山に於て妙法を演説し霊山の艮（うしとら）に当る跋提河（ばっだいが）の辺（ほと）り沙羅林（しゃらりん）にして入滅したまえり。聖人は身延山に於て妙法を講誦（こうじゅ）し、延山の艮（うしとら）に当る田波河（たまがわ）の辺り池上邑（むら）にして寂に帰す。古今道同じく応（まさ）に所以（ゆえ）あるべし」と、解釈されている。

著者略歴

創価学会名誉会長，創価学会インタナショナル会長，日蓮正宗法華講総講頭。富士短期大学経済学科卒業。創価大学・(財)民主音楽協会・公明党他の創立者。
1983年，国連平和賞受賞。モスクワ大学・ソフィア大学名誉博士。北京大学・サンマルコス大学名誉教授。
主な著書，『池田会長全集』(全10巻)『人間革命』(現10巻)『21世紀への対話』(A・トインビーとの対話集)『生命を語る』(全3巻)『人間革命と人間の条件』(A・マルローとの対話集)など多数。

「仏法と宇宙」を語る　検印廃止
第二巻　定価　一〇〇〇円
昭和五十九年五月三日　初版
昭和五十九年六月五日　五刷
著者　池田大作
発行者　富岡勇吉
発行所　株式会社　潮出版社
電話　東京(03)230〇七四一(販売部)
230一四六八(編集部)
振替　東京五―六一〇九〇
郵便番号一〇二
(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。)

印刷　図書印刷㈱　　製本　東京美術紙工

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合は予め小社あて許諾を求めて下さい。